夕日と鏡と私のトラウマ

山石リコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夕日と鏡と私のトラウマ

【Ｎコード】
Ｎ８９８５Ｔ

【作者名】
山石リコ

【あらすじ】
夕暮れ時に侵入した廃校は、奇妙な世界への入り口だった。
半分透明な男に連れ去られた麻奈がそこで目にしたのは、異形の姿の男たち。化け物じみた姿の彼らは、とうに正気を失っていた。
閉ざされた廃校から出るために、麻奈は懸命に出口を探し出す。タイムリミットは、自分の姿が変わるまで……。

奇妙な迎え　1

夕暮れ時には何かが起こる。昔から人々はその時刻を逢魔ヶ時と呼んで恐れてきた。なぜ、そう呼ばれるのか……。それは、文字通り「逢う」からだ。魔と呼ばれるモノに。

腕時計を覗き込みながら、水上麻奈は誰もいない廃校の前で一人悩んでいた。目の前の廃校に侵入して近道をするべきか、それとも普段使う道を通って見たいテレビ番組を見逃すか。

今日に限ってバスが遅れるなんて本当についていない。こんなことなら最後の講義を欠席して、早く帰ってくればよかったと麻奈は後悔していた。

今日は朝から小さな不運が重なっている。麻奈は襟元にそっと手をやった。いつの間にか、一番上のボタンがぐらぐらと揺れている。あと一息で取れてしまいそうだ。

おまけに、さきほど何かに引っ掛けて破れてしまったレギンスを見ると、ため息がこぼれてくる。ショートパンツから伸びる太ももの裏側に引きつれたような破れ目が出来ていて、そこから日に焼けていない肌が覗いていた。

この破れ目のせいで、どんなにバスの中で恥をかいたことか。麻奈は今考えただけでも、恥ずかしさで消えてしまいたい思いに駆られる。

もう一度時計に目をやった。こうして迷っている間にもどんどん

時間は進んでいく。辺りは日が沈みかけているせいで薄暗く、廃校には不気味な影が落ちている。僅かに西の空が茜色を残していたが、濃い藍色に押し出されて今にも消えそうだ。

散々考えた挙句、麻奈は錆だらけの校門をそっとずらし、意を決して中に足を踏み入れた。どうしても今日のドラマは外せない。何しろ最終回なのだ。

久しぶりに人を招きいれたであろう学校は、奇妙なことに喜んでいるように麻奈には感じられた。麻奈はきょろきょろと辺りを見渡した。校庭には２００メートルトラックの痕が所々剥げかけながらも未だに残っている。

「夜の学校って気味悪いなぁ」

大きな学校である。生徒数もかなり多かったのだと容易に想像できるが、地方の公外に建てられたこの学校は、少子化が進んだために何年か前に廃校になってしまっていた。

もっとも、大学に通うために一年前に引っ越して来たばかりの麻奈にはそれ以上の事は分からないのだが。

草雑だらけの寂しい校庭を抜けて、校舎を迂回するように歩き出した。Ｌ字型の校舎をぐるりと回ると、奥には中庭と体育館がある。その先にある裏門を通り抜けようと麻奈は考えていたのだ。

ここに入るのは初めてだが、近くを通る度に何となく目をやっていたので、大まかな造りは知っていた。

人気の無い校舎は静まり返っていて、校庭に流れる空気までひんやりと冷たく感じる。それはきっと、ただ単に日が沈んでしまった

からだと思うことにした。

人の居ない建物は傷むのも早い。校門には錆が浮き出ていたし、コンクリートの校舎もあちこち色褪せ、ひび割れていた。それらを見ていると、何とも物悲しい気持ちにさせられる。

一つ身震いしてから、麻奈は殆ど駆け足で校舎を迂回して裏口へと抜けて行った。脇目も振らずに走っていたせいだろう、校舎の中からじっと自分を追いかけるたくさんの視線に、ついに麻奈は気付く事は無かった。

家に着いてから、麻奈はまずテレビの電源を入れた。

「間に合った」

それから破れてしまったレギンスを脱ぎ捨て、買い置きしている冷凍食品を電子レンジに放り込んだ。朝のうちにタイマーでセットしていたご飯を茶碗によそっている間に、テレビからドラマの主題歌が聞こえてきた。

一度見たことがある再放送だが、麻奈の好きな俳優が出ているので毎日欠かさず見ている。

麻奈は茶碗を持って慌ててテレビの前に座った。一日の中で一番好きな時間だ。しかし、今日はその時間をゆっくりと味わう事は出来なかった。なぜなら、テレビの前に座ると同時に、ピンポーンと間延びしたチャイムの音が玄関から聞こえてきたのだ。

「信じられない！　こんな時に」

麻奈はイライラしながら乱暴に鍵を開けた。

このアパートのドアには覗き穴が付いていない。勿論、モニターは言わずもがな。そのため、来客のたびに警戒しながらドアを開けなければならない。しかし、今日は早くテレビの前に戻りたかったために、麻奈は勢い良くドアを開け放った。

ドアを開けると、そこには若い男が立っていた。麻奈は見覚えのない男を見て眉を寄せた。宅配便や新聞関係の者では無いのは一目で分かった。

男は胸の開いたセーターを着て、その上にラフなジャケットを羽織っていた。光沢のある細身の黒いパンツと黒光りする皮の靴、指にはたくさんのリングが光って見える。両耳にはピアスがずらりと並んでいて、開いた胸元にはシルバーのネックレスが幾重にも巻かれていた。

「こんばんは」

男がそう言って丁寧にお辞儀をすると、彼の胸のネックレスがシャラシャラと音を立てて鳴った。

「どちら様ですか」

麻奈の声は固い。男の整った顔立ちは良く見れば麻奈の好みなのだが、何とも言えない奇妙な違和感を彼から感じた。はっきりいって胡散臭い。怪しむ麻奈を気にも留めず、男はにこやかに笑って言った。

「夜分遅くに申しわけありません。突然の訪問にさぞ驚いているでしょうが、どうしても貴女にお聞きしたい事がありまして」

麻奈は眉間の皺を深くした。男は構わずに話しを続ける。

「貴女、先ほど何処かに立ち寄りませんでしたか」

「……は？」

思わぬ質問を受けて、間の抜けた返事を返してしまう。なぜそんな事を聞かれなければならないのか、さっぱり分からない。麻奈は完全に不振人物を見る目つきで男を眺めた。

「失礼」

男はそう言うと、麻奈の左腕を素早く掴んだ。慌てる麻奈を無視して、男は掴んでいる麻奈の腕を顔の近くまで引き寄せた。どうやら腕時計を凝視しているらしい。覗きこむように俯いている男の頬に、癖の無い黒い髪がさらさらと落ちてきて、麻奈はつい男に目を奪われていた。

男が目線を上げる。前髪越しに男と眼が合い、気まずくなって麻奈の方が先に視線を逸らした。男はくすりと笑うと、腕をそっと放した。

「やはり、私達の前を通ったのは貴女ですね。この止まった時計が

何よりの証拠です」

「え、そんな？　電池入れ替えたばかりなのに」

その時の麻奈は、腕時計を確かめる事に夢中で、男がドアをゆっくりと閉めた事に気が付かなかった。

奇妙な迎え　1（後書き）

読んで頂いてありがとうございます。初めての小説&投稿でドキドキしています。ご意見、ご感想頂けたら幸いです。どうぞよろしくお願いします。

奇妙な迎え　2

カチャンと鍵が閉まる小さな音が聞こえた。麻奈がはっとして顔を上げると、男は唇の端を上げて麻奈を見下ろしていた。

「ちょっと、それ以上入らないで！　警察を呼びますよ」

麻奈は携帯を取り出そうとしたが、ポケットに届く前に男の手が素早く伸びてきて、震えるその手を捕らえてしまった。麻奈は恐怖で声も出ない。男は優しく諭すように囁いた。

「怖がらないで下さい。貴女に危害を加えるつもりはありません。ただ、お願いがあるのです。私と一緒に来てください」

麻奈は首を振った。

「お、お金なら鞄の中にお財布が入ってるから、それを持って行って」

男も困った顔で首を横に振った。

「お金が欲しい訳ではないのです」

男が麻奈の耳元に顔を寄せて囁く。

「じゃあ、一体何が目的なの？」

「貴女が必要なんです。残念ですが、今は理由を説明している時間がありません」

「え？」

「貴女も選ばれたのだから」

麻奈は意味深な言葉に首を捻る。男はそれを無視すると、麻奈の手を強く引いて玄関先へと下りるように促した。

「さぁ、急ぎますよ。靴を履いて下さい」

麻奈は動揺していたが、ここで下手に騒いでは駄目だと思った。男に片手を掴まれている以上、抵抗しては危険だ。今は大人しく男に従って、外に出てから誰かに助けを求めよう。そう心に決めて、麻奈は実にしおらしく頷く。

恐る恐る自分のブーツを引き寄せて片足を入れ、もたつきながらもチャックを閉めた。

屈んだ拍子に男の黒い靴が目に入った。良く磨かれた上品な革靴。だがそれを見た時、やはり何か違和感を覚えた。

麻奈はそれを見た時、初めは錯覚だと思った。拉致されようとしている異常な精神状態が作る幻、きっとそうに違いない。男の足は皮靴から上の部分が半透明に透けていた。

「透けてる」

麻奈は思わず口に出てしまった言葉に自分で驚いた。何度瞬きしてみても、男の黒いパンツを通して玄関のタイルがくっきりと見て取れる。恐る恐る男を見上げると、悲しそうな瞳とぶつかった。

まさか、幽霊？だろうか。

「言っておきますが、幽霊じゃありませんよ」

麻奈の心を読んだかのように男がため息を吐いた。

「説明は後です。早く、もう時間がありません」

男に急かされて、麻奈は震えながら片手でブーツのチャックを上げた。もう一本の手は未だ男に掴まれたままなので、酷く履きにくい。男は麻奈が靴を履くのを見届けてから、少しでも距離を保とうとしている麻奈の腰に手を回して抱き寄せた。

「ちょっと」

抗議の声を上げる麻奈を無視して、男はそのまま部屋へと上がっていった。

「あ、土足」

「すみません。あぁ、この鏡が良さそうですね」

男は寝室に置いてある姿見の前に立った。

それは頭の先からつま先まで映すことが出来る大きな鏡で、麻奈が実家から持ってきた物だった。今は恋人のように寄り添う二人が映っていて、その姿はとても誘拐犯とその被害者には見えなかった。

男は、鼻がくっ付きそうなほど近づいて鏡を覗き込むと、勢い良く振り向いた。

「しっかり私に掴まって、舌を噛まないように気をつけて下さい」

「は？」

要領を得ない麻奈を置いてけぼりにして、男はそのまま鏡に向かって大きく一歩踏み出した。引きずられるようにして麻奈も続く。

鏡に激突する衝撃を予想して、麻奈は思わずギュッと目を閉じた。しかし、予想に反して冷たい感触が全身を覆っただけだった。二人はそのまま、まるで水の中へと入って行くように、鏡面を波立たせて鏡の中へと入っていった。

奇妙な迎え　2（後書き）

少しでも楽しんで頂ければ嬉しいです。宜しければ、これからもどうぞよろしくお願いします。

奇妙な迎え　3

いつまで経っても、鏡にぶつかる衝撃は襲ってこなかった。
麻奈は何か奇妙なことが起きているのだと分っていたが、恐ろしくで目を開けることが出来ない。ただひたすら、唯一の命綱のように男の手をぎゅっと握りしめていた。
すると、たちまち四方から強く引っ張られるような感覚が襲ってきた。身体を滅茶苦茶に振り回されているような強い力を受けて、麻奈は前後左右が分からなくなってしまった。

強い遠心力に三半規管が耐えられなかった。何とも言えない気持ち悪さに身震いすると、すぐ近くから男の声が聞こえてきた。

「もう少しで収まりますよ」

男の言う通り、身体を揺さぶる力がゆっくりと消えていくのを感じて、麻奈はそっと目を開けた。そこは一面真っ暗な闇が広がっていて、二人は何も無い空間にゆらゆらと所在無さ気に浮いていた。視覚で確認してしまうと、足元の覚束ない感覚が更に増した気がした。

二人から遠く離れた所で、微かにきらきらと淡く光っている物が目に付いた。目を凝らして見ると、色とりどりの光が瞬くように点滅をくり返している。
今の状況も忘れて、麻奈は素直に綺麗だと思った。赤や黄色、緑にピンク。暗い闇に光を放つその景色は、星を散りばめた宇宙空間のようにも思える。

「ここ、どこ」

半ば独り言のように呟いたのだが、以外にも返事が返ってきた。

「私にもよく分かりません。強いて言うなら、『鏡の中』ですかね。さぁ、行きましょう」

男は麻奈をリードするように歩き始めた。それに促されて麻奈も慌てて足を出すが、靴底からは何の感触も感じられない。

悪戦苦闘している麻奈を見て、男はやれやれといった顔で彼女の腰を更に引き寄せた。麻奈はこの時だけは、自分の腰に男が手を回している事に感謝した。

どのくらい歩いただろうか。男が紫色の光の前で足を止めた。良く見ると、それは人の背丈を軽く超えた巨大な鏡だった。額も何もついていないただの裸の鏡だったが、こんな所に鏡があること自体が、麻奈には不気味に感じられる。

「今度は何の衝撃も無いですから、安心して付いて来て下さい」

男はそう言いながらも、麻奈の腰に巻きつけている手を決し離そうとしない。逃亡を防止するためなのかもしれないと考えて、麻奈は少し男を恐ろしく思った。

来た時と同じように、男が何の抵抗もなく鏡に身を投じる。麻奈も仕方なしに息を止めて後に続いた。またしても、ぬるっとした冷たい鏡の感触が全身を包む。おかしな出来事続きで感覚が麻痺していた麻奈だったが、もう後戻り出来ないような予感が一瞬頭をよぎった。

鏡を抜け出ると、そこは薄暗くひんやりとした空気の室内だった。

高い天井。吹き抜けになった螺旋階段。その踊り場に立っていると分かった時、麻奈は自分の身に何が起こったのか信じられずに何度も辺りを見渡した。

薄汚れて何色かも分からない陰気なタイルの床に、冷たい鉄の手すり。しかし、どこか懐かしい雰囲気を孕んだ見覚えのある場所のように感じる。

振り返ると、後ろには麻奈の背丈よりも大きな鏡が取り付けられていて、まだ仄かに紫色の光が零れていた。

「お疲れ様でした。着きましたよ」

男はそう言うと、麻奈の腰に回していた手をようやく離した。解放感を感じるよりも、縋り付く対象を失って麻奈は不安になった。

この異様な出来事を前にして、麻奈の頭は上手く働いてくれなかった。男に文句を言ってやりたいのに、何をどう言っていいのかが分からないのだ。不安そうな表情で辺りを窺う麻奈に構わず、男は螺旋階段をどんどん下りて行く。

「私達、あのぉ、まさか……この鏡から出てきたの？」

麻奈は言葉を慎重に選びながら男の背に声を掛けた。

「そうです。貴女も早く降りて来て下さい」

階段を下りきった男が、吹き抜けを下から見上げている。

逃げるのなら今かもしれない。一瞬そう思ったが、今来た道を戻

る気にはなれなかった。
階段を上がって他の出口を探そうかとも考えたが、それは諦めることにした。自分の足の遅さでは、きっとすぐに追いつかれてしまうだろう。
逃亡計画を断念する自分を不甲斐なく感じながら、麻奈は手すりに掴まって階段を下り始めた。何気なく上を見上げる。
緩いカーブを描きながら上階へと続く階段はとにかく長い。円を描く階段を見上げていると、暗い穴の中に落ちてしまったような錯覚を起こさせる。

「足元に気をつけて下さい」

男はにこやかに微笑みながら手を差し出してきたが、麻奈は首を振って断った。ついでに非難を込めた視線を男へ送る。それは麻奈に出来る、ささやかな抵抗だった。しかし、実際に優しく笑いかけられると悪い気はしない。整った顔立ちのこの男ならばなおさらだった。
麻奈は男の顔から無理やり視線を引き剥がした。男を責める気持ちが、この笑顔の前では挫けてしまいそうだ。
男は付いて来るように言うと、ゆったりした足取りで歩き出した。

「此処はどこなの」

「此処がどこで何なのか、実は私にも良く分からないんです。何しろ、此処は随分と風変りな所なので」

「どういう事？　何処かも分からないのに、どうやって私を連れてきたの？」

「此処に入るのはそう難しいことではないんですよ。現に、先程貴女は入って来たじゃないですか」

「私が？　さっき此処に？　そんなはずないわ」

「いいえ。貴女が息を切らして駆けて行くのを私は見ましたよ。あぁ、あの時は黒いタイツを履いていたのに、今は履いていないんですね」

麻奈は息を飲んだ。帰宅するまで履いていたレギンスの色は確かに黒い色をしていた。男は振り返ることなく先を歩きながら続ける。

「問題は、此処に来ることではなくて、此処から出ることなんです」

「どういう事」

男は、察しが悪いな。という目を麻奈に向けると軽くため息を吐いた。

「出られないんです。此処から」

「……嘘」

「残念ながら本当です。試しにそこから外に出てみますか？」

男が指差した先には、木で作られた下駄箱がずらりと並んで置かれている。一段下がった所にはスノコが置かれていて、その先にはガラスで出来たスライド式の扉が付いている。

麻奈はそれらを見て学校を連想していた。そこはちょうど、学校の玄関口のような場所だった。

麻奈はガラス戸に手を掛けると、それを思い切り引っ張った。レールが軋んで嫌な音を立てたが、扉は予想に反して何の抵抗もなく開いた。

奇妙な迎え　3（後書き）

読んでいただいて本当にありがとうございます。もう少ししたら登場人物増える予定ですので、もうしばらくお待ち下さい。

奇妙な迎え　4

「何だ、普通に開くじゃない」

麻奈は拍子抜けして呟くと、そのまま校庭へ向かって歩き出した。しかし、数歩も行かないうちに足は止まり、馬鹿みたいに口を開けて立ち尽くしてしまった。

放心する麻奈の目に飛び込んできたのは、茜色の空と２００メートルトラックの白い線が書かれた学校のグラウンド。後ろを振り返れば、近所の見慣れた廃校が建っている。

強張っていた肩の力が、すとんと抜けた気がした。

「ここって、家の近くの学校」

拍子抜けしてしまった麻奈は、そのまま校庭を横切って校門へと歩いていった。

何故自宅の鏡が近所の廃校に繋がっていたのかさっぱり分からないが、此処からなら家に帰るのは簡単だ。さっきの男の話も嘘だったようだ。

麻奈は笑いだしたい気分でグラウンドを横切り校門へと歩いていった。しかし、校門に近づくにつれ、外の景色に違和感を覚えてきた。何かがおかしい。

「何あれ、電信柱……」

校門の向こう側に細長いシルエットがいくつも見える。いつもの見慣れた交差点も角のパン屋も、麻奈が利用しているバス停も見当たらない。そこにあるのはたくさんの電信柱だけだった。夕焼けを

背にして、何百本、何万本という電信柱が隙間無く立ち並んでいる。
それ以外は何も存在しない、まるでデッサンを間違えた絵のような景色だ。
夕日を浴びながら、ずらりと立ち並ぶ電信柱だらけの光景は、酷く不吉なものに見えた。

夜の始まりを告げる夕闇色に染まった世界。
麻奈はめまいがした。此処は一体どこなのだろう。近所の廃校に似ているが、自分の全く知らない場所に迷いこんでしまったのだと気付かされ、夢の中にでもいるような不気味な光景に身震いした。この異様な世界に当てられて胸が悪くなってくるようだ。自分はもしかして夢の中に居るのだろうか?もしもそうだとしたら、これは絶対に悪夢に違いない。

ピチャン。

どこかで魚が跳ねるような水音が聞こえた。麻奈は突然男の言葉を思い出す。出られないんです。彼は確かにそう言った。嫌な予感を感じながら、麻奈は弾かれた様に校門に手をかけた。
まるで頭のどこかでチカチカと警告ランプが点滅しているようだ。
校門を持つ手に力を入れる。さっきは簡単に開いた校門は、今は膠(にかわ)でも張り付いたように動かない。

「何で?　何で?」

こうなったら乗り越えるしかないと思い、麻奈はそこによじ登ってはみた。しかし、透明な壁のようなものに阻まれてしまい、学校の敷地内から指一本たりとも出す事は出来なかった。麻奈はずるずると校門から滑り落ちていた。

「無駄ですよ」

いつの間にか麻奈の背後に男が立っていた。麻奈の肩にそっと手を置いて力なく笑う。

「私もここから出ようと何度も試しました。しかし、この敷地内から出ようとすると、さっきのように見えない壁に阻まれてしまうのです。コレを壊そうとしてみましたが、それも全く無理でした」

「そんな。でも、貴方さっき私の部屋へ来たじゃない。あれはどういう事？　どこか抜け道があるんでしょ？　さっきの大きい鏡は？」

「あの鏡は、今はもう使えないはずです」

男の声は始終穏やかだった。しかし、その中には微かな諦めが含まれているような気がして、麻奈はだんだんと腹が立ってきた。

「そんなの、やってみなくちゃ分からないじゃない」

「あれは、普段は至って普通の鏡なんです。今から行っても大鏡の中に入る事は出来ません」

「でも、さっきは――」

「えぇ、私たちは大鏡を通って来ました。あの鏡を通るには、条件があるのです」

「どんな」

男は麻奈を指差した。

「それは、新しい住人が選ばれた時です。新しい住人が選ばれると、鏡は光りその人物を映します。鏡が光っている間に誰かがその人を呼びに行かなければならないのです」

麻奈は首を捻った。

「呼びに行くってことは、外に出られるんでしょう。貴方はどうしてその時に逃げなかったの。何でまた此処に戻って来たの」

「勿論、そのまま逃げられるものならとっくの昔に逃げていますよ。私も色々試ました。でも、それは不可能だったんです。外に出る時には、目に見えませんが透明な細い糸の様な物がいつの間にか体に巻きついているんです。一定の時間が経ったり、そのまま逃亡しようとしたりすると、ものすごい力で引き戻されてしまうのです」

「それは切ることは？」

「やってみましたよ。もちろん。ですが、それを切ることは出来ませんでした」

麻奈は泣きそうになってきた。

「此処から出られない事を知ってて、どうして私を連れてきたのよ」

男の顔が僅かに曇った。

「貴女を巻き込んでしまって本当に申し訳なく思いますが、私たちには貴女の助けが必要なのです。私たちが不本意ながら、新しい仲間を増やすのには訳があります」

男は悲しい顔をして自分の足元を指差した。男の足はさっき見た時と同じように、皮靴から上の部分が透き通って見えた。否(いや)、前に見た時には透き通っているのは脛までだったが、今では膝の辺りまでが半透明になっていた。

「見て下さい。此処に長く閉じ込められると、体が徐々に変形していくのです。自分が一番望む姿に。同時に、一番見たくない姿に……。私も少し前から変化し始めました。姿が完全に変わってしまうと、帰る道が見つけられなくなるのです」

「どうして」

「気が触れてしますからですよ」

男は何でもない事の様にさらりと口にしたが、その表情は固いままだ。

「じきに私の姿も完全に変わってしまうでしょう。自分がそうなってみて、初めてその恐ろしさが分かりました。今この場所で姿が変わりきっていないのは私だけなのです。このまま私まで変わってしまえば、私たちは永遠にこの場所に閉じ込められてしまいます。ですが、貴女なら帰る道を見つけられるはずなのです。お願いです。どうか私達を助けてくださいっ」

男はそう言って麻奈に頭を下げた。その体は僅かに震えている。麻奈は困惑しながら、自分に頭を深く下げる男を見つめた。

正直なところ、今の説明では納得出来ない事がたくさんある。なにより、こんな事に巻き込んだ男に腹を立てていた。しかし、震えながら恐怖に耐えている男を見ると、胸の奥がどうしようもなく切

なくなった。麻奈は少し迷ってから、おずおずと男の肩に手を置いた。

「あの、頭を上げて。まだ貴方の事を許したわけじゃないけど、帰り道を探すのは私の為にもなることだから――私やるよ。こうなっちゃったら一蓮托生だしね。だから――」

だから泣かないで。そう言おうとしたが、男の人にそんなことを言うのは少し失礼かと思い、慌てて違う言葉にした。

「だから、一緒に頑張ろう」

男は不意に顔を上げた。びっくりしたような瞳から、涙が一筋頬を流れていく。その顔がみるみる崩れて泣き笑いのような表情に変わっていった。

可愛い。麻奈がそう思った途端、男が麻奈の両手を掴んだ。息を飲む間も無く男の手に柔らかく握りこまれ、麻奈の心臓は一気に跳ね上がった。

「ありがとうございます」

痛いほど固い握手を交わしながらにこりと微笑まれて、麻奈はぎこちない笑みを返した。うるさい位に高鳴っている心臓を叱りつけ、男の手を無理やり振り解いたが、激しい動悸はいつまでも治まらない。

「そういえば、まだ貴方の名前聞いてなかった。私は水上麻奈」

「私はジュリアン田中と申します」

「は？」

「ジュリアンと呼んで下さい」

ジュリアンは笑顔を浮かべている。

「えぇっと。ハーフとか？」

麻奈はジュリアンの顔をまじまじと見つめた。少し長めの黒い髪や薄い唇、すっきりと通ってはいるがそれほど高くない鼻。とても端正な顔立ちをしているが、どう見てもジュリアンは日本人に見えた。しかし、長い睫に縁取られた少し吊り目の瞳が、不思議な緑色をしている事に気が付いた。

「いいえ、クォーターです。麻奈は名前の通り日本人ですよね」

「まぁ、そうだけど」

麻奈は心の中で苦笑した。私は貴方と違って見たままです、と。

「私もです。国籍は日本なんですよ」

親近感を覚えたのか、ジュリアンは更に笑みを深めた。

「ジュリアンはどこに住んでたの？」

「火星です」

「……火星って、あの？」

「ええ。火星です」

麻奈は自分の耳を疑った。聞き間違いにしては酷過ぎるような気がする。しかし、更に聞き直す勇気は湧いてこない。

そんな麻奈の様子を見ていたジュリアンは、またですか。と呟いてため息を吐いた。

「此処には色々な場所から人が集められています。正直、聞いてもどこの国か全く見当の付かない所から来た人たちばかりです。もしかしたら、世界そのものが違う人達なのかもしれませんね」

ジュリアンはやれやれと軽く首を振る。

「その様子なら、麻奈は火星をご存じですね」

「一応は」

こくりと頷く。それを見てジュリアンは微笑んだ。

「麻奈はどうやら私と同じ世界から来たようですね。でも、火星と聞いて戸惑うという事は――。きっと時間が違うのでしょうか。ときに、今は西暦何年ですか」

「え、２０３２年でしょ」

「成程、そうですか。でも、私にとっては２６２５年なんです」

麻奈の眉間の皺は深まるばかりだ。

「どういう事」

「つまり、私は麻奈の時代よりも６００年、後の世界から来たということですよ」

麻奈はジュリアンの話を聞けば聞く程呆気に取られるばかりだ。もう何が何だかさっぱり分からない。

「まさか、信じられない」

「信じられなくても、事実なんですからしょうがないでしょう」

麻奈はぽかんと口を開いてジュリアンの話を聞いていた。もう、何に疑問を持てばいいのか分からない。

唸りながら考え込む麻奈の顔を、ジュリアンが心配そうに覗き込んだ。その拍子にジュリアンの胸のネックレスがシャラリと音を立てる。

「私の話が信じられなくても構いません。ですが、これだけは信じて下さい。私は麻奈の味方です。どうか此処から出るために、私に力を貸して欲しいのです」

麻奈はひとしきり考えてから、何かを吹っ切る様に勢い良く顔を上げた。

「分かった。ジュリアンを信用する。今は考えてもどうしようもない事は置いといて、やるべき事だけを考えよう」

「ありがとう。麻奈は強い人ですね」

ジュリアンは感心しているとも、呆れているとも取れる顔をした。

「そんな事無いよ」

麻奈は少し照れて笑って見せた。

「さぁ、まだ校舎の中を案内していませんでしたね。中へ戻りましょう」

ジュリアンに続いて麻奈も校舎へと歩き始めた。

麻奈何気なくは校庭を振り返る。なぜだろう。夕日を背にして真っ黒な針のように見えるたくさんの電信柱と、そこから伸びる長い影。それらを見ていると、妙に心がざわめくのだった。

奇妙な迎え　４（後書き）

読んでいただきありがとうございます。書き方を少し変えました。いままで読んで下さっていた方はアレ？と思うかもしれませんが、どうかご容赦下さい。

スクロールが結構面倒なことになってしまいました。そちらも合わせまして、本当にスミマセン。こんな山石ですが、どうぞこれからもお付き合いしてもらえれば嬉しいです。

遭遇　1

校舎に入ると、ジュリアンは麻奈の一歩前を歩いて中を案内した。不思議な事に、それはジュリアン自身も初めて来る場所を確かめているような、拙い案内の仕方だった。おまけに、此処は学校としてはかなり不思議な造りになっているので、麻奈にはさっぱり理解できなかった。

玄関にたくさんの下駄箱が並んでいたり、廊下の真ん中に白線が引いてある様子は学校そのままなのだが、廊下の照明が華美なシャンデリアになったり、麻奈の腰の辺りまである高級そうな壷が飾ってあったり、崩れ落ちた瓦礫で通れない階段などがあったりする。なんとも違和感たっぷりの学校だ。

「慣れるまでは常に私と行動して下さい。危険な場所もありますから」

そう言うと、ジュリアンはひびの入った廊下に転がる瓦礫を器用に避けた。今、ふたりは三階の廊下を歩いているところだった。

「此処はどうして、こんなにわけの分からない造りになってるの」

麻奈はジュリアンに手を引かれながら瓦礫の山を越えていく。

「私も詳しくは分かりませんが、住人の馴染みの深い場所に建物がどんどん変化していくようです。ちょうど増改築を繰り返しているような感じですかね。だから、住人が増えれば新しいイメージがどんどん追加されてしまい、今ではこのようにおかしな造りになったんです」

「だからこんなに統一感がないのね。でも、誰がそんなことしてるのかな。住人に馴染みの深い場所ってどうやって分かるの？」

「さぁ。それは私にも分かりません。いつの間にか建物の造形が変わってしまいますから。今回も、私が麻奈を迎えに行って帰ってきたらこの形になっていました。どうやら、麻奈が来てから『学校』という要素が加わったようですね。見たところ、今はそれがメインになっています……あぁ、そこ崩れそうなので気をつけて下さい」

足を乗せた廊下が崩れ始めたのを見て、麻奈は慌てて足をどかせた。二人は天井と壁が吹き飛ばされた様に抉(えぐ)れている廊下を、蟹歩きで進んでいた。

まるで、崖の中腹にへばり付いているのかと錯覚するほど危険な廊下。最早そこは廊下と呼べないような道だったが、麻奈は一歩ずつ慎重に足を進めていた。

ほとんど外に剥き出しのこの廊下は、眺めが無駄に良すぎる。うっかり下を見てしまい、麻奈は血液がすぅっと下がって行くような気がした。

麻奈は命を懸けた蟹歩きで、ジュリアンの足元だけを見て彼に付いて行った。

「こんな危険な所に何があるの」

「此処で暮らしている人たちを麻奈に紹介しようと思いまして。まずは比較的安全なサルーンの所へ」

事も無げにそう言うジュリアンを、麻奈は涙目で睨みつける。とりあえず前進するものの、麻奈は自分の指先が徐々に冷えていくのを感じた。その癖、手のひらは汗でじっとりと濡れている。緊張は

既にピークに達していた。

「この状況のどこが安全なの？　一歩踏み外したら即死なんだけどっ」

麻奈の必死の叫びにもジュリアンは全く動じない。

「あぁ、サルーンの所へは此処を通らないと行けないんです。向こうの階段は通れなくなっているでしょう？　だからこの廊下を通るしかないんですよ。大丈夫、そのうち慣れますよ。それよりも、本当に注意するべきは此処に暮らす人達の方です」

「え」

「私以外の人間は完全に姿形が変わってしまっています。つまりどういう事かというと――」

ジュリアンは意味深な間を空ける。

「皆、正気じゃないという事です」

「正気じゃ、ない――」

麻奈は無意識に生唾を飲み込んだ。ゴクリと大きく鳴る喉に自分で驚く。

「どうしてそんな人たちに会わせようとするの？」

「知らないままでいる方が危険だからです。どんな人物なのか、あらかじめ知っておくほうが後々対処しやすくなります。あぁ、です

がこれから会うサルーンは比較的穏やかな性格なので心配要りませんよ。中には会話すら成立しない人もいますからね。そういう危険な人にはあまり近寄らずに遠巻きに紹介します。それから、悲鳴は上げないで下さいね。悪戯に刺激するのは非常に危険ですから」

そこまで危険な存在を人と言えるのだろうか。

喉まで出掛かった言葉は、麻奈の口から発せられる事は無かった。何故なら、脆くなった廊下が麻奈の重みで崩れ、支えを失った彼女の右足ががくんと落ちていたのだ。

「っきゃぁぁぁ！」

バランスを崩して落下する麻奈。必死に伸ばした手はジュリアンには届かず、空しく宙を掻いた。呆然とするジュリアンの顔。

落下する視界の中で、麻奈の目はジュリアンの後ろから不意に伸びてきた浅黒い何かを捉えた。

一瞬の出来事だったが、麻奈には全てがスローモーションのように感じられていた。それは日に焼けたたくましい腕だった。比喩でも何でも無く、突然ジュリアンの後ろから伸びてきた腕が、落下し続ける麻奈の手を間一髪で掴んでいた。

自分の体重が手首にかかり、衝撃と強い痛みに襲われたが、麻奈は安堵の息をそっと吐き出した。

「そっちの手も寄越せ」

低い声が上から降ってきて、麻奈は声のした方へと顔を上げた。逆光で黒い影になって見えるが、かなり上の方に人がいる。随分下まで落ちてしまったようだ。

麻奈は自分を掴んでいる手の長さを不思議に思いながら、もう片方の手も差し出した。すると、同じような腕が上から三本下りてき

て、それぞれ麻奈の手と手首をがっちりと掴んだ。
引き上げられながら、麻奈は奇妙な事に気が付いた。追加で腕が三本伸びてきたのに、上に見える人影は相変わらず一つだけだということに。
麻奈が静かに鳥肌を立てている間も、合計四本の腕は安定して麻奈の体を引っ張り上げていく。

徐々に露になる人物を見て、麻奈は何とか悲鳴を喉の奥へと飲み込んだ。悲鳴は危険。さっきジュリアンにそう教わったことを思い出したからだった。

遭遇　1（後書き）

いつも読んでいただきましてありがとうございます。前回に続き、今回も説明が長くなってしまいました。早く残りの人物を書きたいのですが……。

今回、3人目の人物がようやく出てきました。次回詳しく描写できるとおもいますので、宜しければまた遊びに来て下さい。山石でした。

遭遇　2

麻奈を助けた男には、異様に長い腕が六本生えていた。通常の腕がある位置に二本、胸から腹にかけて四本の腕が生えている。その為なのか、男は上半身には何も身に着けていない。

下半身には、たくさんのポケットが付いた迷彩柄のズボンと、黒い重厚なブーツを履いている。

今、男が麻奈を掴んでいるのは通常の腕二本と、胸の上部から生えている二本だった。たくさんのたくましい腕が男の体からにょっきりと生えている様子は例えようも無く不気味だった。おまけに、男の空いている腕は何かを求めるように手を握ったり開いたりしている。

麻奈は男を目にした途端、自分の状況も忘れて震えていた。今すぐこの腕を振り払ってしまいたい衝動に駆られるが、慌てて思い直す。今この手を放したら、麻奈は真っ逆さまに地面に激突してしまう。

お礼を言わなければと思うのに、なかなか口から言葉が出てこない。麻奈は口を開いたまま動けなくなってしまった。

男は麻奈を軽々と引っ張り上げると、自分の目線の高さまで引き上げた。残りの腕がそれぞれ麻奈の腰に当てられる。背中に悪寒と鳥肌が走った。男はそのまま、ひび割れの無い安全な廊下へと移動する。

その様子を少し離れた所で見ていたジュリアンは、麻奈が引き上げられたのを確認して密かに胸を撫で下ろしていた。彼は男の邪魔にならない様にと、一歩後ろへ下がって見ていたのだった。ジュリ

アンは安堵の息を吐き出しながら、改めて男の腕に抱えられた麻奈を見て彼は思う。

まるで蜘蛛に捕まった綺麗な虫のようだ、と。

長身の男の腕にすっぽりと収まっている麻奈は、いつもよりとても華奢に見えた。恐怖のために、荒い呼吸を繰り返して激しく上下している豊かな胸。艶やかな髪が纏わり付いている汗で湿った首筋。微かに震えながら、何か言葉を発しようと半開きになっている唇。その全てが彼には妙に艶めかしく見えた。

ジュリアンは無意識に乾いた唇を舌で湿らせていた。

麻奈を抱えた男は、充血した眼で腕の中の少女を見つめていた。その口元にはうっすらと微笑みすら浮かべている。

「――助けてくれてありがとうございました」

ようやく麻奈が口に出来た言葉は、ずいぶんと掠れていた。その途端、男の顔から奇妙な熱がすっと引き、絡めていた視線を不意に外した。そして、男は急にぽいっと麻奈を放り投げた。まるで、興味が無くなったというかのように。

「いだっ」

突然放り出された麻奈は、お尻を強か打ちつけて涙目で叫んだ。

ジュリアンが、大丈夫ですか？と駆け寄って来る。

麻奈を投げた男は、今までの様子が嘘のような無表情になり、虚ろな瞳で麻奈を見下ろしていた。否（いや）、その瞳はもう麻奈すら見てはいなかった。

「サルーン、助けてくれてありがとうございました。よく私達が来

たのが分かりましたねぇ」

サルーンと呼ばれた男は虚ろな瞳のままジュリアンの方を向いたが、直ぐに興味が無さそうにあらぬ方向を向いてしまった。

「音が聞こえた」

答える声には張りが無く、どこか気だるげだった。

「彼がサルーンさん？　じゃあ、ジュリアンが紹介したかったのはこの人」

麻奈は隣に立つサルーンを見上げて、その身長の高さに今更ながら驚いた。麻奈は決して背が低くはないのだが、その麻奈が首を垂直にして見上げなければならないほどの長身だ。おまけに、彼は全体的に筋肉質で体格が良いので、なお更大きく見えてしまう。

赤銅色の髪は無造作に伸びていて、顔には無精髭が生えている。くっきりとした二重の大きな赤茶色の目と、きりっとした眉が精悍な印象を与えるが、虚ろな表情と体から生えている六本の腕がその印象を台無しにしていた。

麻奈がしげしげと見つめていると、サルーンと視線がぶつかった。しかし、サルーンの瞳は虚ろなまま動かない。確かに視線は交わっているのに、何の感情も浮かばないその目を見て、麻奈はサルーンの奇異な外見以上に薄ら寒いものを感じた。

「紹介します。こちらがサルーン。彼は内乱中の国から来たそうですよ」

だからこの廊下はぼろぼろなのかと納得する麻奈。ジュリアンは、

今度はサルーンに麻奈を紹介し始めた。

「サルーン、こちらは麻奈。ついさっき此処に来たばかりです」

「どうも、よろしく」

紹介されて麻奈は深く頭を下げるが、サルーンは無反応。

「あの、本当にさっきはありがとうございました。サルーンさんがいなかったら、私死んでいたかもしれません」

更に話しかけるが、やはり反応は無い。

嫌われたのだろうか。あからさまに無視をされると気分が沈む。

麻奈はこっそりため息を吐きながらサルーンから視線を逸らした。

「では、行きましょうか？」

突然明るい声でジュリアンに肩を叩かれ、麻奈は驚いてジュリアンを見た。

「もういいの？」

「えぇ、今は顔合わせだけにしようと思っていました。サルーンは無口なのでこのまま此処に居ても、ほとんど独り言になってしまいますよ」

「そういう事なら。あの、失礼します」

麻奈はもう一度頭を下げてサルーンに背を向けた。その拍子に麻奈のポケットから何かが落ちて、瓦礫の隙間に入り込んだ。あまり

音がしなかったせいだろう。その事に、今は誰も気が付かなかった。
麻奈がジュリアンの後を追って歩き出すと、後ろから声がかかった。

「この場所は危険だ。気をつけろ」

「はい」

麻奈は手を振った。サルーンの視線は相変わらず明後日の方向を向いていたし、六本の腕は不気味に動いていたが、何となく嬉しくなった。どうやら嫌われてはいなかったようだ。
少し心が温まった気がしたのも束の間、またぼろぼろに崩れかかった廊下を前にすると、気持ちは一気に急降下してしまった。

もう廊下の中ほどまで進んだジュリアンに置いていかれないように、麻奈は意を決してそろそろと慎重に進みだした。行きで大分慣れたのか、帰り道の方がスムーズに渡ることが出来た。
崖のような廊下を無事渡りきり、瓦礫が疎らに転がっている道を歩きながら、ふと疑問に思ったことをジュリアンに尋ねてみた。

「サルーンさんは、どうしてあんな姿になったのかな」

ジュリアンは含みのある顔で笑いながら、邪魔な瓦礫を蹴飛ばした。

「さぁ……。今度会った時にサルーンに聞いてみて下さい」

麻奈は横倒しになっている柱の残骸を乗り越えながら、うん。と気の無い返事を返した。顔を上げたその時、ある事に気が付いた。

「またあった」

「何がですか」

麻奈は廊下の壁に備え付けられている鏡を指差す。

「ほら、あれ。此処には大きな鏡が沢山あるね。どの廊下にも必ず一面は掛けてある」

ジュリアンは、あぁ。と呟いて鏡の前で足を止めた。ぼろぼろでひびの入った壁とは相反して、その鏡は一点の曇りもなく夕焼けの紅い光を反射している。

ジュリアンは一時鏡を見ていたが、何気なく足元の瓦礫を拾い上げる。屈んだ拍子に首のネックレスがぶつかり合って、シャラシャラと音を立てた。ジュリアンは手の中の瓦礫を暫くもて遊んでいたが、突然、鏡目掛けてそれを投げつけた。

ガシャーンと音を立てて割れ落ちる鏡を、ジュリアンは複雑な表情で見つめていた。そして、疲れたようにぐるりと首を回すと、いつもの笑顔で麻奈を振り返った。

「行きましょうか」

麻奈は反射的に頷いた。見てはいけないものを見てしまった気分になる。まずい話だったかな？　と麻奈はこっそり首を捻った。

遭遇　2（後書き）

いつも読んで下さってありがとうございます。
ジュリアンが黒さの片鱗を見せ始めました……。皆さんお気づきの通り、彼の敬語はパフォーマンスです。

遭遇　3

廊下を歩きながら、ジュリアンがぽつりぽつりとこの場所の説明をし始めた。その時には、もういつものジュリアンに戻っていたので、麻奈は密かにほっと胸を撫で下ろした。しかし、彼の突然の破壊行動の理由を聞くに聞けず、悶々としながら説明を受け続けた。

どうやら、此処ではいつも夕暮れの風景が広がっているらしい。そう言われて窓の外を見ると、地平線すれすれに居座っている、紅く潰れた夕陽が見えた。なぜずっと夕暮れなのか。麻奈が疑問をぶつけると、ジュリアンは自分の腕時計を示した。

「私の推測ですが、此処では時間が狂っているようなのです。私の時計は半永久的に動くものなのですが、此処に来たとたん止まってしまいました。麻奈の時計も止まっているでしょう？」

「そういわれると。でも、私の腕時計が止まったのは此処に連れて来られる前だったはず」

「それはきっと、先ほど此処を通り抜けた時に止まってしまったんですよ。恐らく麻奈が校門をくぐった瞬間、この場所に片足を突っ込んでいたのでしょうね。でなければ、あの時走っていく麻奈を私が見ることは出来なかったはずです」

「そうなの？」

「あの時はまだ此処に完全に囚われる前だったので、易々と抜ける事が出来たようですが、時間の狂っている空間を通った為に、麻奈の時計はそのまま止まってしまったんだと思います。まぁ、それを

目印に私は麻奈を追うことが出来たんですけどね」

「でも、狂ってるってどういうこと？」

「うぅ――ん、何と説明すればいいのか……。これはあくまでも私の推測の域を出ないのですが、此処では時間がある程度過ぎると、そこから巻き戻っているようなんです」

「意味が分からないんだけど」

「分かりやすく説明しましょう。以前此処で怪我をした事があるのですが、しばらくするとその怪我は跡形も無く消えてしまいました。自然に完治したとか、そんな事ではありません。文字通り消えたんです。肉体の時間に関して言えば、その出来事は巻き戻っているといえると思います。もっと例を挙げてみましょう。激しい運動をして筋肉痛になったとします。その痛みも此処ではほんのひと時経つと、何も無かったように一瞬で消えてしまうのです」

「そんな事が――」

「あるのです。現に、私は自分でも正確には分らないほど長い間此処に閉じ込められていますが、一度も食事をした事がありません。流石に、美味しいものを食べたいという欲求は募りますが、此処には食べ物が何も無いので我慢するしかありません」

麻奈はあまりのことに絶句してしまった。

ジュリアンは皮肉気に笑って、足元に視線を落とす。

「私達を閉じ込めている誰かは、よっぽど私達を此処に置いておきたいんでしょうね。年を取らせて、そのまま死なせることも、餓死

させることも許さないんですから」

「どうしてなのかな？」

「え」

急に足を止めた麻奈に気が付いて、ジュリアンは振り返った。

「こんなおかしな事、普通出来る？　ジュリアンの所ではあり得る？　私の世界の科学では絶対無理だよ。こんなにまでして、此処に私達を閉じ込めて、人の形まで変えてしまうなんて……。一体何が目的なんだろう」

麻奈は先ほど会ったサルーンの姿を思い出して身震いした。

彼はあんな姿になってしまって、どれほどショックだったろう。

その時のサルーンのことを考えると、麻奈は胸が痛くなるようだ。

自分ならば、きっと耐えられないに違いない。

それに、このままずっと帰る事が出来なければ、明日は我が身なのだ。

パシャン。

またどこかで水音が聞こえた気がした。

遭遇　3（後書き）

いつも読んでいただきましてありがとうございます。
時間。これは難しい問題でした。あんまり詳しく調べたりしてないので、深く考えずに、どうぞさらっとお読みください。
こんないい加減な話ですが、どうぞまた遊びに来て下さい。山石でした。

遭遇　4（前書き）

この話には触手の表現があります。苦手な方はご注意下さい。

遭遇　4

「目的、か。それが分かれば少しは此処を出る手がかりが掴めるかもしれませんね」

ジュリアンは、何やらぶつぶつ呟きながらまた歩き出した。それを見て麻奈も後をついて行く。

今は怯えていても仕方が無い。それよりも、この廃校はやはりどこかで見たことがあるような気がする。麻奈は記憶の糸をするすると手繰り寄せ始めた。しかし、その答えが出てくる前に、ジュリアンが突然麻奈を振り返った。

「そうそう、一つ説明しておかなければいけません。此処で暮らしている人たちはそれぞれ自分の部屋を持っていて、普段はほとんどそこから出る事はありません。唯、例外が一人いて、『アノ人』だけはいつも廊下を徘徊しているんです」

「アノ人？」

「ええ、もしもアノ人に会ったなら、全力で逃げて下さい」

「どうして」

ジュリアンは声を一段落として麻奈の顔を覗き込んだ。

「とても危険な人なんです。彼に言葉は通じません。だから、問答無用で襲ってきますよ」

「そんなに危険な人が」

麻奈は青褪めた。

「一体どんな人なの……」

「しっ」

麻奈の言葉を遮って、ジュリアンが麻奈の口を片手で塞いだ。その視線は警戒するように辺りを見ている。一瞬にして緊張が走ったジュリアンを見て、麻奈も息を潜めて周りを窺った。

聞こえる。廊下の突き当たりにある階段からベチャリ……ベチャリと嫌な音が響いてきた。

ジュリアンが麻奈を制して聞き耳を立てる。濡れたモップを床に付けるような音が、階段の下から徐々にこちらに近づいて来る。

「噂をすれば、アノ人です」

ジュリアンが急に踵を返して、麻奈の手を引いて走り出した。いきなりの事で麻奈は完全に面食らっていたが、ダッシュするジュリアンに引きずられるように走り出した。

あまりに素早いジュリアンの動きに、麻奈はアノ人なる者の姿を見る事は出来なかった。最も、散々脅かされていたので、今更見たいとも思わない。今しがた聞こえてきた粘ついた足音と相まって、麻奈の頭の中ではおどろおどろしいアノ人の姿が出来上がっていた。

麻奈は頭を振って、その嫌な想像を無理やり追い出した。今はそんな空想に浸っている暇はないのだ。引っ張ってもらっているとはいえ、ジュリアンの疾走に付いて行くのは麻奈の体力ではかなり無理がある。

麻奈の心臓は今にも張り裂けそうになり、喉はひりひりと痛み、

鼻から口にかけて血の味が広がる。もつれる足を懸命に動かし続けるが、もう足はがくがくで言う事を聞いてくれない。倒れそうになった瞬間、麻奈のすぐ後ろで何かがベチャリと貼り付く音がして、慌てて振り返った。

途端、ひっ！　と漏れる悲鳴。

淡いピンク色をした細長い物が、麻奈の腰にべったりと張り付いている。

その根元は同じ色をした大きなゼリー状の塊に繋がっていて、ねばねばした粘液を滴らせながら床を這っているのだった。肉色をしたその塊には、真ん中辺りにぱっくりと切れ目が入っていて、そこから真っ赤な内部が見えていた。それは歯も舌も無い唯の裂け目だったが、麻奈には紛れも無くアノ人の口なのだと理解できた。

アノ人は四方に触手のようなものを広げ、麻奈とジュリアン目掛けて這って来る。本体の動き自体はそう速くは無いのだが、そこから伸びる触手はものすごい速さで伸びていて、二人を絡め取ろうとしていた。麻奈の腰に張り付いたのは、その中の一本で、粘液を垂らしながらうねうねと麻奈の腰に更に巻きついてきた。

「いやぁぁ！　取って、取って！」

麻奈はパニックに陥り、腰の触手を振りほどこうと手を目茶目茶に振り回した。その拍子にジュリアンと繋いでいた手が離れる。

「麻奈、駄目です」

ジュリアンが慌ててもう一度麻奈の手を取ろうとする。しかし、不意に麻奈の体が後方へ飛んだ。アノ人が見つけた獲物を逃すまい

と、驚異的な力で麻奈を手繰り寄せ始めたのだ。
ずるずると引きずられる麻奈。その顔は蒼白になり、恐怖で悲鳴すら出てこない。
ジュリアンは舌打ちすると、迫る触手をかわしながら麻奈を残して走り去っていった。麻奈はそれにも気が付かずにアノ人を凝視していた。怖くて仕方が無いのに、視線を外すことが出来ない。
麻奈がアノ人の足元まで手繰り寄せられると、ぶよぶよとした体に紅い三日月が浮かんだ。口を吊り上げて笑っているのだと気が付いて、麻奈の背筋は凍りついていた。

遭遇　4（後書き）

いつも読んで下さってありがとうございます。また、お気に入りに登録して下さった皆様！！本当に、本当にありがとうございます。皆様の存在が山石の励みになっております。

今回新キャラを出す事が出来ました。容姿にかなり問題あります。あ、問題ないキャラの方が少ないみたいです……。

これからもどうぞよろしくお願い致します。山石でした。

遭遇　5（前書き）

引き続き、触手表現があります。苦手な方はご注意下さい。

遭遇　5

アノ人は何本も触手を差し出すと、麻奈を抱きしめるようにそれらを絡みつかせた。そして、ゼリー状の自分の身体に押し込めるように、捕まえた獲物をきつく締め付ける。

「っう、くるしぃ」

顔や身体にべとべとした粘液が滴り落ちてきたが、それを気にしている余裕は麻奈には無かった。身体を締め付けられながらピンクのゼリーに顔を押し付けられると、たちまち息が出来なくなった。

もう駄目だ、そんな言葉が頭の中をよぎった途端、麻奈は無意識にアノ人の身体をタップしていた。それは、幼い頃に兄とプロレスごっこをしていた時に教わった「参った」のサイン。

その途端、アノ人の体がピクリと動いた。きつく巻きついていた触手が心なしか緩んだ気がする。

反応があったことに驚き、麻奈はもう一度とんとんとゼリー状の身体を叩いた。実際にはベチャベチャという音がしたが、締め付けは明らかに弱くなった。

今度は気のせいではなかった。麻奈は確信をもって、もう一度それを繰り返す。すると、麻奈の背中に回されている触手がとんとん、と同じように叩き返してきた。

「アァオオオオ」

真っ赤な裂け目から、水の中で喋るような篭った声が漏れた。

通じた。麻奈は思い切って話しかけてみた。

「あの、ちょっと苦しいんだけど。離してくれませんか？」

すぐ鼻先にある、肉色をしたゼリーからは何の反応も無い。ジュリアンが言っていたように言葉は通じないらしい。それでも麻奈はアノ人の身体を軽く叩きながら話しかけた。

「じゃあ……せめてコレを少し緩めて欲しいんですが」

頬がくっつくほどの距離を強いられていて、内心はかなり気持悪かったが、ゼリー状の体を叩きながら勤めてフレンドリーに話し続けた。麻奈が助かる道はこれしか無いのだ。気持悪くても何でも、続けなければならない。さもなくば、麻奈のすぐ横にある真っ赤な裂け目に今にも放り込まれてしまう気がする。

アノ人は律儀に麻奈の『とんとん』に返事を返してくる。強弱やリズムをそっくり真似て。

「コレ気に入りました？　またいつでもするので、今日のところは離してくれませんか？」

優しい口調で続けるが、正直もう二度とやりたくなかった。『とんとん』のバリエーションも尽きてきた頃、麻奈の体は粘液でぐっしょりと濡れていた。

「あの、そろそろ本当に離し下さいね？」

麻奈はアノ人の身体を撫でながら続けて話しかける。すると突然、アノ人の動きがまたもピタリと止まった。

あれ？　と戸惑う麻奈を他所に、ゼリー状の体が小刻みに震えていた。

次の瞬間、がばっと全ての触手が麻奈の身体に巻きつけられ、頬擦りでもするかの様にアノ人が更に身を寄せてきた。

「アァァ、アァァッ」

圧迫が強くなり、麻奈は霞む意識の片隅でアノ人の咆哮を聞いた。息が出来ない。もう駄目かも知れない。

麻奈の瞼が落ちかけたその時、突然冷水をかけられた。

水を浴びせられた途端、アノ人が震えながらその場に硬直した。麻奈に巻きついていた触手たちも、一瞬硬直した後に一斉に力が抜けて離れていった。麻奈はそのままくたりと床に崩れ落ちたが、途端にはっと識を取り戻す。落ちかけていた瞼を引き上げると、バケツを持ったジュリアンがすぐ側に立っていた。

「麻奈、今ですっ」

後にも先にも、この時の動きが一番素早かったと麻奈は思う。アノ人の足元から転がり出ると、綺麗なクラウチングスタートを決めてジュリアンの元へと走りだした。

ジュリアンはバケツを放り投げると、バトンを受け取る要領で麻奈の手を掴み、一目散に走り出した。二人は廊下を曲がり、階段を下りてからも暫く走り、更に手近にあった教室へ飛び込んだ。ここまで来ればアノ人も追っては来られないだろう。

教室に入ると、麻奈は安堵と共に腰が抜けてその場にしゃがみ込んだ。全力以上の疾走をしたお陰で、麻奈の疲労は限界を超えていた。ぜぇぜぇと肩で息をしている。

「ジュリアン……ありがと」

「どう致しまして。無事で何よりです」

ジュリアンは涼しい顔で答える。

「アノ人の弱点は水です。水をかけると一瞬だけ動きが鈍るので、今度からは捕まる前に水をかけて下さい」

「了解、覚えとく」

「それにしても……」

ジュリアンが麻奈を見下ろした。

「酷い有様ですね」

麻奈はアノ人に捕まったお陰で、全身ぬるぬるの粘液塗れだった。

「知ってる」

麻奈はぶすっとした顔で頷いて、頬に滴る粘液を指で掬い取ると、嫌そうに手を払った。指に付いていた粘液が、ぴちゃりと音を立てて床に飛び散るのを見て、ジュリアンは麻奈に気取られない様にそっと息を吐き出した。

麻奈の姿を上から下まで舐める様に見つめながら。

薄桃色の粘液に濡れて肌に張り付く麻奈の上着は、豊かな胸の膨らみを忠実になぞっている。ショートパンツから覗く太ももはてらてらと光って卑猥なほど眩しい。はぁはぁと力なく乱れる呼吸と、その頬に滴る粘液も背徳感を掻き立てた。

これはこれで、なかなかそそる。ジュリアンは心の中でこっそり

と笑う。唯一つ残念なのは、シャツの中にもう一枚服を重ねていることだろう。濡れても服が透けないのだ。

しかし、そんな考えをおくびにも出さず、ジュリアンは麻奈の隣にしゃがみ込むと、実に誠実そうな心配顔で話しかける。

「大丈夫ですか？　怖い思いをしたでしょうから、住人を紹介するのはまた今度にしましょう。今は少し休んでください。まずはその汚れを落としましょうか」

麻奈はこくりと頷いて、まだ疲労感が抜けていない身体に鞭打って立ち上がった。

遭遇　5（後書き）

読んで下さってありがとうございました。
ジュリアン……かなりのむっつりですね。
それでは、また次回お会いしましょう。山石でした。

遭遇　6

「まずは、麻奈の部屋を決めましょう」

ジュリアンは足取りの重い麻奈を伴いながら廊下を進む。

「今はほとんど学校になっていますが、探せばまだホテルだった頃の部屋が残っているかもしれません」

「ホテル？」

麻奈が首を傾げた。たったそれだけの動作なのに酷くだるい。

「えぇ。少し前まで、此処はホテルだったんです。探せばまだ一部屋ぐらい残っているかもしれません」

「良かった、ベッドで寝られるんだね。最悪、机を並べてそこで寝るのかと思ってたよ」

「それは、痛そうですね」

ジュリアンが呆れ顔で言った。

二人は手近な教室を、一部屋ずつ探して回ったが、どこも机が並べてあるだけのただの平凡な教室だった。そろそろ当たりを引き当てたいところで、麻奈が思い出したように口を開いた。

「そういえば、此処って私の中学の時の校舎にそっくり」

「何ですって？」

麻奈の何気ない呟きを耳にして、ジュリアンが振り返った。

「え？　ほら、このジャージなんかそのまんま私の中学校の時のものだよ」

麻奈は、傍のロッカーから取り出した紺色のジャージをジュリアンの目の前で振って見せた。ジュリアンは驚いてジャージを見つめている。どうやら、小物まで細かく再現されている事に驚いているようだ。

「全く。考えても、考えても此処の謎は答えが分らない――。最早、これは怪奇現象なのではないかと思えてきますよ」

ジュリアンは深いため息をつくと、軽く目頭を揉んだ。彼は一旦考えるのを止め、解けない謎を頭の中から追い出すことにしたようだ。

「あぁ、有りましたよ」

暫くして、二人はようやく目当ての部屋を見つけることが出来た。ジュリアンは、『２－４』の札がかかっている扉をからりと開けて

麻奈を手招きした。それを受けて、麻奈は横開きの見慣れた扉の脇から中を覗いてみた。

そして、驚きのあまり口が半開きになった。

そこは、眩しいほどに白い小奇麗な部屋だった。床は白く光る大理石で出来ていて、アンティークのソファー二組にサイドテーブル。部屋の奥にあるダブルベッドには、世の女性達の憧れである天蓋がついている。麻奈は嬉しさを抑えきれずに、夢見る様に胸の前で手を組んでいた。

しかし、ジュリアンは部屋を見渡して眉を寄せた。部屋の隅に置かれた場違いな物が気にかかったのだ。

ジュリアンは部屋の隅に近寄ると、それに手を触れてみた。そこにあるのは、巨大な水槽だった。天井まで届きそうな高さと、大人が両手を広げてもまだ余裕がある幅。奥行きもかなりあるようで、巨大な鮫でも楽に入れる事が出来そうだ。

しかし、こんなに大きな水槽はこの部屋には似つかわしくない。おまけに、中は水で満たされてはいるものの、魚は一匹もいなかった。麻奈も不振に思って水槽に近づく。

「コレ、何かいたのかな？　ジュリアンの所では客室に水槽があるのは普通の事？」

「いいえ。観賞用の魚がいるのならまだ分かりますが、こんな水だけの水槽を客室に置いたりはしません」

ジュリアンは水槽に顔を近づけたが、何かがいた痕跡は見つけられない。水は透明で浮遊物は何もなかった。

「よっぽど大きな魚を入れるつもりだったのかな？　……まぁ、いいや。ちょっと邪魔だけど、生活するのに問題はないし。それより、

バスルーム見てくる」

「あぁ、使い方が麻奈の時代と少し違うかもしれません。説明しますよ」

ジュリアンが後を追ってきた。

「ん？　ってことは、ジュリアンの馴染み深い場所っていうのがこのホテル？」

「えぇ、そうですよ」

ジュリアンはあまり話したくないのか、それだけ言うと麻奈の背中をとんと一つ押して、一緒にバスルームへと入った。麻奈は、男の人と一緒にバスルームに入るのが何となく恥ずかしかったが、中に入ってみて更に驚いた。

大きなドレッサー付きの脱衣所の奥には、床に埋め込むタイプの丸い湯船があり、その隣にはシャワーブースまで付いている。ドレッサーの上には様々なアメニティーが並べられていて、引き出しを開けると化粧品まで揃っていた。

「うわぁ、何か無駄に豪華だねぇ。当然の様に大理石だし」

「気に入りましたか？」

「それはもう」

ジュリアンはなぜか得意げに笑うと、浴槽の傍にあるボタンを指差した。

「このボタンが浴槽にお湯を溜めるもので、こっちがジェットバス。これはバスソープに間接照明。シャワーは此処に手をかざすと出てきます。此処に立つとエアータオルです」

説明を受ける麻奈の目はキラキラと輝いていた。

「脱衣所に洗濯乾燥機があるので、汚れた服はそちらで洗って下さい」

「え、そんなの無かったよ」

ここです。と言ってジュリアンがドレッサー脇のボタンを押すと、壁から四角い箱が迫り出してきた。どうやらこれが洗濯機らしい。

「はぁ、何かすごく便利だね。指先一つで何でも出来ちゃう」

ジュリアンはやはり得意げに笑う。

「他に分からないことがあったら呼んで下さい」

「ありがとう」

「では、ゆっくり休んでください。肉体的な疲労は問答無用でなかった事にされますが、精神的な疲労はどんどん蓄積されていきます。一度睡眠をとるのがお勧めです」

「そうする。何だか色々あり過ぎて頭がパンクしそう」

ジュリアンの言葉通り、麻奈に肉体的な疲労はもう残っていなかった。あれだけへばっていたのが嘘の様に、いつの間にか疲れが消

えてしまったのだ。今から校庭を走ってくる事だって出来そうだ。しかし、なぜだか気だるい疲労感がこびり付いているような気がしてならない。

「それでは、お休みなさい。起きたら私の部屋に来てもらえますか。残りの人達を紹介しますから」

「ジュリアンの部屋はどこ」

「私は三階の『1－2』と書かれた部屋にいます」

途端に麻奈の顔が曇る。

「遠いね。三階にまだアノ人がいるかもしれないし――」

麻奈は無意識にジュリアンの袖を掴んでいた。それを見てジュリアンは、やんわりとため息を吐いた。自分の袖を掴む麻奈の手を優しく剥がす。

「では、暫くしたら私が迎えに来ます。此処の時計は止まっているのでいつとは言えませんが、それでもいいですか」

「うん、お願いします」

麻奈は大げさなほど頷いた。一人で廊下はしばらく歩けそうにない。

「あ、もしも迎えに来た時に私がまだ寝てるようだったら、部屋に入って直接起こしてくれる？　私、ノックの音で起きる自信がないから。それじゃあ、早速お風呂使わせてもらうね」

そう言うと、麻奈はくるりと踵を返してバスルームへと消えて行った。後に残されたジュリアンは何ともいえない顔でその場所に立ち尽くしていた。

「直接起こして良いって――。麻奈はついさっき会ったばかりの男に寝姿を見られても平気なのか？」

ぼそりと呟きながら麻奈の部屋を後にする。その顔には今まで見たこともないような暗い笑みが浮かんでいた。

「信用している、という事か？　だとしたら、とんだ勘違いだよ」

ジュリアンは自嘲気味になおも笑う。

「私がどんな人間なのか知ったら、君は一体どうするのだろうね」

ジュリアンの靴音が夕焼けに染まった静かな廊下に響いてゆく。不意に立ち止まり、彼は自分の足元に目を落とした。透けることなく夕日を反射している革の靴。そして、消えかけた足。もう膝まで透けている。きっと足の先は完全に透明になっていることだろう。

消えていく体。

廊下の壁を見ると、そこにも鏡が掛けてあった。ジュリアンは鏡の中の自分と目が合い、笑みを深めた。

ジュリアンは考える。もしかしたら、自分はもう狂い始めているのかもしれない。

麻奈に最初にした忠告を思い返してみた。此処に住む人達に気をつけろと、自分は確かにそういったはずだ。

「それは勿論、私も含めて」

ジュリアンは楽しそうに独り言を続けながら、足元に伸びる影を見つめた。影の足は透けることも無く、長く長く伸びている。ジュリアンは一人くつくつと笑う。とても楽しくなってきた。

麻奈が自分の過去を知ったら、一体どう思うのだろう。もう話しかけてもくれないだろうか。それとも、目線さえも合わせなくなるかもしれない。

そんな想像をしながら、しかしとジュリアンは思う。此処に来るように選ばれたという事は、麻奈にも後ろ暗い過去が有るという証拠なのだ。なぜならば、此処に招かれるのは胸に罪悪感や後悔を抱えている者ばかりなのだから。

紅い廊下にまた靴音が響く。

コツコツコツコツ……

「所詮は同じ穴の狢。ならば麻奈の望む『いい人』を続けるのも悪くないかもしれない。君はどんな黒い過去をもっているんだ？　せいぜい、化かし合うとしよう――私が正気でいられる内は」

遭遇　6（後書き）

いつも読んでいただきありがとうございます。評価までしてもらえて嬉しい限りです。本当にありがとうございました！！
麻奈は乙女趣味のようですね。
ジュリアン、真っ黒になってきました……。
それでは、また。山石でした。

遭遇　7

麻奈は熱い湯を頭から浴びながら、いつの間にか鼻歌を歌っている自分に気がついた。

汚れた服は洗濯機に放り込んでおいたから、じきにまた着られるようになるだろう。シャワーでぬるぬるした薄桃色の粘液を流して全身を綺麗に洗うと、さっきまでの恐怖が少し薄れていく気がする。

湯張りを終えた合図の音楽が浴室に響いた。麻奈は湯煙の立ち上る浴槽に、足先からゆっくりと浸かった。バスソープで泡立てたお湯に入ると、じわじわと張がほどけていくようだ。

「あぁー、極楽極楽」

言ってから、それはこの瞬間だけの事だと気がついて、寂しさと少しの不安を覚えた。

此処は極楽とは程遠い場所だったことを思い出す。それでも、風呂に入るのは気持ちが良かった。疲れや嫌な気持ちがまるでお湯に溶け出していくようだ。

気持ちに余裕が出てくると、さっき会った人たちの事を思い返してみる気になった。

アノ人。彼のことを考えると、まだ体が少し震えてしまう。

彼に捕まり手繰り寄せられた瞬間、麻奈が感じていたのはただの恐怖だけだった。もう絶対会いたくないとさえ思う。

しかしそう思う一方で、彼の何かが気にかかっていた。『とんとん』に反応したり、子供みたいにそれを真似をしたり。

「本当はどんな人で、どんな事を考えているのかな」

麻奈は湯船の泡を掬い取って、ふぅと飛ばした。
次に浮かんできたのは、サルーンだった。麻奈の中での彼の印象は、静かで絡みづらい人だった。
彼の奇妙な外見には少し驚いたが、恐らく優しい人なんだと勝手に思っていた。サルーンの遠い眼差しを思い出して、麻奈はふうと一つため息をついた。

麻奈はのぼせる前に湯船から上がり、そのままシャワーの線を捻った。熱いお湯が出てきた、麻奈の肌から細かな泡が流れていった。
麻奈は排水溝に吸い込まれていく泡を見つめながら、ジュリアンのことを考えていた。彼の事を考えると、自然に笑みが零れてくるから不思議だ。
彼の物腰や穏やかな顔を見ると、心が少し落ち着くような気持ちになる。

麻奈は浴室を出ると、いつの間にか、にやけてしまっている顔をバスタオルに押し付けた。体に付いた水気をふき取ってから、さっき見つけたジャージに着替える。下着も洗濯中なので直接着ると、肌にごわごわした生地が触れた。少し着心地悪いが、この際仕方が無い。何だか心もとない胸元に手を当てながら、麻奈はすぐにベッドへ潜り込んだ。

「ジュリアンの姿が完全に消える前に、帰る道を見つけてあげたいなぁ」

そう言葉に出してから、ふとジュリアンの泣き顔を思い出して、一人頬を染める。自分はどうやらジュリアンに好意を寄せ始めているようだ。麻奈は胸に芽生えた淡い思いに少しだけ身を任せる。
こんな気持ちになるのは何年ぶりだろう。

ふわふわの羽根布団の感触を堪能していると、眠気はすぐに襲ってきた。神経が高ぶっていて眠れないかもしれないと心配していたが、自分で思うよりも麻奈の神経は図太く出来ているらしい。心地よい睡魔に身を任せて、麻奈は夢も見ずに深く眠った。

見慣れぬ美しい男に圧し掛かられるまでは……。

「おい」

麻奈は夢うつつに自分を呼ぶ声を聞いた。それは囁きにも似た微かな声だったが、低く涼やかに麻奈の耳に流れ込んできた。しかし、聞こえてはいるものの眠くて目を開ける気にもなれず、わざわざそれに答える気も全く湧いてこない。まだ覚醒は遠い。

「ん、まだ。もう少し」

鬱陶しそうに眉間に皺を寄せて寝返りを打つ。まだ眠たいのだ。

枕元に立つ男は、ギシリとベッドを軋ませながら片膝を乗り上げる。

「起きないのか？」

返事を待つ様子もなく男は完全にベッドに上がり、覗き込むようにして麻奈に覆い被さった。

男の長い髪がさらりと落ちて、麻奈の頬を撫でていった。麻奈はくすぐったそうに男の髪を払いのけ、薄く目を開けた。寝ぼけているため、多少焦点の合わない瞳で男を見据え、次の瞬間には驚いて目を覚ました。

そこには夢のように美しい男がじっと自分を見下ろしていた。銀色の長い髪を高い位置で一括りに縛り、切れ長のアイスブルーの瞳は憂いを含んだように冷たく鋭い。高い鼻に、艶のある薄い唇。一見すると女性的にも見えるのだが、太く凛とした眉毛と広い肩幅、たくましい均整の取れた体格は間違えようもなく男性のものだった。

まさかこんな風に起こされるとは夢にも思っていなかった麻奈は、事態が把握出来ずにただ目を丸くするばかりだった。何という心臓に悪い起こされ方だろう。

男は襟を立てた黒い前合わせの服を着ていて、香が焚き染めてあるのか、その胸元からは甘い香りが漂っていた。

「なんだ起きたのか」

どうでも良い事のように麻奈にそう告げると、男は何の遠慮も無く頬に触れてきた。すぐ間近で柔らかい衣擦れの音が聞こえてきて、麻奈の胸は寝起きにしては大分速い鼓動を刻み始めた。

呆けたように声も出せない麻奈を他所に、男は顔を近づけて更に見つめてくる。男の不躾な視線を浴びながら、麻奈はまず浮かんだ疑問とこの体勢解消することにした。

「あの、誰ですか？　退いてください」

男は凛々しい眉を寄せると、不機嫌な声で言った。

「普通」

「は？」

「もっと色気のある女の方が良かったが、この際選り好みしていられねぇか」

男は麻奈の布団を剥ぎ取ると、ジャージの胸元に手をかけようとする。

「ちょ、ちょっと！　何するのっ」

慌てて麻奈は男の手を払いのける。男はびっくりしたような顔をした後、舌打ちして麻奈の手を捕まえた。

「手間をかけさせるな」

声を荒げたわけでもないのに、男の言葉は麻奈の動きを止めさせた。

逆らってはいけないような気迫を男から感じ取って、麻奈は身を竦めた。捕らえられた手も、万力で締め上げられたように動かない。男がおとなしくなった麻奈の服を捲り上げようとしたそのとき、トントントンと扉をノックする音が響いた。

「うるせぇのが来やがったか」

舌打ちして男が手を止める。

助かった。と思った瞬間、男は麻奈の唇をぺろりと舐め上げて素早く身を起こした。不意打ちを受けた麻奈は、何が起きたのか理解出来ずにベッドに未だ転がっていた。

「油断しすぎだ。犯されかけてたって分ってんのか？」

男は初めて笑った。その美しい顔に似合わない露骨な物言いに、麻奈は羞恥と怒りが湧いてきた。

入りますよ。という遠慮がちな声がして、横開きの扉からジュリアンが顔を出した。いつまで経っても中から変事が無いので、様子を見ようと覗いたらしい。ジュリアンは銀髪の男を見てたちまち表情を固くした。

「ユエ。どうして此処に」

ユエと呼ばれた男は面倒くさそうに顎で麻奈を示す。

「新しい奴が女だったから見に来たんだよ。一部屋ずつ虱潰しに探して来てやったのに、とんだ期待はずれだ」

ユエの言葉に麻奈はむっとした。ユエは尚も続ける。

「顔も身体も並だな。悪くねぇけど、良くもねぇ。期待した分がっかりだ」

「ユエは言葉に気をつけるべきですね。麻奈、やって良いですよ」

ジュリアンは枕を振り上げている麻奈に大きく頷いた。ジュリア

ンのお許し（？）を得て、麻奈はユエの後頭部目掛けて思い切り枕を投げつけた。しかし、それが当たる直前、ユエは前を向いたまま首を傾けただけでそれをひょいとかわした。

「何しやがる」

美しい顔に怒りを孕ませユエが振り返った。

「それは、こっちの台詞」

ジュリアンが来たことによって、すこしだけ強気にでる麻奈。

「貴方こそ、自分が何したか分ってるの」

「あれぐらいで騒ぎ立てやがって」

ユエは舌打ちしながら麻奈に近づく。麻奈は剥ぎ取られた掛け布団を手繰り寄せ、胸まで引っ張りあげた。下着を着けていないことを、今思い出したのだ。ユエが再び枕元までやって来て、麻奈を冷めた目で見下ろした。麻奈も目だけを動かしてユエを睨む。

「騒がしい女は興醒めだな。俺はもっと淑やかな方が好みだ」

そう言うが否や、ユエは麻奈の顎を掴んで無理やり上を向かせた。

「何するのっ」

麻奈は伸びてきた手をすかさず払いのけた。ユエが舌打ちするが、麻奈は彼を睨んだまま動かない。ぴりぴりとした雰囲気のまま硬直する二人へ、柔らかい声が割って入った。

「麻奈、彼を相手にしては駄目ですよ。それよりも――」

ベッドの反対側からジュリアンの手が差し出され、麻奈の手をそっと優しく掴んだ。手を引いて麻奈をベッドから降りるように促し、彼はそのままバスルームまで案内していく。

「まずは着替えて来て下さい」

ジュリアンの丁寧なエスコートに、怒り心頭だった麻奈も頬を染めて大人しく従った。ごゆっくり。と声をかけてバスルームの扉を閉めてからジュリアンが部屋へと戻って行くと――

「甲斐甲斐しいことだな」

ユエが長い足を組んでソファーに腰を下ろしていた。

「まだいたんですか」

ジュリアンの声はいつになく冷たい。その視線は心底嫌そうにユエを見ていた。凍えそうな視線をものともせずに、ユエは尊大な態度を崩さない。

「随分大切にしてるじゃねぇか」

「まだ来たばかりで、色々不安でしょうからね」

「嘘吐け。利用できそうならとことん利用する気だろう。可哀想にあのお譲ちゃん、ぼろぼろになるまで酷使されるとも知らないで」

「人聞きの悪い事を言わないで下さい」

ユエは鼻で笑った。

「お前だけに甘い汁を吸わせるわけにはいかねぇよ」

「おや？　さっき好みじゃないと言ったじゃありませんか」

「此処には女がいねぇんだから、アレで我慢するしか無いだろう」

ユエは立ち上がると、ジュリアンの胸の上にドンと拳を打ち下ろした。ジュリアンは僅かに表情を強張らせて、咳き込んだ。かなり痛い。

「独り占めしやがったら許さないからな」

ユエの剣呑な視線を、ジュリアンは唇の端を持ち上げて受け止める。

「見返りがなければ分けてあげませんよ」

ユエは美しい顔を歪めて忌々しげに舌打ちする。

「お前のものじゃねぇだろう」

ユエは足音も荒くドアを力任せに開け、同じように閉めて出て行った。ジュリアンは楽しそうに笑いながらソファーに身を沈め、ゆったりと足を組んで目を瞑った。

「もうほとんど、俺のものだよ」

遭遇　7（後書き）

いつも読んでいただいてありがとうございます！！
新しいキャラ出てきました。彼は口が悪いです。
それでは、また次回お目にかかりたいと思います。山石でした。

遭遇　8

「お待たせ」

着替えを済ませた麻奈がおずおずとバスルームから顔を出した時には、頭の寝癖はきちんと直っていて、薄く化粧も施してあった。ユエに『期待はずれ』呼ばわりされたのはかなり悔しかったのだ。

「そんなに待っていませんよ」

ジュリアンは微笑みながら席を立った。

「さっきの人は」

麻奈は小動物のような警戒した目できょろきょろと辺りを探っていた。

「追い返しましたよ」

途端に麻奈は安堵とも落胆とも取れるため息を吐いた。

「そっか、良かった。あの人本当に失礼な人だった」

頭にきちゃう。と頬を膨らませる。

「私もあの男は嫌いです」

ジュリアンの同意に麻奈は笑った。

その笑顔を見ながらジュリアンは思う。ユエは本当に馬鹿な男だ

と。もっと丁寧に接していれば、恐らくすぐにでも麻奈を落とせていたのだろうに。
　ユエの失敗にジュリアンが内心ほくそえんでいると、麻奈がすぐ側まで寄ってきた。

「私、随分寝てたの？　大分待たせちゃった？」

「いいえ、ご心配なく。私も自室でのんびりしていましたよ」

「それなら良かった」

「早速ですが、残りの住人を紹介しましょう。あぁ、さっきの男はユエと言って、美人ですがあの通りの男です。今後も、あまり関わらない方がいいでしょうねぇ」

「もう、近づきたくない」

　渋い顔で頷く麻奈の顔がほんのり赤くなるのをジュリアンは見逃さなかった。それは怒りのためなのか、それとも……。

「では、最後の一人に会いに行きましょう」

　了解。と返事をして、麻奈はジュリアンの後に付いて歩き出した。

「ねぇ、最後の一人はどんな人なの」

麻奈は初めに通った螺旋階段を下りながら、斜め下で揺れているジュリアンの後ろ頭に話しかける。

「そうですねぇ」

ジュリアンは振り返らずにどんどん階段を降りていく。その歩みに置いていかれないように、麻奈は早足で追いかけた。彼は色々な事に良く気が付く人なのだが、歩調だけはマイペースだった。

麻奈はジュリアンを追いかけながら、こっそりため息を吐いた。

「最後の一人は、そうですねぇ、少々驚くような外見ですね」

「――そう」

此処でびっくりしない外見の人がいただろうか。全員、漏れなく驚くような外見だなんて、まるでお化け屋敷だ。と麻奈は密かに思った。

一階の廊下を歩きながら、麻奈は忙しなく周辺を警戒していた。物陰や角には特に注意を払う。保健室や職員玄関、どれもこれも懐かしいものが目に飛び込んでくるが、懐かしさに浸る事は出来ない。何時アノ人があの濡れたモップを引きずるような音を立てて出てくるか分からないからだった。

今は懐かしさよりも、恐怖の方が断然大きい。

「着きましたよ」

そう言ってジュリアンが軽く扉をノックした部屋は、『木工室』

の札が掛かっていた。色の剥げかけた木の扉には細かな傷がたくさんついている。そうそう、此処って確かにこんな感じだったなぁ。と麻奈はやはり懐かしい気持ちが湧き上がる。

「リーズガルド、入りますよ」

返事は無いが、ジュリアンは扉を開けて中に入って行った。麻奈も恐々、お邪魔します。と呟きながら続く。

まず驚いたのはその部屋の暗さだった。次に気がついたのは、カサカサと何かが擦れあう音。それは一つ一つは小さな音だが、幾つもの音が重なり合い、大音量となって押し寄せてきたのだ。おまけに、部屋には濃密な何かの空気が満ちていて、入るのを一瞬躊躇ってしまう。

それでも、勇気を持って麻奈が一歩踏み出すと、ブーツの下でカサリと何かが音を立てた。驚いて側の壁に手を付いたが、そこにもかさかさとした手触りのものがびっしりと付いている。

「何これ」

麻奈は素早く手を引っ込めた。ようやく目が慣れてきた頃、麻奈は誰かが窓際に立っている事に気が付いた。

自分と同じ位の身長のその人は、俯いているようで顔が良く見えない。突然現れたお客に気付いていないのか、じっと佇んだままぴくりとも動かなかった。

「リーズガルド、起きてください」

ジュリアンがそう言ってカーテンを開けた。シャッと音を立ててカーテンが引かれると、窓から入ってくる西日が部屋の中を紅く染めた。

麻奈は目の前の光景に声が出そうになるのを、口に手を当てて何とか抑えた。悲鳴は危険、悲鳴は危険。何度も自分に言い聞かせる。

そこは、見渡す限り緑の葉が生い茂っていた。壁や床、果ては天井に至るまで、びっしりと蔦が張り巡らされていて、脈打つように部屋中に蔦植物が広がっている。それ等は全て窓際に立つ人物から生えている物で、その人の腰から下は緑色の蔦の集合体に変わっていた。それは最早、人と呼べるのか不安になる姿だった。

良く見ると、床や壁の蔦達はもぞもぞと思い思いに動いていて、それぞれの葉が触れ合ってカサカサと耳障りな葉ずれの音を響かせている。

蔦やその葉っぱが勝手に動いているのを見ると、嫌悪感がせり上がってくる。しかし、麻奈は何とかそれを表に出さないように、無表情を装った。

一面緑色の蠢く部屋は、何かの体内に居るような錯覚を起こさせ、麻奈はまた血液がすぅっと下に降りていくような気がした。

どうやら、さっき踏んだ物は、床を覆いつくす蔦から生えている無数の葉の一枚だったようだ。それはアイビーの様な形をしていたが、唯一つ違うのは葉の中心部分に毒々しい赤色の斑点模様があるところだろう。

「リーズガルド、新しい住人を紹介しに来ました。君で最後ですよ。彼女は麻奈、少し前に着いたばかりです」

ジュリアンの紹介に麻奈は慌てて軽く会釈する。しかし、リーズガルドと呼ばれた男は目を閉じたまま動かない。聞こえていないのだろうか。麻奈は、男がまだ起きていないのかと心配になったが、リーズガルドの瞼がゆっくりと開いて、ジュリアンと麻奈を交互に見た。

最初はぼんやりと見つめているだけだったが、その視線が好奇心を含んで麻奈に張り付いた。じっと見つめられて、麻奈は若干居心地の悪さを感じたが、麻奈の視線もリーズガルドに吸い寄せられていく。

色素の薄い茶色の髪をハリネズミの様に立て、同じ色のくりくりとした大きな目が特徴的だ。口角の上がった口元と顔に浮いているそばかすが、彼を一層可愛らしく見せている。

恐らく中学生くらいの年齢だろう。男の子なのにとても可愛い容姿をした子だった。

この場所に年下の男の子がいる事に少なからず驚いたが、麻奈はリーズガルドを凝視していた視線を少しだけ下へ逸らした。

人間離れした、リーズガルドの奇妙な下半身を残念に思っていると、突然少年から声が掛かった。

「ねぇ、アンタ物覚えはいいほう？」

「え？　まぁ人並みには」

蔦男からの突然の質問にきょとんとする。

「じゃあ、覚えといてよ。オレはリーズガルド。オレの名前を勝手に略したり、愛称なんかで呼ばないでよね。そういうのすごくムカつくから」

太陽のような笑顔でそう告げる少年だが、窓を背に立つその顔には拭い難い影が張り付いていた。

「それからさぁ、アンタさっきからオレの葉っぱ踏んでるんだよね。

痛いんだからさ、早く退いてくんない」

「あ、ごめん」

可愛い顔で辛辣な言葉を放つこの少年は、相当いい性格をしているようだ。

麻奈は慌てて足を退けた。しかし、床中に葉が生い茂っているため、足の踏み場が殆ど無い。仕方なく、今退けた右足を床が見える僅かなスペースにねじ込むと、殆ど爪先立ちになって体を支えた。

「もしかして、コレ全部感覚があるの」

「あるから痛いって言ってるんだけど」

お前は馬鹿か、という視線に麻奈は少しイラっとした。奥歯を噛み締めて怒りを静めていると、リーズガルドが蔦の一本を持ち上げて、麻奈の後ろにある扉を器用に叩いた。

「じゃあ、用が済んだら早速出てってくれる？」

屈託のない顔で彼は出口を顎で示した。

遭遇　8（後書き）

読んでいただきましてありがとうございました。
それから、評価してくださった皆様！！本当にありがとうございます。書き手になってみて、評価してもらうのがこんなにも嬉しいことだと初めて知りました。これからも皆さんに楽しんでいただけるように、もっともっと頑張りますので、どうかこれからもよろしくお願い致します！山石でした。

無理難題　1

それまで黙って見ていたジュリアンが待ってましたとばかりに口を開いた。

「そうですね。それではお邪魔しました。麻奈、行きましょう」

「え、こんなにあっさり終わっていいの？　サルーンさんの時もそうだったけど、もっとこう、あるでしょう紹介する事が。これじゃあ、お互いの名前ぐらいしか分からないよ」

「彼が生意気だという事も理解して頂けたと思うのですが」

ジュリアンの言葉にリーズガルドが顔を歪めた。

「相変わらず、すげぇ毒吐くなぁジュリアン。ねぇ、アンタ麻奈だっけ。此処ではさぁ、馴れ合いたい奴なんて誰もいないんだよね。まして、こんな姿になったら尚更ね。アンタだって本当は気持悪いと思ってるんだろう」

リーズガルドの言葉にどきりとした。確かに、彼の異形な姿は目を逸らしてしまいたくなるほど恐ろしい。しかし、それを彼に悟られたくはなかった。

「全然、そんな事ないよ。そりゃあ、初めて見たときはびっくりしたよ。でも、そんなもの第一印象に過ぎないもの。大事なのはその後。それに、私たち此処に閉じ込められている仲間じゃない！　みんなで協力して出口を見つけようよ」

「ふーん。でも口ではさぁ、何とでも言えるよね」

興奮気味にまくし立てる麻奈に、リーズガルドは疑わしそうな視線を送る。可愛らしい顔で人を値踏みするような目をするリーズガルドは、悪戯を思いついた子供のような顔をしていた。

「あ、じゃあこうしよう。他の奴らにも会ったんだったら、これからオレの言う奴の所に行って来て、そいつから何かもらって来てよ。化け物じみた相手でも仲良く出来ます。って証拠にさぁ」

「待ちなさい、なぜ麻奈がそんな事に付き合わなければいけないんですか。私たちはリーズガルドのお遊びに付き合っている時間は無いんですよ」

リーズガルドは一瞬顔を背けたくなるような、にたりとした笑いを浮かべた。

「時間が無いのはアンタだけだろ、ジュリアン。姿が変わる前に、コイツに出口を見つけてもらおうと必死だもんな。アンタが校庭で肩震わせて泣いてるの見て、オレ思わず笑っちゃったよ」

ジュリアンの目がすっと細まった。構わずリーズガルドは続ける。

「本当、大爆笑！　アンタそんなタマじゃないだろう。麻奈さぁ、ジュリアンに何を言われたか知らないけど、真に受けるの止めたほうが身のためだよ。この男は自分以外――」

「黙れ」

リーズガルドの言葉を、ジュリアンの唸るような低い声が遮った。

その静かな恫喝に、肉食獣のような鋭さを感じて、麻奈は背筋が冷たくなった。

おぁ怖！　とリーズガルドが肩をすくめてみせた。

「麻奈、もう行きましょう。時間の無駄です」

振り返るジュリアンの顔は、いつもの穏やかな顔に戻っている。

麻奈は彼に従おうか迷った。窓際の少年が軽蔑したような眼差しを向けてきたのを見て、胸がざわめいた。

詰まらない奴。リーズガルドの目はそう語っていた。子供の心を掴むには、一緒に遊んでやらなければならない。子供にとって、遊びに付き合えない大人は軽蔑の対象にしかなら無いのだと、６歳年下の弟がいる麻奈には良く分っていた。

「私、こんな所に来たくなかった。みんな酷い姿だし、はっきり言ってお化け屋敷よりもよっぽど怖い。でも、来ちゃったものはしょうがないじゃない。今はやるべき事をやるしかない。絶対みんなで此処から抜け出してみせる。だから――さっきの条件をクリア出来たら、リーズガルドも出口を探すのを手伝って」

「麻奈っ」

苛立ちを含んだ声。ジュリアンの制止を麻奈は振り切った。

「ごめんなさい。時間が無いのは分かってるの。でもこのまま黙ってるなんて悔しいじゃない。それに、此処から出るにはリーズガルドにも協力してもらった方が良いと思う。姿が変わった人には出口が見つけられなくても、みんなで探せば何か手がかりが分かるかもしれない」

「彼はただ難題をふっかけて遊んでいるだけです。例えそれをクリアしたところで、彼は私たちに協力する気なんて更々ありませんよ」

「それでも、このまま嘘吐き呼ばわりされるのは嫌」

麻奈とジュリアンのやり取りをリーズガルドは楽しそうに目をくるくるさせながら見ていた。

「ねぇ、もしも麻奈が条件をクリア出来たら、アンタ達に協力してやってもいいよ」

「約束よ、絶対ね」

麻奈はリーズガルドに歩み寄る。途中、彼の葉っぱを踏まないようにかなり気をつけた。

「約束」

リーズガルドはへらへらと笑いながら小指を突き出してきた。麻奈も小指を出すと、リーズガルドの細い指がするりと巻きついてきた。

麻奈はジュリアンに目を向けると、彼は不機嫌な顔で、麻奈のお好きなように。と言って腕を組んだ

「じゃ、早速行ってもらおうかな。アンタが一番苦手なのって誰？見た目のグロさからいってサルーンかな。あ、それともオレ？」

リーズガルドは目を輝かせている。本当に楽しそうだ。

「一番は……アノ人」

麻奈はついさっき彼に襲われた事を思い出し、苦いものを吐き出すように答えた。その時の恐怖も拭い難いが、ぬるぬるした粘液の感触を思い出すと、自然と眉間が狭くなってくる。麻奈の答えにリーズガルドは、成る程。と頷いた。

「でもアノ人相手じゃ言葉は通じないし、流石に無理かなぁ。それじゃ、サルーンの所に行って貰おうかな」

リーズガルドは一人で頷くと、その顔に満面の笑みを浮かべた。

「そういう訳で、これからサルーンの所に行って、アイツの物だって分かる物をもらって来てね」

心底楽しそうに笑いながらひらひらと手を振るリーズガルドを尻目に、麻奈は不安な面持ちで歩き出した。ジュリアンの制止を振り切った手前、一緒に来てとは言えないが、やはり一人で廊下を歩くのはまだ怖い。

壁に寄りかかったままのジュリアンに縋るような視線を向けてみたが、彼は無表情な顔で肩を竦めただけで、一緒に行くと申し出てはくれなかった。その態度は普段の彼とは違い、とても余所余所しい。

何となく駄目だと分かってはいるのだが、独り言を装って弱々しく呟いてみる。

「もしも、途中でアノ人に会ったらどうしよう――」

「教えたでしょう、水かけて下さい」

間髪入れずに冷たい答えが返って来て、麻奈は震え上がった。
どうやらかなり怒ってるようだ。

「い、行ってきます……」

「行ってらっしゃーい」

陽気なリーズガルドの声を背にして、麻奈は辺りを警戒しながら歩き出した。
リーズガルドの部屋に残ったジュリアンは、冷めた表情で顔に掛かる前髪をかき上げた。それを見てリーズガルドがおかしそうにクックと笑う。

「そんなに面白くないなら、アンタも付いて行ってやればいいのに」

リーズガルドを横目で見ながら、ジュリアンはフンと鼻を鳴らした。

「それより、ちゃんと後を追っているんでしょうねぇ」

「勿論！　こんな面白い事滅多に無いもん」

リーズガルドの蔦が一斉にざわりと揺らいだ。

「それなら結構です」

不機嫌な顔で麻奈の出て行った後を見ると、リーズガルドの蔦がするすると伸びて、薄く開いている扉から廊下へと出て行くところだった。

「麻奈に何かあったら教えて下さい」

有無を言わさぬ響きに、蔦の主は苦笑した。

「……やっぱり一緒に行ってやれよ」

ジュリアンはそれには答えずに、端整な顔に不機嫌な表情を貼り付けたままだった。

その腹の中では、散々麻奈に毒づいていた。自分の言う事が聞けないのなら、少し怖い目に遭ってくればいい。彼はそう思っていた。

無理難題　1（後書き）

いつも読んでいただき、ありがとうございます。
それから、評価してくださった皆様。本当にありがとうございました。拙い文章ですが、もっと読みやすく面白い文が書けるように今後も努力していきたいと思います！

無理難題　2

麻奈はびくりと肩を震わせながら、辺りを注意深く窺った。後ろから物音が聞こえたような気がしたのだが、どうやら気のせいだったらしい。

ため息を呑み込んで耳を済ませながら、恐々進み出す。幸い廊下は何処までも静かで、自分の足音以外は何も聞こえない。

夕暮れの学校はただでさえ薄気味悪いのに、いつアノ人と鉢合わせするかと考えると、麻奈は今すぐにでも走り出したい衝動に駆られる。しかし、ここはぐっと我慢しなければいけない。アノ人に見つからないようにするのが最上の策なのだ。目立つ行動を取って見つかるわけにはいかない。

サルーンの部屋は三階だったが、早いうちに水を用意しなければ安心できない。麻奈は二階へ続く階段を静かに素早く上ると、近くの教室のドアを開けた。きっとここにも目当てのバケツがあるはずだ。ガラリと音を立て、懐かしい光景に一瞬目を細めた。

夕日を受けた紅い教室に立つと、放課後に忘れ物を取りに来たような錯覚を起こさせる。そういえば、何か忘れている事があるような気がした。

どこかでパシャパシャと、水の中で何かが跳ねる音が聞こえた。

「そうだ、水を汲まなくちゃ」

麻奈は一瞬の白昼夢から我に返ると、バケツバケツ、といいながら掃除用具入れを開けた。

アルミ製のバケツを片手に下げて廊下へ出ると、何となく今から

掃除を始めるような気分になってくる。
窓から差し込む紅い光に照らされた廊下は、ひび割れたタイルを寂しげに浮かび上がらせる。人気の無い学校は、なぜか寂しさを増幅させるようだ。

水飲み場がある所まで行くと、廊下の材質が変わったことに麻奈は気が付いた。
色の剥げたタイルではない。ワックスがかけられたような光沢のある滑らかな木製の廊下だ。その上には幾何学模様の毛足の長い絨毯が敷かれている。窓も木枠の飾り窓に変わっていて、壁には繊細な細工が施された鏡が取り付けられていた。
そこは学校というよりも、古風なお屋敷という雰囲気に近いように思える。それでも、学校のように備え付けられた水飲み場と、男女別のトイレがある辺り、ごちゃ混ぜな気がして笑ってしまう。

麻奈はあの人を警戒して、びくびく怯えながら蛇口を捻った。蛇口から出てくる水は意外にも透明な色をしていた。錆びてなくてよかったと安堵して、バケツに水が溜まるのを待つ。
バケツに半分ほど水が入った所で、不意に何かが肩に触れた。ただでさえ縮みあがっていた麻奈の心臓はドクンと心臓が跳ねる。

「きゃぁっ」

麻奈は背後に向けて、持っていたバケツの水を思い切りぶちまけた。

「うっ」

呻き声が聞こえて、麻奈は恐る恐る振り返る。

「てめぇ、何しやがる」

そこには怒りを露にしたユエが、水を滴らせながら立っていた。冷えた怒りの表情は無表情にすら見えるが、それが一層この男の美しさを際立たせている。

ユエはずぶ濡れの髪を掻き揚げた。その手元が小刻みに震えているのを見ると、相当頭にきていることが伺える。しかし、麻奈は彼を怒らせた事などすっかり忘れて、ユエにたっぷりと見とれていた。文字通り水を滴らせた美丈夫は、麻奈には刺激が強すぎた。

ユエの銀の髪は滑らかな頬に張り付いて、長い睫には雫が光っている。水を吸った衣服がユエの肌に張り付き、広い肩幅や筋肉の隆起を浮き彫りにしていた。

頬を染めて自分を見上げる麻奈を見て、ユエは至極満足気に口元を綻ばせた。不機嫌だった気持ちが、馴染み深い眼差しを感じて、ぞくぞくとした快感に変わった。

「ごめん、アノ人かと思って。つい手が滑っちゃた」

目を伏せながら、麻奈は歯切れ悪く謝罪する。そのもじもじとしていた麻奈の手をユエは強引に掴むと、彼は大股で歩きだした。

「え？　ちょっと！　謝ったじゃない！」

抵抗する事も出来ずに、麻奈はずるずると引きずられてゆく。有無を言わせぬ強い力で、遂には近くにあった部屋へと連れ込まれてしまった。

無理難題　2（後書き）

いつも読んで下さって本当にありがとうございます。今回は少し短めになってしまい、少し物足りないかもしれません。すみません、次回はガッツリと書きますので、どうぞご容赦下さい。

それでは、山石でした。

無理難題　3

そこは部屋の真ん中に巨大な寝台が置かれている広い部屋だった。寝台の周りを囲うように、四方の壁に本棚が配置され、中にはびっしりと本が並べられている。

部屋の一角には大きな鏡を掛けられているが、それには鏡を覆う絹の布が掛けられていた。

スタンド型の油式のランプがベッドサイドに置かれているのを見て、麻奈は違和感を覚えた。品があるが、どことなく古い時代の部屋のようだ。あまりにも整然としていて生活感が無く、むしろ図書室のような部屋だった。そのせいで、大きな寝台がやたらと目立っている。

「ここ、ユエの部屋？」

「呼び捨てか。まぁ、構わねぇよ」

そう言うなり、ユエは麻奈を寝台に突き飛ばした。麻奈はたたらを踏んで寝台に倒れこむ。

「痛っ」

麻奈は寝台に投げ出された拍子に尻餅を付いた。スプリングの利いていない、何かごわごわしたものが詰まっているような固い感触がする。

居心地が悪い。きっと寝心地も悪いのだろうな。と思っていると、上から水滴がぽたりと落ちてきた。

「お前のせいで服が濡れたじゃねぇか。責任取れよ」

ぞくりと背骨に響くとろみのある声で、ユエは麻奈に覆い被さるように寝台に上がってくる。

「謝ったじゃない。それに、ユエも悪いんだからね。急に肩を叩くから……」

麻奈は極力ユエを見ないように寝台の上を後退していった。

しっかり頬を染める麻奈を見て、ユエは追い詰めるように後を追った。獲物を捕らえた猫がそれをいたぶるように。

寝台が軋んギシギシと鳴っている。ユエの追従は執拗だ。今は怒りではなく、情欲に燃える瞳で麻奈を捉えたまま、じりじりと距離を詰めてくる。時折、面白がるように瞳を覗きこんでくるので、麻奈はその度に息苦しくなった。

ユエは思う。自分の美貌を意識する存在の、なんと心地良いことか。

「水かけた方が悪いに決まってるだろう」

意味のない会話も、スパイスだとユエは心得ている。

ついに麻奈は背もたれまで下がりきってしまい、寝台から降りようと身体を捻った。ユエは逃がすまいと、麻奈を囲うように手を広げ、背もたれと自分の胸で麻奈を挟み込んだ。

僅かな距離で揺れるユエの美貌に、麻奈は頬を染めて見入ってしまった。

麻奈はこの時、彼を嫌っていた事すら忘れて目の前で薄く笑う彼の美しさに溺れていた。

ユエは寝台の背もたれに手をついて、自分の腕の中で小さくなる麻奈を見下ろした。自分に注がれる潤んだ視線を堪能しながら、これから行われる行為を思い浮かべ身震いする。

そんな艶のある視線に気が付いて、麻奈は慌てて目を伏せた。早鐘のように鳴る心臓の音が外に聞こえるのではないかと不安になる。好きでもない、むしろ苦手としている男とこんな雰囲気になるのは絶対に良くない。

「お、お詫びに洗濯するから――」

上ずった声で場の雰囲気を壊そうとする麻奈の意図を察して、ユエは彼女の両手首を素早く掴んだ。麻奈は驚いて小さく悲鳴をあげる。

細い両手首をまとめて持ち上げて、ユエはそれを寝台の背もたれに押し付けた。

麻奈は極度の密着に緊張しすぎて抵抗らしい抵抗も出来ずに、困惑気味に引きつった声を上げる。それを満足そうに見下ろして、ユエは自らの襟元に手をかけると、それを一気に引き下ろした。上着がはだけてユエの素肌が露になる。

麻奈は緊張のあまり、死ねるのではないかと思えるほど鼓動が早くなるのを感じていた。息苦しくて仕方が無い。

ユエは、冷てぇ。と呟きながら雫が滴る前髪をかき上げ、器用に片手で上着を脱ぎ捨てた。ユエの裸体を目にした瞬間、麻奈はこの体制の危うさを思い知った。ユエの美しさに目を奪われて、抵抗もせずにいた事を今になって後悔する。この先に、何が待ち受けるのかを考えると鳥肌が立った。

麻奈は、身をよじってユエの手から逃れようとした。しかし時既に遅く、彼に掴まれた両腕はびくともしない。せめて体がこれ以上

密着しないようにと、体育座りのように膝を引き寄せバリケードを作ってみたが、それだけでは何となく心もとない。

「洗濯なんてしなくても、服はそこに放っておけばそのうち乾くだろう。だが、その間俺は寒くてしょうがねぇ。だからお嬢さん、一緒に温まる運動してくれねぇか」

麻奈の抵抗を笑いながら、ユエは右手で麻奈の膝をゆっくりと撫でた。

「む……無理、無理です！」

撫でられた膝から何かが甘く身体に沁みこんで、ゆっくりと広がってゆく気がした。それを振り払うように麻奈は首を激しく横に振る。

その拍子に麻奈の髪が一房、肩口から胸元へと流れ落ちた。ユエがそれを指で掬って払いのけると、肩からゆっくりと麻奈の鎖骨に指を這わせた。

「俺は気の遠くなるような長い間、ずっと我慢してきたことがあるんだ」

物語でも聞かせるようなゆっくりとした口調。

「それもこれも、此処には野郎しかいないせいだ。だからもういい加減、限界なんだよ」

ユエの指が麻奈の体の線をなぞる様に、ゆるゆると下がり始めた。

「っく」

脇腹を掠める長い指に、麻奈は思わず声が漏れそうになる。ユエはそんな麻奈の反応を瞬きもせずに見つめた。次第に熱を孕んでくる呼吸を感じて、ユエも段々と熱いものが込み上げて来る。

ユエは麻奈の太ももに手を這わせながら、彼女の両手の拘束を解いた。だらりと下がるその手に力は無い。ユエの思った通り、もう抵抗する気は無いようだ。

堕ちたな。ユエはにんまりと笑って麻奈の顎を掴み、そのまま上を向かせる。

「ま、待って……」

麻奈は最後の理性でユエに懇願したが、その蕩けるような瞳と、色づいて薄く開いた唇はユエには逆効果だった。この顔は悪くないと思い、ユエは満足気に唇を寄せる。

「これ以上待てねぇ。どんな不細工な奴でも良いから、女が来るのを待ってたんだ。ただで帰すわけにはいかねぇよ」

ユエは麻奈の唇にゆっくりと近づいていく。二人の吐息が触れ合い、唇が重なる瞬間……

「ぐっ」

突然、ドンという衝撃を腹に受け、ユエはみぞおちを押さえて体をくの字に折り曲げた。それは全くの不意打ちだった。

油断していただけに、みぞおちに綺麗に入った衝撃で目を白黒させる。苦悶するユエを尻目に、麻奈はするりと寝台から降りた。

「誰でもいいなら、私じゃなくてもいいでしょうっ」

麻奈は涙目で後ずさりした。

「テメェ、こんな時に腹を蹴るか？」

美しい顔を歪めて歯を剥くユエに、麻奈は屈辱に震えながら言った。

「ユエこそ、一体なんのつもり。突然こんなことして」

実は、麻奈はさっきまでこのまま流されてしまっても良いかと思い始めていた。彼が突然自分を好きになったとは到底考えられないが、ユエの美貌を見ていると、そんなことはどうでも良くなっていた。

それなのに……いうに事欠いて不細工とは。

麻奈は枕元に置かれていた火のついていないランプを掴むと、ユエ目掛けて思い切り引き倒した。

「不細工で悪かったわね！」

麻奈はそのままユエを一瞥することも無く、ドアを乱暴に開けた。途中、何かを踏みつけて靴の下でカサリと音がしたが、麻奈はそれに気が付く事なく本だらけの部屋を後にした。

さっき水を汲もうとした水飲み場まで行き、無造作にバケツを拾いあげて水を入れ始めた。

麻奈は自分に腹が立っていた。どうして、流されてもいいなんて思ったのだろう。

水がバケツの底に当たる音を聞きながら、水が一杯になるのを待

つ。その眉間には深い皺が刻まれていた。

麻奈は、今の出来事を全て忘れる事にした。何にも無かった。私は誰にも会わなかった！

自分に暗示をかけながら蛇口を閉じて、足早にその場を離れた。幸い、麻奈の蹴りが余程効いたのかユエが後を追って来ることは無かった。

麻奈はずっしりと重いバケツを抱え、足早に階段を上り始めた。

無理難題　3（後書き）

こんにちは、山石です。いつも読んでいただきましてありがとうございます。

今回こんな感じですが、Ｒ１８にならないように苦労しました（笑）

それでは、また次回お目にかかりたいと思います。山石でした。

無理難題　4

サルーンの部屋に近づくにつれて、廊下や壁にはひび割れが目立つようになった。

いつ崩れてもおかしくない廊下を歩くのはやはり慣れない。おまけに、アノ人の気配を探りながら進むので、自然と足元が疎かになってしまい、瓦礫に足を取られそうになる。

麻奈はバケツを持ちながら、慎重に瓦礫の山を越えていった。途中バケツの重さによろけてしまい、むき出しの鉄骨で腕を擦りむいたが、それ以外はほとんど順調に目的地まで進んでいた。

改めて見るとそこは酷い廊下だった。壁には何の跡なのか分らないほど大きな穴が開いていて、所々焦げたような黒ずみが残っている。そこかしこに小さな穴が開いていて、これが全て銃弾の跡ではないかと考えて、麻奈は背筋が冷たくなった。これらを見るだけで、サルーンの国の内乱の悲惨さが想像できるようだ。

麻奈はバケツを持ちながら、思った以上に困難な道を越えて、問題の壁と天井がえぐれた廊下に到着した。この道を渡るにはバケツを置いていかなくてはいけない。少し前に、此処から落ちかけたことを思い返して身震いする。

麻奈は少し離れた所にバケツを置いて、深く呼吸を繰り返した。頭の中を出来るだけクリアにして、無事に渡りきった自分を思い描きながら慎重に一歩を踏み出す。

ゆっくりと、しかし確実に麻奈は前に進んでゆく。呼吸は自然と浅く速くなり、どうしても指先が震えてしまう。しかし、麻奈は前だけ見つめて必死に足を進めた。

ようやく向こう側に渡った時には、麻奈は汗だくになっていた。
しっかりした足場に辿り着いた途端、足の力が抜けてその場に座り込んでしまった。すると、突然サルーンが音も無く現れた。六本の蠢くたくましい腕を携え、相変わらずどこを見るとも無い目つきで麻奈を見る。

「わ。びっくりした！　あの、何度も来てすいません……」

麻奈は出来るだけ自然に声を出したつもりだった。しかし、一度会っているとはいえ、サルーンのグロテスクな外見に緊張して、麻奈の声はひっくり返っていた。
麻奈の怯えをサルーンは敏感に察知したらしく、表情の無かった顔が僅かに曇った。
麻奈は慌てて言葉を捜す。傷つけてしまったのだろうか。

「あの、さっき助けてもらったお礼をきちんと言いたくて。それから、実はお願いしたい事もあって来たんです」

しかし、いくら取り繕っても麻奈の言葉は上滑りするばかりだった。何を話せばいいのか、きちんと考えておけば良かったと思っても、もう遅い。
自分を見ようとしないサルーンを見上げ、麻奈は途方に暮れた。
上辺の言葉だけでは、サルーンには届かないのだ。

唇を噛み締めて後悔していた麻奈の前に、サルーンの日に焼けた腕が一本差し出された。その手の上には水色の細長い物が乗せられている。

「君の物だろう」

「携帯」

麻奈はサルーンから携帯を受け取ると、懐かしむように表面を撫でた。

「いつの間に落としたんだろう？　ずっと持っていてくれたんですか？」

微かに頷くサルーン。

「ありがとうございます」

今度は自然に声が出て来た。サルーンと視線が合わなくても、彼の顔が無表情でも、麻奈はもう気にならなかった。

「サルーンさんには助けてもらってばかりですね。何かお礼をしたいんですが、今は何も持って来てなくて……」

「必要ない。此処へも、もう来るな」

麻奈は何て返事をしていいのか迷った。彼の拒絶の言葉はまるで自分を否定されたような気持ちになる。

確かめる様にサルーンの顔をそっと伺ってみると、一瞬彼の目が麻奈の瞳を捉え、またすぐに遠い目に戻っていった。

麻奈はサルーンの真意が少しだけ分かったような気がした。彼の中に「来るな」という気持ちは確かにあるのだろう。しかし、それと同時に「来て欲しい」という気持ちが垣間見えた気がしたのだ。拒絶されたくないから、その前に人を遠ざける。きっとそれが臆病で優しい彼の本音なのだろう。

麻奈は心の中で大丈夫と自分を叱咤した。サルーンはいつも『お出迎え』してくれた。携帯だって拾ってずっと持っていてくれたのだ。彼は本当は人恋しいのかもしれない。もしもそうだとしたら、ここで引き下がるわけにはいかない。

「じゃあ、今何か手伝える事はありませんか？　私に出来そうな事があったら何でも言って下さい」

サルーンは麻奈の言葉に何の反応も見せず、踵を返して歩き出した。

「あ。待って」

麻奈はサルーンの後を追いかけるが、彼の歩みは止まらない。これではまるで暖簾に腕押しだ。サルーンは結局、後ろを振り返ることもなく『美術準備室』の札が掛かった部屋へと入って行った。

麻奈は教室の前まで追い駆けてから、どうしたものかと悩んだ。嫌われてはいないだろうが、あまり歓迎されてもいないようだ。しかし、ここで引いてしまっては、いつまで経ってもリーズガルドの条件をクリア出来そうに無い。

麻奈は思い切って美術準備室へと飛び込んだ。

麻奈はかなり勇気を振り絞った。普段の麻奈だったら、こんなに大胆な事は出来なかっただろう。

それは恐らく、サルーンが相手だから出来るのかもしれなかった。

全てにおいて閉じているこの男に妙に親近感を覚えて、麻奈はサルーンの部屋へと入って行った。

「うわぁ」

壊れたカンバスが数個転がっているだけの、ほとんど何も無い部屋を見て麻奈は思わず呟いてしまった。瓦礫だらけの部屋の隅に、薄汚れたテントが一つぽつんと立っている他は全くと言ってよいほど何もない。しかし、上を見上げると、部屋の天井の一部が崩れ落ちていて、まるで天窓の様に空が覗いていた。

空から差し込む茜色の夕陽が、じんわりと部屋を染めていて、それがテントと相まってノスタルジックな気持ちを掻き立てる。

麻奈は天然の天窓から空を見上げた。夕暮れの空を見ていると、いつも麻奈は無性にシチューが食べたくなる。麻奈にとって、夕暮れは家路を急ぐ色だ。そう思い始めたのはいつの頃だっただろうか。まだ幼い頃、「お家へ帰ろう――」とクマが歌いながら家路を走るシチューのコマーシャルを見て以来、夕暮れイコール、シチューの構図が出来上がってしまった。

暖かな食卓、それは麻奈にとって憧れて止まないものだった。しかし、それが叶わない自分は世界の軸から外れていて、独りぼっちで羨ましげにその周りを漂っているのだと否応なしに思い知らされた。

「帰りたい……」

一体どこに？　シチューの待つ家に？　そんなものはもう手に入らないと分っているのに。

自分でも意図しなかった言葉が浮かんできたことに麻奈は驚いた。

「俺もだ」

麻奈の呟きはとても小さなものだったが、サルーンの耳はそれを拾っていた。見ると、彼も空を見上げている。この男には暖かいシ

チューが待っているのだろうか。麻奈はふと聞いてみたくなった。

「サルーンさん。シチューは好きですか」

「しちゅう？　何だそれは？」

在らぬ方向を見ながら不振そうな顔をされた。突然部屋に入ってきて、訳の分からない質問をする麻奈に困惑しているようだ。

「うーん、野菜とお肉のスープ……かな」

そうか、と呟いてサルーンは目を閉じた。

「スープは好きだ。此処に来る以前から、暫くまともな食事をしていない。今、無性に食べたくなったな」

そう言った顔が、心なしか笑ったように見えて麻奈は目を丸くした。しかし、途端にクゥと腹が鳴って自分も空腹だったことを思い出す。

そう言えば、夕飯食べ損ねていたのだ。今となっては、味気ない冷凍食品の夕食もご馳走に思えてくる。

麻奈はこの時、とある決意を固めた。それは、きっとサルーンの微かな笑顔を垣間見たせいだろう。

無理難題　4（後書き）

山石です。いつも読んで下さって本当にありがとうございます。ふと、思い立って始めた投稿ですが、はやいもので一ヶ月経ちました。これからも頑張りますので、皆様どうぞよろしくお願いいたします。

無理難題　5

麻奈は躊躇うことなくサルーンに近づいて行った。彼はさっと六本の腕を組んだ。それは、まるで彼が自分の身を守る姿のようだ。これ以上自分の中に踏み込ませないという無言のメッセージ。麻奈はそれに気が付いていたが、足取りを変えることなく彼に近づいて行く。

「私、此処から出る道を見つけます。貴方を家に帰してあげる。それが私からのお礼です」

そう言ってサルーンを見上げれば、麻奈と視線を合わせない瞳が静かに左右に振られた。

「それは無理だ」

「どうしてですか？」

「お前も、聞こえているんだろう？」

麻奈は大きく首を傾げた。彼の言いたいことがいまいち分らない。サルーンは視線を逸らすことがあっても、話を逸らしたことは今まで無かったはずなのに。

「どういう事ですか」

「何が聞こえるのかは、人それぞれだ。初めはただ聞こえるだけ。だが、段々それが見えるようになる。そして、そのうちに目の前に現れるんだ。まるで、すぐ側に本当に居るかのような圧倒的な存在

感を持って――。　そうなったら、もうこの場所に囚われて抜け出せなく……」

突然サルーンがびくんと体を震わせて動かなくなった。その瞳が、たちまち霞がかったように虚ろに濁ってゆく。

俯いた彼の唇は震えていて、血の気が一気に引いてゆくのが分かるほどに青褪めていた。

麻奈が心配になって声をかけようとしたその時、サルーンが突然顔を上げた。

「アリーシャ」

ふらふらと覚束ない足取りで後ずさりながら、サルーンは自分を抱き絞めるように六本の腕を体に巻きつけた。

「アリーシャ、すまない。許してくれ」

突然怯えたように謝るサルーンに、麻奈は唖然とするばかりだった。サルーンは麻奈の存在を忘れたかのように項垂れて、ぶつぶつと独り言を呟いている。

一体なにがどうなったのだろう。様子のおかしいサルーンを前に、麻奈はどうして良いのか分からずに、ただおろおろするしかなかった。しかし、サルーンが苦しげな声を上げて膝から崩れ落ちるのを見て、慌てて側に駆け寄った。

「大丈夫ですか、誰か呼んで来ましょうか」

サルーンの横に膝を付いて、苦しげに荒い息を吐く彼の顔を覗き込んだ。その額には脂汗が浮き出ていて、体は小刻みに震えている。何か悪い病気の発作のようにも見える。

麻奈はサルーンの背中に手を触れた。じっとりと汗が滲んでいる。遠慮がちに背中を撫でると、サルーンは顔を上げて縋る様な瞳で麻奈を見つめた。

何か言いたげに彼の唇が動いたが、そこから言葉は出てこなかった。いよいよ彼の顔色は悪くなり、麻奈は誰かを呼んで来ようと腰を浮かせたその時、サルーンが突然動いた。

「アリーシャ、そんな目で見ないでくれ……。そんな目で、俺を見るなぁっ」

サルーンは突然腕を振り回して麻奈を払い退けた。サルーンの長い腕が鞭の様にしなり、麻奈のわき腹にそれがめり込む。一瞬息が詰まるほどの強い衝撃を腹に感じて、麻奈の視界は大きくぐるりと回転した。

サルーンに殴り飛ばされたのだと理解する前に、麻奈の体は激しく床に叩きつけられていた。

体が動かない。麻奈の意識は、徐々に暗い淵へと沈んでいった。

「う……痛ぁ」

どの位気を失っていたのだろうか。気が付くと、麻奈は埃だらけの床に頬を付けて横たわっていた。

何が起きたのか理解出来ずに、ごほごほと咳き込みながら、ぼん

やりと床の模様を見ていた。
ずきずきと痛む脇腹が妙に気になる。頭だけ動かして周りを見渡すと、部屋の隅に何か大きな塊がある。
目を凝らしてよく見ると、それはこちらに背を向けて巨体を丸めたサルーンの背中だった。その背中は小刻みに震えていて、そこから切れ切れに彼の苦しげな独り言が聞こえてくる。
麻奈は起き上がろうとする。しかし、体のどこにも力が入らない。

「サ、ルーンさん……」

どうして？　の言葉の代わりに咳が込み上げてきた。

「はい、そこまで」

コツコツと響く軽快な足音を伴って、ジュリアンが涼しげな声で部屋に入ってきた。彼は目を丸くする麻奈の元に跪くと、立てますか？　と声を掛ける。
無言で頷くと、ジュリアンは麻奈を抱き起こしてから肩を貸して支えてくれた。

「ジュリアン、サルーンさんが」

掠れた声で訴えるが、ジュリアンは首を横に振った。

「ああなったらもう手に負えません。今は此処を離れましょう」

「でも……」

「私達に出来る事はありませんよ。また殴り飛ばされるだけです」

麻奈は後ろ髪引かれる思いだったが、大人しくジュリアンに従った。今の自分には何も出来る事はないのだ。それに、息をするだけでもわき腹に激痛が走る。麻奈は体を動かす度に走る痛みに、息を詰まらせながら廊下へ出た。

「リーズガルドの所に行く前に、怪我の手当てをしましょう。放っておいても治りますが、痛むようですね。それに、雑菌が入ったら大変ですから」

ジュリアンが麻奈の二の腕の傷を指しながら提案する。麻奈は今の出来事のショックが抜けきれずに、こくりと頷く事しか出来なかった。

無理難題　5（後書き）

いつも読んでいただいてありがとうございます。
この小説は基本的に、あまりアクションシーンのような動きの無い話ですが、今回少しだけそういった場面があったため苦労してしまいました。アクションものを書いていらっしゃる作家さん……凄いです！！

無理難題　6

「此処からだと私の部屋の方が近いですね。一度そこに寄って手当てをしましょう」

ジュリアンの部屋はサルーンと同じ三階にある。サルーンの部屋はＬ字型の校舎の長い方の先端部分にあるが、ジュリアンの部屋はその対角である短い部分の先端に位置していた。

二階にある麻奈の部屋へ行くよりは近くにあるが、それでもここからだと少し距離があった。

麻奈はふらつく足取りで、ジュリアンに抱えられるようにして歩いた。ゆっくりと歩くだけでも、わき腹はずきずきと痛み、崖を通るときには激痛に耐えながらやっとのことで二人は進んだ。

ジュリアンの部屋に近づくにつれて瓦礫の数も減り、赤い絨毯が引かれた廊下に変わっていった。今は明かりが灯っていないが、クリスタルのシャンデリアのような華美な照明が、夕日をきらきらと反射していた。

手入れの行き届いた廊下を見て、麻奈は安堵のため息を吐いた。ここはもう安全なのだと実感できる。

どうぞ。と促されてジュリアンの部屋に入ると、そこは麻奈の部屋と良く似た造りになっていた。

白く上品な床と壁。落ち着いた家具。しかし、ジュリアンの部屋は麻奈の所よりも一部屋多いらしく、部屋の奥には大きな扉が付いていた。どこを見てもベッドが無いので、ベッドルームなのかもしれない。

「そこで休んで下さい。今、救急箱を取ってきます」

ジュリアンに言われるまま、麻奈は倒れ込むようにソファーに横たわった。ふわふわのソファーに横になると、少し痛みが和らいだ気がした。途端、深いため息が溢れてくる。体に走る鈍い痛みよりも、サルーンに何もしてあげられなかった自分の不甲斐なさに落ち込んでしまう。

おまけに、リーズガルドとした約束も果たせなかったのだ。これでは、一体何をしにいったのか分らない。ジュリアンに迷惑をかけただけのような気がする。

「ねぇ、ジュリアン。どうしてあの時サルーンさんの部屋に来てくれたの？」

小さな木箱を持って隣室から出てきたジュリアンは、麻奈に向かってにっこりと微笑んだ。

「勿論、麻奈が危険だと分かったからですよ。さぁ、まずは腕を出して下さい」

麻奈は横たわったままおとなしく腕を差し出した。

「確かに危ないところだったけど、私が危険だってどうして分かったの？　もしかして、後をつけてきたの」

麻奈は腕に消毒スプレーをかけられながら聞いてみる。

ぴりぴりとした痛みと冷たさに一瞬体が跳ねる。ジュリアンは麻奈の二の腕に顔を近づけると、ふぅと息を吹きかけて患部を乾燥させた。

「まさか。ほら、あれが教えてくれたんですよ」

そう言って扉の近くを示す。ジュリアンの指差した床の上には、濃い緑色の蔦が一本這っていた。見覚えのある、毒々しいまでに赤い斑点のある葉が、まるで手を振るように震えた。

「これ、リーズガルドの」

「そう。彼が麻奈の後を追って、何があったのか逐一私に報告してくれていたんです」

「そうだったの、全然気が付かなかった――。え、逐一？」

えぇ逐一。と頷いて、ジュリアンはシルバーリングが光る長い指でゼリー状の薬を掬い、麻奈の切り傷にそっと塗布した。

「っつ」

つんと染みる痛みに、自然と眉の間を狭めてしまう。

「リーズガルドの蔦は視覚も聴覚も備わっていますから、麻奈が誰に会って何を話したのか、どんな事があったのか、それはそれは事細かに教えてくれました」

麻奈は自分でも、顔が引きつってゆくのが分かった。

ジュリアンは麻奈の腕に透明なテープを貼って、おしまいとばかりに軽く叩いた。

「次は脇腹を見せて下さい」

「えぇ！　こっちはいい」

「駄目です。そっちの方が酷い怪我なんですから。サルーンの力で殴られたら、痣だけでは済まないはずです。それとも……」

言葉を一旦区切ると、ジュリアンは大げさにため息を吐いて見せた。

「ユエには好きにさせるのに、私が触れようとすると拒むんですか」

「なっ」

何でそれを？　と言いかけて、リーズガルドが告げ口したのだと思い出した。なんて厄介な植物だろう。麻奈はジュリアンの顔を直視できずに、そろそろと視線を逸らす。熱を持つ耳と頬。

「脇腹、見せてくれますよね」

にこにこと微笑むジュリアンに、麻奈は首を縦に振るしかなかった。後ろの方から何かの気配を感じて振り返ると、風も無いのにリーズガルドの蔦がカサカサと音を立てて揺れていた。

それは、どう見ても笑っていりうように見えた。

麻奈は腹立たし気にリーズガルドの蔦をにらみ付けたが、蔦はどこ吹く風で小さく揺れている。

そんなふたりのやり取りを全く無視して、ジュリアンが軟膏を片手に麻奈の腹に顔を寄せた。

「さぁ、服を捲くって下さい」

なぜか妙に嬉しそうに見える。

「う……はい」

抵抗するのは時間の無駄だと観念して、麻奈はおずおずと上着の裾をたくし上げた。

無理難題　6（後書き）

読んでいただきありがとうございます。お気に入りに登録して下さった方がいつの間にか増えてきました。本当に、本当に嬉しい限りです。皆様ありがとうございます！これからも少しずつ更新していきますので、どうぞお付き合い下さい。

無理難題　7

麻奈は観念して、しぶしぶ服を捲くった。ゆっくりと露になる白い腹部。ジュリアンの視線がそこに注がれるのを感じて、麻奈は緊張に体を硬くした。

見ると、ジュリアンは薄っすらと微笑んでいる。あまり人に見せたことのない場所を凝視されるのは耐え難い。早く終わりにして欲しいと思いながら麻奈はジュリアンの治療を待っていた。

ジュリアンが、そっと麻奈の腹部に触れた。途端、麻奈はぴくりと体を振るわせてしまった。あまりにそっと触れるので、かえって意識して酷く緊張してしまう。

ジュリアンは白い腹部をじっと見ながら、丁寧に擦り続けている。麻奈はそんな彼から顔を背けた。心なしか、彼の顔に何かの意思が灯っているような気がして、耐え難い羞恥心が湧いてくる。しかしそう思ったのも束の間、ジュリアンは心配そうに眉を下げてため息を吐いた。

「これは酷い。痛そうですね」

ジュリアンは麻奈の右腹部に赤黒く腫れた箇所を見つけて眉をひそめている。

自分の肌に浮かぶ赤い痣を確認して、麻奈はぞっとした。こんなに酷い痣になっているとは思わなかった。ジュリアンが軽く確かめるように麻奈の腹を指で押すと、痛みのために声が出てしまう。

「恐らくですが、内臓にはさほど問題は無いでしょう。でも、もしかしたら肋骨にひびが入ったかもしれませんね。今痛み止めの薬を用意します。それからサラシも。完全に痛みが消えるまでは安静に

していて下さい」

ジュリアンは木箱の中から小瓶を取り出すと、中の錠剤を一粒取り出して麻奈に手渡した。

「呑んで下さい。水なしでも問題ないはずですから」

麻奈は手のひらの錠剤を見つめていたが、口の中に放り込んでゴクリとそれを嚥下した。それを見届けてから、ジュリアンは木箱から出した冷シップを、麻奈のわき腹にぺたりと貼り付けた。ジュリアンは続けて木箱を探ると、中から白いサラシを取り出す。

麻奈はそれを何に使うのかと興味津々で見ていた。

「それ、どうするの」

「巻くんですよ。その状態のままにしておくと、咳やくしゃみをした時に肺が動いて強い痛みを感じるはずです。所詮は応急処置ですが、やらないよりはましでしょう」

麻奈の瞳が知らず、大きくなった。

「さ、服を脱いでください」

途端に顔色がさっと変わる。

「いい！　そんなの巻かなくても、全然平気！　しばら経ったら治っちゃうんだから。――大げさだなぁ、ジュリアンは」

麻奈は冷や汗をかきながら、必死に首を横に振って断った。冗談ではない。そんなに恥ずかしいことをジュリアンにしてもらう訳に

は断じていかない。
麻奈があまりに懸命に断るからなのか、ジュリアンはサラシを巻く事を諦めてくれた。とてもとても、残念そうではあったけれど。

「じゃあ、絶対にこのソファーで安静にしていて下さいね」

麻奈は安堵してから、はい。と良い返事を返した。出来る事なら姿勢を正して敬礼も付け加えたい気分だった。なんにせよ、助かった。

ジュリアンは麻奈の肌を隠すように、捲くった裾をそっと直してくれた。

手当てとはいえ、好意を寄せている男の人にこんなに長い間触れられたのは初めての事だった。こんな奇妙な所じゃなかったらなぁ、と考えて慌てて首を振った。

さっきのサルーンの取り乱しようを思い出すと、甘い妄想もすぐに霧散してしまう。

「此処は怖い所だね」

麻奈は手当てしてもらったばかりの腹を擦りながら絞り出すような声で呟く。

「姿が変わるだけでも凄く怖い。でも、それだけじゃないんだね――」

ぎゅっと上着の裾を握りながら、麻奈は床の一点を凝視していた。

「あの静かなサルーンさんが、あんな風になるなんて……。此処にいたら自分が自分でいられなくなる、そんな気がするの」

ジュリアンは救急箱をサイドテーブルに置くと、向かいのソファーに腰を下ろした。ゆったりと体を傾け、肘掛に左腕を預けて頬杖をつく。

「自分を保てなくなる事は、もしかすると死よりも恐ろしいことかもしれませんね。しかし麻奈、貴女はどれくらい自分というものを知っていますか？　全てを知っているつもりでも、もしかするとそれは自分の中のほんの一部分で、自分でも気付いていない別の一面が存在するのかもしれません。正気を失って、その部分が漏れ出すことの方が、私は何よりも恐ろしい」

「そんなに難しく考えた事は無いけど、此処に長くいたら駄目だって事が良く分かったわ」

それを聞いてジュリアンは薄く微笑んだ。なぜかそれはとても満足そうな微笑に見えた。

「ねぇ、ジュリアンは何か聞こえるの」

「何かとは」

「サルーンさんが言ったの。此処にいると、何かが見えるんだって。初めは聞こえるだけなのに、段々それが見えるようになるって。私には何のことなのか分からないから――」

ジュリアンはどうなの？　と麻奈は小首を傾げると、彼は続き部屋の扉をちらりと見た。麻奈もつられて、今は閉じられているそれに目を向ける。

「さぁ。私にも何の事だか分かりません」

そう答えるジュリアンは、いつもの素振りと何も変わりない。それなのに、麻奈にはなぜか彼が嘘を吐いているように感じられた。たった今、続き部屋にちらりと向けた視線のせいだろうか。それとも、何気なさ過ぎるからなのか、それは麻奈にも良く分らなかった。

「それよりも、この後リーズガルドの所に行こうと思っていましたが、それはとても面倒ですね。丁度あそこに彼の蔦があるので、あれに話しかけて今回の件は終わりにしましょう」

「あぁ、そっか。あの蔦は聴覚も備わってるって言ったっけ。でも、何か逃げたみたいで癪だなぁ」

「麻奈は罵られるのが好きなんですか？　あぁ、そういう趣味なら勿論止めませんけど」

「嫌いです。スミマセン、行きたくありませんっ」

「今後も彼には関わらない方が良いでしょう。恐らく無理難題を押し付けてきますよ。幸い、彼はあの部屋から出て来られないので、あそこに近づかなければ会うこともありません」

渋い顔をしながら立ち上がろうとした麻奈に、ジュリアンが片手でそれを制した。そのまま扉の近くで揺れているリーズガルドの葉を、嫌な物を持つ手付きで拾い上げると、麻奈の口元にマイクのように近づけた。

「どうぞ」

「えーと――。何て言えばいいかな」

麻奈は、差し出された緑と赤の斑模様の植物を見ながら考えた。こういう場合、どう言えばいいのだろうか。

失敗した事には変わりはないのだから、取り繕っても無駄だと悟って、麻奈は自棄になりながら蔦に話し始めた。

「えっと、聞こえますか？　麻奈です。リーズガルドも知っての通り、えー……失敗しました。サルーンさんから記念品もらえませんでした。でも、私は仲良くなる気満々だったからね。ちょっと今回は失敗したけど、まだ諦めてないからそのつもりで。だってリーズガルドは期限設けなかったでしょ。サルーンさんと親しくなって、絶対記念品持って行くから待ってなさいよ！」

「まだ諦めてないんですか」

「もちろん。あの生意気小僧に思い知らせてやりたいじゃない」

「今のも彼に聞こえてますよ」

「あ、しまった」

麻奈は頭を掻いた。興奮してつい本音が漏れてしまった。それを少し冷めた目で見ながら、ジュリアンがリーズガルドの蔦を部屋の外へポイッと放り投げた。

「そういう事ですから、君は大人しく部屋に帰って下さいね」

蔦は不満気にカサカサと震えたが、ジュリアンは有無を言わさず、ぴしゃりとドアを閉めてしまった。

無理難題　7（後書き）

いつも読んで下さってありがとうございます。
肋骨にひびが入ったときには、シップとサラシが良いそうです。ジュリアン実は正しい処置をしようとしていました。
それでは、また次回お目にかかりたいと思います。山石でした。

耳に届く音　1

リーズガルドを部屋から閉め出してから、ジュリアンはいつものゆったりとした足取りでまたソファーに腰を落とした。その様子を見ていた麻奈は、ジュリアンの足元を見て顔を曇らせた。こうして彼の全身を眺めていると、嫌でも足元に目がいってしまう。

「足、また透けてきたね。どんどん上ってきてるみたい」

「そうですね、進行するスピードも速くなったように感じます。このままだと、麻奈を手伝える時間はあまり残されていないようですね」

ジュリアンは困ったような顔をして自分の足元を見る。その足は既に膝まで完全に透明になっていて、半透明の部分は腰の辺りまで上がってきていた。

「じゃあ急がないと。っ痛……」

麻奈は慌てて立ち上がり、脇腹の痛みに一瞬息を詰まらせる。

「急に起き上がってはいけません。それに、麻奈の怪我が完全に治るまでは動くつもりはありませんよ」

「でも」

「いいから横になって下さい。その代わり、治ったらたくさん歩かせますからね」

少しでも休ませてくれようとするジュリアンの心遣いが嬉しかった。麻奈は素直に頷いてソファーに再び収まった。

「確か、自分のなりたい姿になるんだったよね。ジュリアンはどうしてその姿なの？　透明人間になりたかったの？」

「透明人間――。そうかもしれません」

自嘲気味に笑うジュリアンを見て、麻奈は聞いてはいけない事だったかと後悔した。望む姿、それと同時に見たくない姿なのだとジュリアンが言っていたのを思い出す。

しかし、よく考えたらそれはおかしな話だった。普通の人間は、見たくないと思うような姿になりたいだろうか？

麻奈は、小骨が喉に刺さったような不快な疑問を感じた。それは肝心な所でつじつまが合わないことに対する奇妙な違和感。そもそも、此処の法則は何もかもがおかしいように感じられる。でたらめでグロテスクで、とても悪趣味なのだ。

気にはなるが、考えたところで引っ掛かった小骨はそう簡単に取れそうもない。それならば話題を変えた方が良さそうだと麻奈は思った。

「そういえば、靴はそのままなのね」

「あぁ、それは私が靴下を履いているからだと思います。肌に直接触れていない衣服は透けないようですよ」

ジュリアンは靴を脱いで見せてくれた。光沢のある靴の中身は、もう既に透明になってしまっていて麻奈が見る事は出来なかったけれど。

「その足は見えないだけで、ちゃんと在るんだよね？　無くなってたりしないよね？」

「えぇ、ちゃんと在りますよ」

そう言って、ジュリアンは片方の足のつま先を掴んでみせてくれた。目に見えない何かを掴んでいる形で静止するジュリアンの手を見ると、実に不思議な気分になってくる。まるで出来の悪い手品を見ているようだ。しかし、これは種もなければ仕掛けもない、現実の出来事なのだ。

夢だったらどんなにいいだろう。麻奈は此処に連れて来られてから何度そう思ったか知れない。しかし、此処に来たおかげでジュリアンに会えた。それだけはこの奇妙は場所で唯一の嬉しい出来事だ。

「良かった。でも、このまま下から透明になっていったら、最後の方は首だけしか見えなくなっちゃうね」

生首状態のジュリアンを想像して、何とも言えない気持ちになる。美青年の空飛ぶ生首はさぞかし見応えがあるだろう。麻奈の良からぬ妄想に、ジュリアンは苦笑した。

「それは私も考えました。ですが、もっと間抜けなのは髪だけになった時だと思いませんか？　天辺の髪だけふわふわ浮いているのは、カツラが飛んでいるみたいですよ、きっと」

眉を寄せながら少しおかしそうに笑うジュリアンを見て、麻奈はつられて笑ってしまった。

「だから、そうなる前に出口を見つけて下さいね。期待しています

よ」

予期しなかった言葉を投げかけられて、麻奈は息を呑んだ。

頑張るよ。と曖昧に麻奈は頷いてみたが、彼の言葉に少しだけ息苦しさを感じた。

期待されるのは嬉しい半面、少し辛い。結果だけを求められてるような気持ちになるのだ。

期待している。この言葉を浴びるほど聞いていた毎日を麻奈は少し思い出した。

数年前、麻奈の母親は自由奔放な長男に期待を寄せるのは時間の無駄だと早々に諦め、従順な妹の方に家業を継いでもらおうと考えた。

麻奈の家の家業、それは大きな個人病院だった。母親は麻奈に大きな期待を寄せた。麻奈もそれに答えようとしたのだが、頑張れと言われるたびに、陸に上げられた魚のように息苦しくなった。

麻奈は自分のシャツの裾を握り締めた。思い出したくない事を思い出してしまった。なぜだか、本当に酸欠になってしまったみたいに頭が痛くなる。

その時、麻奈の耳元で小さな水音が上がった。

パシャ、パシャ。すぐ近くで聞こえる不思議な音。麻奈は物思いに沈んでいた意識を引き上げた。

「どうしました」

「――何でもないの。もう痛みも引いたから、治ったみたい。そろそろ行こうか」

そう言うが早いか、麻奈は立ち上がって歩き出した。

腑に落ちない顔をしながら、ジュリアンも麻奈の後を追ってくる。

麻奈は今、水面を叩く水音を確かに聞いた。絶対に空耳ではないと言い切れる。

それは嗅ぎ慣れた匂いを伴って麻奈の元に届いたのだ。あれは――塩素を含んだプールの匂いだった。

耳に届く音　1（後書き）

いつも読んで下さってありがとうございます。サブタイトルってつけるのが難しいと良く聞きましたが、やってみると本当に悩みます。それではまた次回、お会いしたいと思います。山石でした。

ランキングに登録してみました。もしも、良ければポチッと押して下さい。よろしくお願い致します。

耳に届く音　2

麻奈とジュリアンはそれぞれバケツを持って、廊下に立っていた。アノ人対策のため、中には水がなみなみと入っていてとにかく重たい。こうしていると何かの罰で廊下に立たされているようだが、二人はどこから校舎内を捜索しようか話し合っていたのだ。

「周りをよく見て、何か少しでも気になった事があったら教えて下さい」

「分かった。でも、ジュリアンはこの建物全部調べたんでしょう」

「勿論調べましたよ。しかし、結局出口は見つからず――。それに、麻奈が来てから建物の形が変わってしまったので、また初めからやり直しです」

うんざりといった顔でジュリアンは肩を落とした。

「それは、お疲れ様だね」

学校のイメージを追加してしまった麻奈は、若干の責任を感じて在らぬ方向へ視線を逸らした。

「でも何か手応えというか、怪しい所の目星くらいは付いてたんでしょう」

「それが全く」

困っちゃいますよね。とジュリアンは軽く笑った。

麻奈はため息を吐きたくなった。

「じゃあ、一度端から順に調べてみたほうがいいかな」

「そうですね。時間は多少かかるかもしれませんが、それが一番の近道かもしれません」

「それなら、この三階から始めようか」

麻奈は、ジュリアンの部屋の隣に位置する教室の扉に手をかけた。入ってみると、そこは何の変哲もない普通の教室だった。

机が整然と並べられていて、教壇が少し高い位置に設置されている。黒板も至って普通の物で、チョークの白い粉の跡が残るそれは授業の名残を思い起こさせる。ざっと見てもおかしな所はまるで無い。今にも生徒が入ってきそうな、そんな雰囲気だ。

ジュリアンは扉の横に備え付けられている掃除用具入れを開けて中を調べている。そこには汚れて真っ黒になった雑巾と、古い箒が数本入っているだけだった。

出口を探すといっても、何をどうしたらいいのか麻奈には検討もつかない。麻奈は持っていたバケツを近くの机の上に置いて、窓から外を眺めた。どこまでも広がる不気味な電信柱の大群が目に入ってきて、麻奈の心臓がきゅうと一回り小さくなったように締め付けられた。

不気味な景色。しかし、ただそれだけのはずなのに、訳も分らず妙にそれが気にかかる。湧き出る不快感に戸惑いながらも、麻奈はそれに抗うように窓に近寄っていった。

「開くかな」

試しに窓を開けてみると、スライド式の窓は問題なく開いた。顔だけ出して下を覗き込むと、校舎の側に作られた寂れた花壇が見えた。校庭の端に建てられた緑色に濁ったプールや、ペンキが剥げかけた小さな体育倉庫も麻奈の記憶にあるものと全く同じだった。

外の空気は冷たくもなく、暖かくもない。室内と全く変わらない空気に、また微かな違和感を覚えた。

「外っていう感じがしませんね」

いつの間にか、すぐ隣にジュリアンが立っていた。彼は窓から少し身を乗り出す形で外を眺めている。

「風も無ければ、匂いも無い。温度も湿度も部屋の中と変わらない。変だと思いませんか」

「そうだね。まるで、この学校ごと大きなドームの中にでもいるみたい」

麻奈は自分で発した言葉をもう一度頭の中で転がしてみた。

もしかしたら本当にそうなのかもしれない。この不可思議な場所で感じる息苦しいような閉塞感はきっとそのせいなのだ。現に、この校舎は透明な何かで覆われている。それは何かの加工を施したドーム状の建設物かもしれない。そうなると、出口は校舎の中ではなくて外にあるってことになる。

しかし、と麻奈は頭を振った。此処に来た時は鏡を通って来たのだ、少なくともそこは出口の一つに違いない。

麻奈の眉間はだんだんと狭まっていた。頭の中がこんがらかってきそうだった。

こんな時にはとにかく動くに限る。思考の迷路に囚われてしまう前に、目の前にあるものに向かって行くのだ。

「ねぇ、ジュリアン。やっぱり踊り場の鏡を先に調べてみよう――」

ピー……ガガァ……

麻奈が最後まで言い終わらないうちに、教壇の上に付いているスピーカーから耳障りなノイズが聞こえてきた。

「何？　誰が放送なんて」

「しっ！　静かに」

ジュリアンがスピーカーを睨んだまま、麻奈の唇に指を当てた。スピーカーからは今も耳障りな音が漏れている。麻奈も息を殺して聞き入った。暫くすると、ノイズに混じって微かに人の声が聞こえてきた。

『ここ・・・ガガァ・・・から・・・ピーられ・・・う・・・な・・・』

「何て言ってるの」

「しっ」

スピーカーから流れる音は低くか細い。聴き取り辛いその声は、何を言っているのかさっぱり分からなかった。

徐々にノイズが小さくなって声が幾分聞き取り易くなってきた。しかし、言葉が切れ切れにしか聞こえてこないので解読は難攻した。

何度目かの放送を聴く内に、麻奈はようやく内容を繋げる事が出来た。

『ここから……で……られると……おもう……な』

「此処から出られると思うな？」

麻奈は背筋に冷たいものが流れていった。隣ではジュリアンが小さく身じろぎをしている。

スピーカーからは壊れたように、繰り返し繰り返し押し殺した声が流れている。低く抑揚の全く無い声。人の声ではないような、その淡々とした口調に麻奈は鳥肌が立った。誰かがどこかで自分たちを見ているのだ。

麻奈はいつの間にか、ジュリアンの手を胸の前で握り締めていた。ジュリアンは震える麻奈に気が付いて、その肩を軽く引き寄せた。安心させるように、震える肩をそっと叩く。ジュリアンの手の温かさに麻奈の緊張は少し解けていった。

「麻奈、放送室はどこですか」

「え」

「この学校は麻奈の通っていた中学校にそっくりだと言っていましたね。だったら、放送室の場所は分かりますね」

スピーカーからはまだ不気味な放送が続いている。麻奈がはっと気が付いたのと、ジュリアンが踵を返したのはほぼ同時だった。

「行きますよ」

ジュリアンはそう言うが早いか、麻奈の手を引っ張って駆け出していた。その素早い動きに対応できずに、麻奈はジュリアンに引きずられるように後に続いた。

「どっちですか」

扉を出た所でジュリアンが麻奈を振り返る。麻奈は遠い記憶を呼び起こそうとして、廊下の天井を凝視した。当時、あまり放送室には馴染みが無かったように記憶していたので、思い出すのに時間がかかってしまった。焦れたようにジュリアンが麻奈の手を強く握る。

「待って！　えぇと――確か二階だったはず。……そうだ！　西側の校舎の突き当たり、サルーンさんの部屋の真下」

ジュリアンはそれを聞くと麻奈の手を離して階段を駆け下りて行った。

「ジュリアン！　待って」

一人でそこに取り残されるのが嫌で、麻奈もジュリアンを追って階段を走る。しかし、全力疾走のジュリアンには到底追いつかない。みるみる遠ざかって行く彼の背中を、麻奈は必死で追いかけた。しかしすぐに息が切れてしまい、どんどんふたりの距離は離れる一方だった。

麻奈は、もう見えなくなってしまったジュリアンを追いかけて、二階にある自分の部屋の前をぜいぜいいいながら通過した。奥の廊下に、上等な幾何学模様の絨毯が敷かれているのを見て、顔を歪めた。その絨毯には見覚えがある。

嫌な事を思い出してしまい、無理をしてでも早く通り過ぎようとした矢先、最も開いて欲しくない扉がガラリと開いてユエが出てきた。ユエは走る麻奈を見つけると驚いた顔をしたが、すぐに美しい顔を不機嫌に歪めた。

「お前か」

麻奈はユエを無視してそのまま走った。ユエの脇をすり抜けようとした瞬間、突如長い手が伸びてきて走る麻奈の腕を強引に掴んだ。急に走りを止められて、麻奈は肩で息をしながらユエを睨んだ。

「急いでるの！　邪魔しないで」

「この不愉快な声は一体なんだ？　どうしてあんな所から声が聞こえる？」

ユエは廊下のスピーカーを顎で示した。

どうやら、ユエはスピーカーを知らないらしい。ユエの国には無い物なのかもしれない。

「――来れば分かるよ」

説明するのが面倒なのでそう答えて、麻奈はユエの手を振り払って走り出した。背後から舌打ちする音が聞こえたが、麻奈はそれに構わずジュリアンの姿を追いかけた。

耳に届く音　2（後書き）

いつも読んでいただきましてありがとうございます。
小説を評価して下さった方がたくさんいて、とっても驚いております。甘口、辛口どんな評価でもとても嬉しいです。こんな感じの小説ですが、お付き合いして下さって本当にありがとうございます！
それでは、山石でした。

耳に届く音　3

L字型の校舎の二階、東側の長い廊下の突き当たりに放送室はひっそりとあった。ジュリアンは、音が漏れるのを防ぐための分厚い鉄の扉を開けようとしたが、何度ドアノブを回しても扉は開かない。鍵がかけてあるらしい。ジュリアンは歯軋りした。珍しく焦っていたために、鍵がかかっている可能性を失念していたのだ。

廊下には、未だノイズに混じってボソボソと低い声が響き渡っている。

いっその事蹴破ろうかとジュリアンが考えたとき、麻奈がユエを伴って現れた。

ジュリアンはにやりと唇を吊り上げた。渡りに船とはこの事だ。

「ユエ。このドアを破壊して下さい」

突然の無茶な要望にユエは腑に落ちない顔をしながらも、走ってきた勢いのまま扉に思い切り蹴りを入れた。バキンという鈍い音がして、蝶番が壊れて扉はゆっくりと内側に倒れていった。

ユエの隣で麻奈が信じられない物を見る目つきで扉とユエとを見比べていた。

ジュリアンは二人に構わず暗い部屋の中にするりと滑り込んだ。

いつの間にか奇妙な放送は止んでいた。ジュリアンが部屋の中に入った事に気が付いて、麻奈も慌てて後を追ってきた。

「誰もいない」

そこは小さな部屋だった。部屋の真ん中に放送用のマイクや機材

が並べられていて、床にはCDや年代物のレコードが入った一抱えほどのダンボールが積み上げられているだけで、どこにも人の姿は無い。

古い埃の臭いが鼻に付く。ジュリアンが窓に引かれたままのカーテンを開けると、シャッという音と共に部屋は茜色に照らし出された。そこには人が隠れられるような場所など無かった。

「どうして、さっきまで放送がかかってたのに――窓から逃げたの？」

「それは無いでしょう。ほら、窓には鍵が掛かっています。それに、床の埃には私達の足跡しか付いていません」

「じゃあ、どうやって逃げたんだろう」

麻奈は不可解な出来事に不安になった。これでは推理小説の安い密室トリックみたいだ。

麻奈が心の中で悪態を吐いたのも束の間、ジュリアンの一言を聞いて麻奈は蒼白になった。

「この機材、どうやら使った形跡がありませんね」

分厚い埃が溜まっているそれは、触れればはっきりと指の跡が付くほど汚れていた。しかし、機材には指の跡はおろか何の痕跡も残っていない。長い月日の間に積もった埃が厚い膜となり、機材の上を覆っていた。

「おまけにこの機材は壊れているようです。電源が付きません」

パチパチとスイッチをいじるジュリアンが神妙な顔で呟いた。誰

かの喉が、ゴクリと音を立てた。

「――どういう事」

麻奈は震えながら尋ねた。

「分かりません。でも、この放送室では放送を流す事は出来なかったという事です。麻奈、他に放送できる設備はありますか」

「分からない。でも、私の中学校にはここしかなかったような気がする」

ジュリアンは考え込むように顎に手を当てている。

麻奈は恐怖が足元から這い上がってくるような気がして、両手で自分を抱きしめた。その手が小刻みに震えているのが分かる。推理小説どころか、一気に怪談になってしまった。

「ユエ、お願いがあります」

扉にもたれて傍観していたユエに、ジュリアンは声をかけた。ユエはじろりとジュリアンを見ただけで、両腕を組んだまま動かない。

「麻奈を部屋まで送って下さい。こんな状態の麻奈を、この先連れてはいけません」

麻奈は顔を上げてジュリアンを見た。優しく微笑んでいるのに、冷たい目。足手まといだと言われた気がした。

「大丈夫だよ、私も一緒に――」

「いえ、私も少し調べたい事もありますから。それに、その状態でアノ人に会ったら走れるんですか」

そう指摘されて、麻奈は膝に力が入らないことに気が付いた。それほどまでに、この場所に恐怖を感じている事に愕然とする。麻奈は悲しい思いでふるふると首を横に振った。

「調べ終わったらきっと報告に行きます。だから、私が戻るまで大人しく部屋で待っていて下さい」

麻奈の頭がこくりと頷くのを見て、ジュリアンは目を細めて優しくそこに手を置いた。

「では、お願いします」

ユエの肩を叩くと、ジュリアンは扉を跨いで走り出した。

「――勝手に頼んで行きやがって。俺の意思は無視かよ」

舌打ちしながらユエは放送室を後にする。麻奈はこんな部屋に一人残されては堪らないと思い、慌ててユエの後を追う。

廊下に出ると、麻奈を待っていたようにユエが立っていた。彼は突き刺すような視線を麻奈に向けると、無言で歩き出した。付いて行こうか麻奈が迷っていると、いらいらしたようにユエが振り返った。

「さっさと来い」

「……うん」

麻奈が自分に追いつくのを待って、ユエは再び歩きだした。

「ねぇ、こういう放送は前にもあったの？」

「放送？」

「さっきみたいに、突然四角い箱から声が聞こえてくる事」

「いや、初めてだ。大体、さっきの部屋は一体何だ」

「大雑把に説明すると――あの部屋にある機械を使って、マイクっていう物に話しかけるとその人の声がさっきの四角い箱から流れる仕組み」

「ほぅ。で、誰が放送したのか確かめに行ったらそこには誰もいなかった。おまけに機械は壊れていた。それでお前は怯えてるわけか」

ユエはのんびり歩きながらにやりと笑った。美しい顔は邪悪な表情をしても美しい。麻奈は意地悪そうに歪んだユエの顔を見ながら頬を膨らませた。

「だって怪談みたいで怖いじゃない」

「そんな事でいちいち怖がれるかよ、馬鹿馬鹿しい。本当に恐ろしいものって言うのは、こんなものじゃない」

高い鼻の頭に皺を寄せて、なぜか腹立だしげに歩くユエを見ていると、ある疑問が沸いてくる。聞いても良い事かと少し迷ったが、結局好奇心に勝てなかった。

「ユエは普通の姿に見えるけど、どこが変わったの」

ユエは雷にでも打たれたようにぴくりと体を震わせた。一瞬の間と冷たい空気。ゆっくりと振り返ったその顔は、恐ろしいほど剣呑な視線をしていた。その刺すような視線を浴びた麻奈は、数歩後ろに下がってしまった。

「……知りたいか」

ぞっとするような響きの低い声に気圧されて、麻奈は慌てて首を横に振った。

「そういうお前は、まだ変化無しか」

「私はまだ来たばかりだから。そんなに早く変わらないんじゃないかな」

「いや、時間は関係無い。あの肉ゼリーは着た早々一気に変わった。名前も名乗らないうちにな。そうかと思えば、ジュリアンみたくじわじわ変わる奴もいる」

「そうなの？」

もしかすると、自分でも気が付かないうちに変化が始まっているかもしれない。麻奈は青褪めながら自分の体を見回した。服の中に手を入れてお腹や背中にも触ってみる。幸い、異常な感触は無かったので安堵の息を吐く。

「手伝ってやろうか」

ユエが舌なめずりでもしそうな表情で麻奈を見ていた。

「要らない！　結構です」

麻奈は首を振りながらユエから離れて歩いた。二人は麻奈の部屋の前まで来ると、ユエが優雅に扉を開け恭しく右手を胸に当てながら一礼をした。

「ご到着あそばしました。怖がりなお姫様」

それは洗練された美しい所作だったが、明らかに馬鹿にした態度に麻奈はむっとした。しかしその目は主の意思とは裏腹に、流れるようなユエの動作に吸い寄せられていた。

麻奈はそれが堪らなく悔しくて、ユエに見とれた自分をごまかすように、無言で部屋に入っていった。後ろ手に扉を閉めようとしたその手を、無骨なユエの手が遮った。

耳に届く音　3（後書き）

読んで下さってありがとうございます。暑い日が続いていますが、皆さんはどうお過ごしでしょうか？

私は夏風邪を引いてしまい、更新が少しだけ遅れてしまいました。

体調管理には気をつけたいと思います。それでは、また。

耳に届く音　4

「何してるの」

扉にかかるごつごつとした無骨な手を眺めながら、麻奈はユエに問いかけた。彼は笑みを深めるばかりで答えようとはしない。

麻奈が嫌そうに、しっしっと追い払う手をものともせずにかいくぐると、ユエは躊躇いもなく部屋の奥へと入ってきた。それからゆっくりと振り返ると、しげしげと麻奈を見た。

「何？　何か用なの？」

麻奈は無意識に鳥肌を立ててユエと距離を取る。

「ジュリアンに置いて行かれて悲しいか」

その言葉は麻奈の胸に刺さった。薄々気が付いてはいたが、はっきり言葉に出されると苦い気持ちがあふれてくる。そう、自分はジュリアンに置いていかれたのだ。それは足手まといと言われた事と変わらない。

「……そんな事、ないよ」

ユエの唇がきゅっと上がった。幼い子供が新しいおもちゃを手に入れたら、こんな笑い方をするかもしれなかった。

「そういえば、あっさり置いて行かれたよなぁ。無理もないだろうな、完全に怯えて震えていたからな。あれじゃあ、ただの足手まといだ」

傷口にこってりと塩を塗られた気分になって麻奈は下唇を噛み締めた。そんな事は言われなくても分かっている。

「何が言いたいの」

涙を辛うじて堪えてユエを睨む。

「アイツを信用するのは止めておけ。利用出来なくなったら、あっさり切られるだけだ」

麻奈は返す言葉が見つからなかった。きっとジュリアンは役に立たないと判断したら、何度でも麻奈を置いて行くだろう。

「みんなそう言うんだね。リーズガルドにも似たような事を言われた……」

急に視界が滲んできて、麻奈は急いで俯いてそれを隠した。麻奈にとって、この奇妙な場所ではジュリアンだけが心の拠り所のような存在なのだ。それを否定されたくない。

いつの間に移動して来たのか、ユエが麻奈のすぐ目の前に立っていた。麻奈は涙で霞む視界を晴らそうと、顔を背けながら瞬きを繰り返す。不意にユエの手が麻奈の顎を捉え、強い力で上を向かせた。瞳から零れて頬を伝う涙を、ユエの親指がそっと拭った。

ユエに泣き顔を見られたことは麻奈にとって屈辱だった。しかし、一度溢れた涙は後から後から零れてくる。顔を背けたいのに、じっと見下ろしてくる冷たい色の瞳が恐ろしいほど綺麗で、麻奈はそのまま動けずにいた。

「アイツの事で泣くなんて、滑稽だな。見ていて不愉快だ」

いっそ優しいほどの声色で、ユエの言葉は麻奈の心に棘を刺す。

麻奈はこの男の前で泣いている自分が堪らなく惨めになり、ぎゅっと目を閉じた。涙が更に溢れて、頬に新たな涙の筋を作る。

閉じた瞳からも、熱い雫が溢れてくるのを感じて、麻奈は手の甲でごしごしと擦った。

不意に自分の手が退けられると、暖かく濡れた何かが麻奈の涙の跡を這うようになぞっていった。驚いて目を開けると、ユエの舌がゆっくりと離れていくところだった。

「何、するの」

「馬鹿だな。お前は」

ユエは掬い上げるように麻奈の背中と膝裏に手を入れてその体を横抱きにすると、そのまま優しく床に横たえた。麻奈はユエが何を言おうとしているのか分からない。彼の冷ややかな瞳を見ていると何も分からなくなってくる。

「ジュリアンを信用して、依存して。奴に利用されている事に気付きもしない」

ユエの黒い服が目の前を塞いだと思ったら、ため息と共にたくましい体が覆い被さって来た。甘い香の匂いが麻奈の体を包んでゆく。彼の長い銀の髪が肩口から流れて、麻奈の頬をくすぐった。ユエは完全に麻奈の上にのしかかり、彼女の足に自分のそれを絡めていった。

麻奈は何が起きたのか分からずに、瞬きを繰り返した。その度に

涙が零れ頬に落ちていった。ユエは、それを再び指で掬い取る。酷い言葉とは裏腹に、その手つきはとても優しいものだった。

麻奈は思い出したようにユエの胸を押し返した。しかし、ユエはそんな抵抗を笑いながら跳ね除けると、麻奈の耳に顔を寄せた。

「奴の優しさ全て嘘だ。奴がお前に優しくするのは、都合の良い道具にするための手段でしかないんだよ」

熱い息が耳にかかる。麻奈はユエの胸をなおも押し返そうとしたが、ユエの体はびくともしない。服越しに触ったユエの胸板は、硬くて厚い。麻奈の細い腕では、到底動かせるとは思えなかった。それでも麻奈は必死に押した。これ以上、彼の口から何も聞きたくなかった。

「お前は知らないんだ。奴がどんなに酷い人間なのかを――」

耳元でユエは物憂げなため息を吐いた。それは耳から入り込み、麻奈の頭の中を甘くかき回していく。ユエは麻奈の耳をなぞるように舐めると、耳の奥まで舌を差し入れた。グチャグチャという篭った音と共に、熱い舌がぬるぬると動かされる。今までに無いほどの快感に耐え切れず、麻奈は弓なりに仰け反った。

「……何で、そんな事言うの。ジュリアンは何度も私を助けてくれたもん。此処で頼れるのは、ジュリアンだけ……」

ユエの唇がゆっくりと下りて、麻奈の項に吸い付いた。

「んんっ」

ゆっくりと蛭が這うような舌の感触に鳥肌が立ち、麻奈はユエの

上着をきゅっと握り締めた。ユエはわざと甘い音を立てながら執拗に吸い付いてくる。思わず漏れそうになる声を何とか飲み込むが、麻奈はそれだけで息も絶え絶えになっていた。それは酷い拷問のような気がした。

「じゃあ、教えてやろう。奴が何をしたのか」

ユエは麻奈の項から唇を離して、その顔を挟み込むように両手で掴む。鼻が触れそうなほどに近い距離で、怒りを灯したようなアイスブルーの瞳が揺れている。麻奈は目を逸らすことも出来ずに、挑むようにユエの瞳を見つめ返した。

「ジュリアンは、俺を囮に使ったんだ」

「囮？」

ユエの歯が悔しさでギリリと鳴った。

「そうだ。あの肉ゼリーが選ばれた時、変化する前のアイツが鏡に映った。その時、ジュリアンは俺に言ったんだ。これはチャンスだ、今この鏡は外と繋がっている。これを使えばきっと外に出られると。俺は閉じ込められている事にうんざりしていたから、奴の提案を受け入れた。脱出できる事を願って鏡を通って外へと出た。出た先は全く知らない場所だったが、とにかく遠くへ走った。二度とこの訳の分からない場所に捕まらないようにな」

ユエの眉間が険しくなってくる。麻奈はジュリアンの言葉を思い出していた。鏡から出ようと色々試した。彼は以前そう言っていた。その時に何かがあったのだろうか。

「走るうちに段々体が重たくなり、思うように身動きが取れなくなってきた。やがて俺は走る事はおろか、立っている事さえも出来なくなっていた。それでも必死に、地べたを這いずりながら前に進もうとしたよ。だが、その時初めて分かったんだ。俺の体に目には見えない何かが巻きついていると。俺はそれを振り払おうとしたが、それはますます俺の体を締め付けてきやがった。そして次の瞬間、巻きついた何かは、俺の体中の骨を一瞬で折りやがったんだ。これ以上俺が逃げられないようにな。激しい痛みに意識が遠くなって、気が付いたらまた此処に戻されていた。その内ジュリアンがひょっこり姿を見せて、白々しくこう言ったんだ。こんな結果になって非常に残念だった、しかし脱出しようとするとどうなるのかが分かってとても良かった。ところで、自分は違う場所で脱出を試みたが、それはあと少しの所で失敗してしまった。今度鏡が光ったらまた試してみたいから、その時はまた囮になって欲しいと……」

ユエは言葉を区切ると、また激しい歯軋りをした。すぐ目の前でバリっと鳴る歯に、麻奈は怯えていた。犬歯をむき出しにしたユエの顔が更に近付く。

「奴は、鏡から脱出しようとすればどうなるか知っていたんだ。そして、俺が目立った行動を取っている間に、自分だけ此処から逃げようとしやがったんだ。俺達を閉じ込めている奴の注意を、自分から逸らすためだけに俺を利用したんだ。その上、ぬけぬけとまた頼みたいなどと言いやがって！」

「ジュリアンが本当にそんな事を――？　きっと何か誤解が……」

麻奈の言葉を遮って、許せねぇ！と唸るように呟いたユエの瞳は、猛り狂わんばかりの怒りが渦巻いていた。自分の頬を挟む手に力が入り、麻奈はびくりと震える。麻奈は剥き出しのユエの怒りに怯え

ていた。今のユエには何を言っても聞こえないのかもしれない。そんな麻奈の様子に気が付いて、ユエの目が細まった。とても甘く。

「怖がらせたか？　可哀想に」

激しい怒りを引っ込めて、飛び切りの猫なで声で麻奈の頬を優しく撫でる。

「じゃぁ、胸糞悪い奴の話はもう止めだ。もっと楽しい事をしようぜ」

耳に届く音　４（後書き）

読んで下さってありがとうございます。
気が付けば、お気に入り登録が５０件を超えていました！本当に皆さんありがとうございます！こんな感じの話ですが、次回を待っていて下さっている方がいると思うと執筆にも熱が入ります。どうか今後ともお付き合い下さい。それでは、また。

耳に届く音　5

ユエはからかうように笑って、麻奈の喉笛に噛みついた。その犬歯は鋭く痛い。麻奈はこのまま喉を噛み千切られてしまうような錯覚を起こした。

「んっ」

強い力で首筋を吸われ、麻奈はたまらず声を上げる。その反応を楽しむように、ユエは麻奈の首筋をぬるりと舐め上げた。

「ふっ……」

背中に悪寒に似た快感が走り、麻奈の腰が跳ねた。

「ここか」

ユエはぺろりと唇を舐めると、麻奈の首に指を這わせた。

「ん……」

麻奈は震えながらその手を振り払おうとした。しかし、ユエは左手で麻奈の両手をさらうように掴んで頭上にまとめ上げると、赤く色づいた首筋に更に唇を寄せた。

「言えよ。ここがいいのか」

「んん……」

こってりと舌を這わされて、麻奈は眩しいくらいの快感に目を瞑った。真っ赤になって顔を背ける麻奈に気を良くしたユエは、目の前の白いシャツのボタンを器用に片手で一つ一つ外してゆく。

その間も、ユエの舌は麻奈の首筋を蹂躙し続けた。麻奈は両手の自由も奪われ、嵐のような快感に耐えることしか出来ない。

「言えないのなら仕方ねぇなぁ。体に直接聞く事にしよう」

酷く楽しげに笑って、ユエは麻奈のシャツを開き、キャミソールを捲り上げた。激しく上下する水色の下着に包まれた胸元を目にして、ユエの興奮はさらに高まった。麻奈は首を振って抵抗の意を示す。動かせるのは最早そこだけだった。

ユエは麻奈の形の良い胸に、濡れた唇を寄せて軽く歯を立てた。それは、長らく忘れていた女の香りと、瑞々しい弾力をもって跳ね返してくる。ユエは徐々に体が熱くなってくるのを感じた。

「本当に、もうやめ――」

触れては離れ、また責め立てる様に吸い付くユエの唇に、麻奈は涙目で声を上げる。このままでは本当に最後まで流されてしまう。

抵抗の言葉も空しく、快楽に翻弄されていく自分に麻奈は戸惑っていた。それを知ってか知らずか、ユエは麻奈の胸元に舌を這わせながら邪魔な下着に手をかける。その時、唐突にコンコンと扉を叩く音がした。

「お邪魔ですか？」

場違いなほどのんびりした声が降ってきた。見ると、扉にもたれたジュリアンが腕を組んで麻奈達を見下ろしている。ユエは舌打ちしながら顔を上げ、視線で射殺せそうなほど鋭い目をジュリアンに

向けた。

「邪魔だ。失せろ」

「すみません。調べ終えたら報告すると、麻奈と約束していたものですから」

ジュリアンはひょいと肩を竦めながら部屋へと入って来る。麻奈はジュリアンの顔を見て、安堵すると同時にとても恥ずかしくなった。今のこんな状態を見て、ジュリアンは自分の事をどう思うだろうか。

麻奈はユエの下から逃れようと全力でもがいていた。本当なら、こんな恥ずかしい所をジュリアンに見られるのは、身もだえするほど耐え難いのだ。しかし、ユエの手は未だ麻奈の両手を掴んで離さず、両足も体重をかけて絡めたままになっている。麻奈は自由にならない手足を動かそうとするのだが、そのどちらも麻奈の力では振りほどく事は出来なかった。

「おい、暴れるなよ。まだ始めたばかりだろう」

麻奈が突然暴れ出したのを見て、ユエは一層力を加えた。活きの良い魚のように身をよじる麻奈の耳に口を寄せて、とろりと熱い言葉を流し込んでくる。

「折角ジュリアンが来たんだ、どうせならアイツに見ていてもらうか？　燃えるぜぇ、観客がいた方が。おい、手出ししないのならそこで見ていてもいいぞ」

ユエは麻奈の耳から口を離し、ジュリアンに向かってにやりと笑った。麻奈は、ちぎれんばかりに顔を振った。ジュリアンにそんな

所を見られるなんて、死んだほうがましだ。
忘れていた涙がまた込み上げてくる。ユエは至極楽しげに笑うと、麻奈の顎を捉えて真っ直ぐに見つめた。

「泣くなよ。そんな顔で泣くと、もっと虐めたくなるだろう。きっとアイツもそう思ってるぜ」

顎でしゃくるようにジュリアンの方を示す。つられて麻奈もジュリアンに目を向けると、彼の冷たい視線に出会い背筋が凍りついた。ジュリアンは底冷えする無表情な目で麻奈を見ていた。瞬きもせずに麻奈を穿つその視線受けると、なぜだか激しく責められているような気がする。

「――ごめんなさい」

麻奈は反射的に謝った。自分でも何を謝ったのか分からないが、何かを許して欲しいと思った。
ジュリアンの眉間に僅かに皺が寄った。ポケットに手を突っ込みながら、彼はつかつかと二人に近寄ってくる。
麻奈は固唾を飲んでジュリアンを見ていた。このとき、すぐ上に圧し掛かるユエが、微かに緊張して身構えるのが分かった。麻奈の手を離して、いつでも動けるように腰を浮かせる。ジュリアンは二人の側まで来ると、しゃがみ込んでユエの頭をぺしりと叩いた。

「何を馬鹿な冗談を言っているんですか。いいから麻奈を離しなさい」

「っ痛てぇな、俺は本気だ」

ユエは怒った様子も無く渋々麻奈の上から身を起こすと、大して

痛くもない後頭部を撫でながらソファーに収まった。
ジュリアンが麻奈に手を差し伸べる。その顔は、いつもの微笑みを浮かべていた。

「大丈夫ですか」

「うん」

麻奈は空気が一瞬で変わった事に戸惑いながらその手を取った。身を起こしてもらいながら、涙をごしごしと拭う。助かったという気持ちよりも、消えてなくなりたいと思う羞恥心のほうが大きい。麻奈はジュリアンの視線を避けるように俯いた。そんな麻奈の様子を全く無視して、ジュリアンは顔を寄せて覗きこんでくる。

「首、痕になっていますね。他にも痛い所は無いですか」

「え？」

首に手をやり、シャツの前が肌蹴たままになっている事に今更気が付いた。慌てて捲くられた服を直してボタンを留めようとしたが、手が震えてうまくいかない。ジュリアンがやんわりとその手を退け、代わりにボタンを留める。

「怖かったんですね、可愛そうに」

麻奈はされるがままになりながら、ジュリアンのシルバーリングの光る長い指を見ていた。滑らかによく動く指をじっと見ていると、それは不意に動きを止めて麻奈の襟元を少し持ち上げた。

「さっきの放送――」

「え？」

「どこで放送されていたのか、私なりに目ぼしい所を見て回っていたんですが、どこにもそんな設備はありませんでした。まだこの学校の全てを調べたわけではないのでなんともいえませんが、リーズガルドに引き続き探すように頼んでおきました」

「そう――」

麻奈は、心此処に在らずといった返事しか返せない。実際、さっきはあんなに気味が悪かった放送も今ではどうでもいい事のように思えた。

「一番上のボタンが取れていますね」

麻奈は襟元に目を落とした。この取れたボタンを見るたびに、ユエにされた事を思い出すのだろうか――。麻奈は自分がジュリアンを裏切ってしまったような気持になって、ただ彼から目を逸らし続けた。

「きっとユエが引きちぎったんでしょう。見つけたら私が拾っておきます」

麻奈はお礼の言葉を口の中で呟いて、そのままジュリアンから身を引いた。麻奈が瞬きをする度に拭いきれなかった涙が頬を滑り、そのままポタリと床に落ちてゆく。ジュリアンは小さくため息を吐いた。

「麻奈、廊下で顔を洗ってきて下さい。そんなに泣くと目が腫れて

しまいますよ」

ジュリアンは相変わらず優しい。麻奈の胸に広がった訳の分らない罪悪感は、彼の温かい一言で驚くほど軽くなっていた。

「うん」

麻奈は赤くなった目元に手を当てて少し微笑みながら、ふらふらと少し頼りない足取りで部屋を出た。

「お前、さっき何する気だった？」

麻奈が部屋を出て行くのを見届けると、黙って様子を見ていたユエが口を開いた。

「何の事ですか」

「とぼけるなよ。その服の中に何が入ってるのか、俺が知らないとでも思うのか」

ジュリアンはふふふと笑うと、ユエの向かいのソファーに座った。ユエは長い足を組み変えながら、それを気に食わない様子で眺めていた。

「そいつで、どっちをどうしようとしたんだ」

「だから、何の事ですか」

「お前の殺気は駄々漏れなんだよ。言っておくが、あの女に傷を付けるような真似はするなよ」

「おや、随分優しいんですね。情でも移りましたか」

「俺はお前と違って女には優しいんだ。それに、あの俺を見る視線――堪らねぇな。やっぱり女は良いねぇ。久しく忘れていた快感だ」

「ナルシストも大概にして下さい」

「ふん、いつになくご立腹じゃねぇか。さては、お前まだ手を出してねぇな」

「私はユエと違って、それしか考えていないわけじゃありませんから」

ユエは大輪の花が咲き誇るように笑った。

「じゃあ、俺が先だな」

「どうぞご随意に。麻奈がよいと言えばですが」

その口調には余裕が伺える。実際、ジュリアンは麻奈にそんな事を言わせるつもりはなかった。彼女に触れていいのは自分だけだ。

「畜生、だったらさっきは何で止めやがった。今度邪魔したら許さねぇからな」

分かりましたよ、とジュリアンは頷いておいた。

「それはそうと、アイツが付けていた下着。見たことも無い形だったが、アレはどう外せばいいんだ」

その問いに、ジュリアンは苦笑いするしかなかった。

耳に届く音　5（後書き）

いつも読んでいただきましてありがとうございます。
この後、ジュリアンは下着のはずし方をユエにレクチャーした事でしょう……。彼はそういう男です。
それでは、また次回お目にかかりたいと思います。山石でした。

鏡へ（アノ人の場合）　1

麻奈は扉をきちんと閉めてから、まだおぼつかない足取りで水飲み場へと向かった。頭のどこかが麻痺しているようで、上手く自分の気持ちがコントロール出来ない。鼻を啜りながら、流れる涙を手の甲で拭いた。

自分でも、なぜこんなに涙が出るのか不思議だった。何がそんなに怖かったのだろう。ユエに襲われたからだろうか。違う、と麻奈は首を振った。あの時のジュリアンが恐ろしかったのだ。

囮に使ったんだ、というユエの言葉が耳に蘇ってくる。あの時は半信半疑で聞いていたが、もしかするとあれは本当の話かもしれない。

麻奈は一度大きく息を吸いこんだ。今の自分には、ジュリアンしか頼る相手がいないのだ。だから、彼を信じて付いていこうと決めた。例えどんな事があっても……。

水飲み場の蛇口を捻り、勢い良く流れ出る冷たい水を、少々腫れぼったい目に当てる。化粧が落ちるかもしれないが、今更構わない。これだけ泣いたのだ、きっともう落ちてしまっているだろう。麻奈は数度顔を洗ってから、顔を拭くものが無い事に気が付いた。

仕方なく、頭を傾けて肩口に顔を擦りつけた。蛇口を閉めようとして、その手が止まった。

此処には水が流れてる。それは、上下水道が通っているという事だ。もしかすると、下水道管を追っていけば、外に通じている所が分るかもしれない。

蛇口から流れっぱなしになっている水が、渦を作りながら排水溝へと吸い込まれていく。麻奈は水しぶきが掛かるのも気にならずに、水の流れをずっと見ていた。

「外に出られる――」

少し遅れて心臓がドキドキと脈打った。このことをジュリアンに話してみよう、きっと喜んでくれるに違いない。麻奈はそう思って、淡い期待に興奮しながら蛇口に手を伸ばした。

その時、背後に嫌な気配を感じて、突然全身が粟立った。後ろから、濡れたモップを引きずるような音が聞こえてくる。振り向きたい、でも確認するのが怖い。麻奈は先ほどの興奮がさっと引いていくのが自分でも分った。一気に氷水を頭からかけられたような気分だ。

麻奈が固まっていた時間はほんの数秒の間だったが、それが命取りになった。気付いた時には、すぐ後ろでその音はぴたりと止まっていた。

麻奈はゆっくりと振り返る。アノ人は、まるで麻奈を見上げるようにして足元に薄く広がっていた。廊下にへばりつく、肉色の塊が蠢いている。カタツムリのように這って来た跡がぬらぬらと光っているのを見て、麻奈は気分が悪くなった。

アノ人は麻奈に覆いかぶさるように体を持ち上げ、更に左右に伸び始めた。それはまるで通せんぼをしているようだ。もしかしたら、本当にそうなのかもしれなかった。

声が出せない。喉がかさかさに渇いているせいだ。麻奈は浅い呼吸を繰り返しながら、後ろに一歩下がった。しかし、水飲み場があるせいでそれ以上は下がれない。どこにも逃げ道はなかった。

アノ人の触手が麻奈を求めて伸びてくる。それは、麻奈が逃げられない事が分かっているかのような、ゆっくりとした動きだった。

今からジュリアンに助けを求めても間に合わない。

焦る麻奈の耳に、蛇口から出しっぱなしになっている水の音が聞こえた。麻奈は考えるよりも早く蛇口に飛びついて、親指で流れ出る水に蓋をした。丁度ジェット噴射の様に水の勢いが増して、麻奈は自分が濡れるのも構わずに照準をアノ人に合わせた。

「ヴゥゥ！」

急に冷たい水を浴びせられて、アノ人が耳を突き刺すような悲鳴を上げた。麻奈はその隙を付いて、アノ人の脇をすり抜けると、駆け出した。ジュリアン達のいる部屋に戻ろうとしたのだが、廊下の先にアノ人の触手が蜘蛛の巣のように張り巡らされているのが見えた。

麻奈は仕方なく、踵を返して反対側の廊下へと駆け出した。

「麻奈、どうしました」

「こりゃ、やべぇな」

騒ぎを聞きつけて、ジュリアンとユエが飛び出して来た。

「アァァァァ！　オォォォ！」

最悪のタイミングでフリーズ状態が解けたアノ人が、奇声を発しながら動き出した。獲物を探すように麻奈とジュリアンたちに頭を巡らせてから、一瞬迷った後に麻奈をめがけて猛然と触手を伸ばし始めた。

「ひぃ！　何でぇ」

自分を追ってくる触手を見て、麻奈は半狂乱になりながら全力で

走った。その背中をユエが追いかけようとしたその瞬間、ジュリアンがユエの腕を掴んだ。

「何だ」

ユエは苛々しながら振り返る。ジュリアンは遠ざかるアノ人から視線を外すことなく、掴んでいる腕に力を入れる。

「アノ人、いつもと様子が違うと思いませんか？　今、明らかに麻奈を選んで追いかけて行きました」

「だから何だ」

「おかしいと思いませんか？　アノ人が誰かを識別して追いかけた事なんて今まで一度もありません。なぜ麻奈を追ったのか、興味がありますす。少しの間様子を見ましょう」

「馬鹿か！　そんなことをしたらあの女が絞め殺されるぞ」

ユエはジュリアンの手を振り払うと、廊下に溜まった薄いピンク色の粘液を避けながら走り出した。

「やれやれ――」

一人廊下に残されたジュリアンは、いつもと変わらないゆったりした足取りでみんなの後を追い駆けた。

鏡へ（アノ人の場合）　1（後書き）

読んで下さってありがとうございます。ここ数日でお気に入りの登録がぐっと増えた気がします。たくさんの方に読んでもらえて本当に嬉しいです。ありがとうございます。それでは、また。

鏡へ（アノ人の場合）　2

はぁはぁ。自分の荒い呼吸だけが響く廊下を、麻奈は何度も躓きそうになりながら必死で走った。すぐ後ろには、アノ人の触手が粘ついた音をさせながら麻奈を追いかけてどこまでも伸びてくる。

体力の無い麻奈は、もう既に息が上がっていた。後ろを振り返る余裕は無いけれど、背後から聞こえるビチャリビチャリという濡れた音が、アノ人が離れずに自分を追ってくる事を告げている。

廊下の先には、麻奈が初めて此処に来た時に降り立った螺旋階段が見えている。

階段を下りれば、アノ人の追い駆けてくる速度が少しでも遅くなるだろうか。それとも、上ったほうが良いのか。とにかく、この真っ直ぐな廊下をいつまでも走っているのはとても危険だと麻奈は考えていた。重たい足を懸命に動かして、麻奈は階段を上ろうか下りようか迷っていた。

何となく上った方が良いような気がして、階段を一段上がった途端、麻奈の足に粘々した生温かい物が巻きついた。

ぬるぬるとしたその感触が麻奈にさきほどの恐怖を呼び起こさせた。たちまち両足に巻きついてきたそれは、強い力で麻奈の足を引っ張り始める。麻奈はそのまま廊下に引き倒されてしまい、危うく顔面を階段にぶつけそうになった。

その時、早く起き上がらろうと焦る麻奈を目掛けて、触手の波がうねりながら押し寄せてきた。

「ひっ！」

避ける間も無く、淡い肉色の触手に足が絡め取られて、たちまち

身動きが取れなくなった。それでも、麻奈は前だけを見て、触手から逃れようと必死にもがいた。

生暖かい感触が鳩尾まで上がってくる。そのおぞましさにぎゅっと目を瞑って、麻奈はひたすらばたばたと暴れた。床に爪を立て、引き込まれまいと抵抗するが、麻奈の体は徐々にあの人に手繰り寄せられてゆく。

「グアァァ」

突然アノ人が突然悲鳴をあげて、麻奈に絡みつかせていた触手を一斉に引いた。

「立て」

驚いて後ろを振り返ると、ユエが長い箒を逆手に持ち、触手を薙ぎ払っているのが目に入ってきた。

「ユエ」

「早く行け」

なおも麻奈に巻き付こうとする触手を叩き落としながら、ユエは麻奈を背に庇ってアノ人と対峙した。

「でも、ユエは？」

「俺のほうが奴より強い。とっとと行けっ」

ユエは振り向きもせずにそれだけ言うと、あの人の触手をなぎ払う。麻奈は少し後ろ髪引かれたが、ありがたくユエにこの場を任せ

る事にした。ユエはいかにも戦い慣れている様子で、長い柄の箒を自在に操るその姿は華麗な舞を舞っているようにも見えた。
麻奈は駆け出した。上階に向かう階段の前には、既にあの人の触手が這い回っているので、螺旋階段を足早に下りて行く。
ユエに感謝しなくてはいけないと思いながら、麻奈は滑る足元に注意を払いながら階段を駆け下りた。

獲物が逃げた事に気が付いて、アノ人が麻奈を追うように前に出る。

「おっと、テメェは通せねぇ」

ユエの不敵な顔に汗が一筋流れ落ちた。何しろ触手は際限なく押し寄せる。追い払っても追い払っても、まるで疲れを知らない機械のようにしつこく迫ってくるのだ。
しかしそんなアノ人も、どうやら痛みは感じているようだ。箒で打ち払われるその度に、小刻みに震えながら動きを止める。だがそれも一瞬の事で、すぐにまた新たな触手を伸ばして前に前にと進んで来る。アノ人の歩みは止まらない。悲鳴を挙げながらも、狂ったように前進してくる。
そんな様子を見て、ユエも流石におかしいと思い始めた。アノ人とは今までに何度か遭遇していたが、その時は少し痛めつければ逃げて行った。こんなにがむしゃらに向かって来るのは初めての事だ。何がそこまでこの生物を駆り立てるのか。

「きゃあ！」

その時、階段を下りていた麻奈が粘液に足を滑らせて転んだ。腰を打ち付けてしまい、顔を歪めながら痛む腰を擦っている。
ユエはようやく合点がいった。アノ人の目当ては麻奈なのだ。

ジュリアンの言っていたように、アノ人はきちんと麻奈を識別して追いかけているのだ。何がこの生物の琴線に触れたのかは知らないが、此処に入ってきた唯一の女を求めているのだ。

そう考えて、ユエの中に沸々と怒りに似たものが沸き起こってきた。

ユエは大きく踏み込むと、触手の海を抜けてアノ人の本体を横殴りにした。しかし、それでもアノ人の前進は止まらない。すぐさま違う触手を伸ばして低く地を這うように前に出る。

彼はユエを邪魔者と判断したようで、触手を横薙ぎにして払いのけようとしている。気が付けば、押し負けるようにユエはじりじりと後退していた。

「くっ、きりが無ぇ」

ユエが額の汗を拭う一瞬の隙を突いて、アノ人が吹き抜けの柵をするりと抜けた。自在に変化する体を長く伸ばして、アノ人は階段を下りる麻奈を目掛けて吹き抜けから飛び降りた。

麻奈はその時、ちょうど踊り場の大鏡の前を駆け下りるところだったが、背後からボチャンという音と共に、アノ人が突然降って来たのを見て体が竦んでしまった。

アノ人は落ちた衝撃のために、プリンの様にゆらゆらと揺れている。

「止まるな。走れっ」

上からユエの叫び声が聞こえてきた。麻奈は我に返り、慌てて踵を返す。走り出そうとしたその瞬間、目の前の大鏡から光が溢れ始めた。

鏡へ（アノ人の場合）　2（後書き）

読んで下さってありがとうございます。お気に入りの登録が１００件を超えました。ついこの間まで５０件だったと記憶していましたが、この数日の間に2倍の数になっていました……。驚くと同時にとても嬉しく思っています。登録して下さった皆様、本当にありがとうございました。それでは、また。山石でした。

鏡へ（アノ人の場合）　3

目に染み入るような、柔らかいの光を放つ鏡。誰もが今はそれに目を奪われていた。麻奈は突然光りだした鏡の前で、逃げることも忘れて立ち尽くしてしまった。

しかし、アノ人だけは鏡など目に入らないかのように、ゆるゆると階段を下り続けている。すぐ後ろに迫る濡れた音を聞きながら、それでも麻奈は鏡に写し出された光景から目を逸らすことが出来ない。

そこには、目を丸くしている自分の他に、背の高い褐色の肌をした痩せた青年が映っていた。青年は目を瞑りながら、麻奈の後を追うようにのろのろと階段を下りてくる。その頬は痛々しいほどこけていて、目の下にはべったりと隈が張り付いている。肩まで伸びる強い癖のある灰緑色の髪と、垂れ下がった目元が特徴的な青年だ。

麻奈は振り返らずにはいられなかった。そこには肉色のゼリーのような塊が、ふるふると自分を追って揺れているのが見える。麻奈は確信した。この鏡に映る青年はアノ人の本当の姿なのだと。

「何をしているっ」

踊り場から動こうとしない麻奈に気が付いて、ユエが吹き抜けの柵から飛び降りようと身を乗り出した。しかしその跳躍を邪魔するように、再びジュリアンの手がユエの肩を掴んでそれを止めた。いつの間に現れていたのか、ジュリアンがユエの背後に立っていた。

「今度は何だ！」

「しっ、見て下さい。鏡の様子がおかしいです」

ジュリアンの指差した先では大鏡が点滅を繰り返していた。
その光を受けながら、麻奈は目の前に迫るアノ人を静かに見つめていた。ゆっくりと近づいてくる醜悪な肉の塊。その姿に少し嫌悪感が沸いたが、麻奈は逃げるのを止めてぶよぶよとした塊に手を差し伸べた。

心は静かだった。さっきまではあんなに怖がっていたのに、どうしてそんな気になったのか自分でも不思議なくらいだ。鏡に写った青年の姿が脳裏に焼きついて離れないからかもしれない。
麻奈の見間違いでなければ、青年は固く閉じた瞳から大粒の涙を流しながら階段を下りていた。それは幼い子供が親を求める様子に似ていて、麻奈の胸はぎゅっと締め付けられた。
麻奈は今初めて、アノ人を『人』としてみる事が出来た。
麻奈が逃げない事を知ると、アノ人は麻奈に覆い被さる様にその身を預けてきた。手を広げてそれを受け止めるが、アノ人の重さに麻奈の体がぐらりと後ろに傾いた。

「馬鹿が。潰されるぞっ」

ユエが叫ぶのと、ジュリアンが手摺を乗り越えて宙に身を躍らせるのはほぼ同時だった。麻奈とアノ人は大鏡に向かってゆっくりと後ろに倒れ込んでいく。
麻奈が頭から鏡に激突するその瞬間、大鏡は一際眩い光を放ち、その体内に二人をとぷりと飲み込んだ。鏡面を波立たせながら二人を吸い込んだ鏡は、すぐにまた元の冷たく景色を反射するだけの鏡に戻ってしまった。

「馬鹿なっ」

ジュリアンが軽い音を立てて階段に着地した時には、二人の姿は踊り場のどこにもなかった。ジュリアンは直ぐに鏡に走り寄り、その表面に触れてみた。しかし、その手は固い表面を撫でるばかりで中に入る事は出来ない。

「どうなってるんだ。あいつらは外へ出たのか」

ユエも階段を下りて来て、鏡に手を伸ばす。

「いいえ、そういう訳ではないようです」

ジュリアンが鏡のある一点を指差した。

「あそこに麻奈とアノ人が倒れているのが見えます」

そこには気を失って倒れている麻奈と、麻奈に折り重なる様にうつ伏せに倒れている青年が写っていた。

「嘘だろ――。あの姿、元に戻っていやがる」

そう呟くユエの唇が、僅かに震えている事をジュリアンは視界の端で捉えた。しかし、今はそんな事はどうでもいい。ジュリアンはそれを無視して、ジュリアンは鏡の中に倒れている二人に意識を戻した。二人共ぴくりとも動かない。こんな事態はジュリアンの想定外だった。

「麻奈、聞こえますか？　返事をして下さい」

ジュリアンは苛立ち紛れに鏡を叩いた。しかし、冷たい鏡面は何

の変化もない。その硬い鏡の感触は、まるで彼を拒んでいるようだ。ジュリアンは見ていることしか出来ずに鏡を叩き続ける。

麻奈は目を薄く開けた。呻きに似た声をあげながら、上半身をゆっくりと起こす。

頭が痛い。麻奈は後頭部を抑えながら、きょろきょろと忙しなく視線を動かした。見覚えのない場所にいるのを確認して、麻奈は慌てた。此処は一体どこなのだろう。

辺りは薄暗くて、目ぼしい物は何も見当たらない。

床に手が触れた。それは、学校特有の冷たいタイルの感触ではなく、ふわふわとしたあまり手ごたえのない物で、麻奈は余計に首を捻った。こんな感じの場所をいつか歩いた事があるような気がしたが、あれは一体どこだったろう。

辺りは薄暗いが、真っ暗ではないのは幸いだった。

少し離れたところに、緑色の光と青く輝く光の玉がぼんやりと浮かんで見える。その僅かな光が麻奈の辺りにまで仄かに届いているのだ。

その時、麻奈は自分の太ももに頭を乗せて、圧し掛かるように倒れている青年を見つけて驚いた。

この人は誰だろう。一体いつからこの体制だったのかと考えたが、自分の太ももに触れる青年の髪の感触がくすぐったくて、その頭を

そっと持ち上げて床に下ろした。
どこかで見たことがあるような気がするが、何か大事な事が頭から抜け落ちてしまったかのように思い出せない。

此処がどこなのかはよく分らないが、何れにせよ、おかしなところには違いないようだ。麻奈はふぅ、とため息を吐いていた。

鏡の外では、ジュリアンが鏡を叩きながら麻奈へ声をかけ続けていた。しかし、その声は虚しく鏡の表面を滑るだけで、それが中へと届くことはない。

「くそっ」

珍しく苛々したジュリアンの声と共に、彼の拳が一際大きい音が立てる。

「荒れるな。見苦しい」

ユエが鏡から視線を逸らさずに、冷ややかな声で嗜めた。

「見ているしかないってことだ。俺も、お前も」

ジュリアンは悔しそうに唇を歪めて、鏡を食い入るように見つめた。それしか出来ないことが、彼にはやけにもどかしく感じられた。

二人の男に凝視されているとも知らずに、麻奈は何度目かのため息を吐いた。

こんなにため息ばかり吐いていては、幸せが根こそぎなくなってしまいそうな気がする。この先不幸続きの人生など、考えただけでも憂鬱になってきた。最も、こんな奇妙な場所に連れてこられた事自体、十分に不幸なことだと思い至って、またため息を吐いてしまった。

麻奈は痛む後頭部を摩りながら、とりあえず何が起きたのかを整理することにした。

確か、階段を下りたところでアノ人に追いつかれた事までは覚えている。問題はその後だ。

「えっと、アノ人と一緒に鏡に倒れこんで。それから――」

麻奈はようやく、ぼんやりとだが事態が飲み込めてきた。

此処は恐らく鏡の中なのだ。アノ人の体重に負けて、二人でもつれるようにして鏡に倒れこんでしまった事を思い出す。この後頭部は、恐らくその時にぶつけたのだろう。

そう考えて、麻奈はほっと胸を撫で下ろした。鏡が二人を飲み込んでくれなかったら、麻奈はアノ人に押しつぶされて、割れた鏡で今頃血だらけになっているはずだ。

鏡の中なのだと認めてしまうと、以前通ったものと何となく雰囲気が同じような気がしてくる。あの時よりは足場の不安定さは無いものの、暗闇の中にぽつりと浮かぶ星のような光は確かに鏡の中にそっくりだった。ただ、あの時は無数に輝く光があったのに対し、今はそれが二つだけになっているのはどういうわけだろう。

光が弱いために、闇の色が濃くなったよう気がして、麻奈は急に

不安になった。

鏡へ（アノ人の場合）　3（後書き）

いつも読んでいただきましてありがとうございます。
やっと本来のアノ人の姿が出てきました。次回、彼の名前が出てきます。
それでは、また次回お会いしましょう。山石でした。

鏡へ（アノ人の場合）　4

遠くに見える光を呆然と見ながら、麻奈はしばらくその場に立ち尽くしていた。一体どうしたら、廃校に戻る事が出来るのだろうか。そう考えて、麻奈は少し奇妙な気分になった。さっきまでは、その廃校から出ることばかりを考えていたというのに。

此処にジュリアンがいてくれたら、と思わずにはいられない。アノ人と二人きりでこんな所に閉じ込められているのは心細くて不安になる。それに、アノ人がまた襲ってこないとも限らないのだ。

今のうちに一人で出口を探すべきか迷ったが、この青年を一人で置いていくのも嫌だった。

その時、床に倒れているアノ人が僅かに身じろぎをした気がして、麻奈は一瞬ぎくりと身を引いた。しかし、苦しそうな声が聞こえてきて、麻奈は彼を刺激しないようにそっと側にしゃがみ込んだ。

床に散らばる灰緑色の髪を避けながら、彼の側に膝を付いて青年の顔を覗き込んだ。顔の半分を覆っている癖のある髪をそっと退けてみると、褐色の神経質そうな細い顔見えた。長い睫と、とがった顎。少し垂れた目元には小さな泣きぼくろが二つ並んでいる。

目鼻立ちは整っているので美青年と言えなくもないのだが、こけた頬と目の下に張り付く隈が、彼を異様なまでに不健康に見せている。クリーム色の布を肩から巻きつけたような服を着ていて、額には宝石をあしらった装飾品を付けている。その服装と褐色の肌を見ると、アノ人は暑い国の出身なのかもしれない。

今の彼はどう見ても、ただの優男にしか見えない。本当に彼が恐ろしかったアノ人なのかと疑いたくなるほどだった。しかし、その目元に薄っすらと残る涙の跡を見つけて、やはり鏡で見た彼の姿は

見間違いではないのだと麻奈は確信した。
彼は安らかとは言いがたいが、規則正しい呼吸を繰り返している。気を失っているだけのようで、麻奈は少しほっとした。彼は一体、何処の誰なのだろうか。

「う……」

突然、くぐもった声が足元から上がり、アノ人が緩慢な動きで起き上がった。麻奈は慌てて、彼の額に当てていた手を素早く引いた。その時、麻奈はあの人の覚醒に気を取られていて、遥か遠くで揺れている緑色の光がじわりと近づいて来た事に気が付かなかった。

あの人は朦朧としながら額に手を置いて、瞬きを何度も繰り返していた。目の焦点が合っていないのか、アノ人は麻奈が側にいることにも気付かずに、だるそうに首を振っている。

「大丈夫ですか」

何度目かの瞬きの後、麻奈は少しだけ距離を置いてアノ人に声をかけた。
突然かけられた声に、アノ人は怯えてびくっと体を引いたが、麻奈と視線が合うや否や、逆に身を乗り出してきた。

「見える。見えるぞ！」

「あ、あの。大丈夫ですか」

彼があまりに顔を近づけて来たので、今度は麻奈が怯えて身を引いた。その手をアノ人が素早く掴み、渾身の力を込めるように強く握りしめた。

「あぁ！　耳も聞こえる。ついに我が身の呪いが解けた」

アノ人は興奮しているのか、麻奈を掴む手に更に力を入れる。両手がきりきりと握り潰される痛みに、麻奈はたまらず悲鳴を上げた。慌てて男の手を振り払おうとしたが、アノ人は麻奈の手を離そうとはせずに、逆にぐいと引き寄せて麻奈の瞳を覗き込むように顔を近づけた。

鼻と鼻が触れそうなほどの距離で、少し垂れ目のターコイズブルーの瞳が瞬いている。彼の恐ろしく長い睫が伏せられるのを見て、麻奈は焦って顔を引いた。こんな体勢で目を閉じるなんて、思い当たる事は一つしかない。

アノ人は目を閉じたまま、麻奈の後を追うように更に顔を近づけてくる。これ以上顔が近付くのは非常にまずい。

麻奈は咄嗟に顔を背けた。しかし、アノ人は麻奈の唇を通り過ぎると、その肩にぽてっと頭を預けてきた。そのまま彼は大きく息を吸い込むと、満足そうにため息を吐いた。それは、麻奈の香りを確かめるような深呼吸だった。

彼の息が首筋にかかり、麻奈はくすぐったさに身を竦めたくなったが、今はじっとそれを我慢した。彼の出方が分らない以上、下手に刺激したくはない。

アノ人は目を開くと、麻奈を真っ直ぐに正面から見つめた。

痛いほど強く握られていた手がそっと解かれて、麻奈は慌てて手を引っ込める。一体何だったのかと非難を込めた目でアノ人を睨むと、彼の真摯な視線にぶつかった。

「この香り……やっと見付けた。余の体を優しく叩き、撫で擦ってくれたのはそなただったのか」

「え」

あの人は感極まったように麻奈をぎゅっと抱きしめると、その背中をとんとんと軽く叩いた。

「ありがとう。そなたのお陰で余がどれだけ救われたか――。目も見えず、耳も聞こえない世界を一人で漂うのは、言葉に出来ぬほど孤独であった。そんな中、そなたが労わりを込めて触れてくれたことが、どんなに余の心を慰めてくれたか！　あれからずっとそなたを探していた。どれほど礼を言っても言い足りぬ」

「まさか――目と耳が、不自由だったんですか」

「あぁ。しかし、今はようやくその呪いも解けた。そなたの顔も声も良く分るぞ」

麻奈の背中に回された手に、ぐっと力が込められた。

「そなたの香りだけを頼りに、ずっと探していたのだ。余はどうしても、もう一度そなたに会いたかった」

熱を含んだようなその言葉を、麻奈はどこか呆然と聞いていた。やはりこの青年がアノ人だったのだと確信する。それと同時に、麻奈は気まずい思いを味わっていた。

あの時、麻奈がアノ人を撫でたりしたのは決して優しさからではない。彼に捕まり、そのまま食べられてしまうような気がしたので、必死に気を逸らしたいが為の行動だったのだ。そんな自分本位の行動を、こんなに喜んでくれていたと知って、麻奈は心の中で彼に謝った。

「お礼なんて――」

麻奈はそんなことを言われるようなことをした覚えはないのだ。

麻奈は抱きしめられたまま項垂れた。この不幸な青年の身の上など、考えたこともなかった自分がとても恥ずかしい。せめて、今は彼の好きなように、安心できるように支えてあげよう。そう考えて、麻奈も彼の背中にそっと手を回した。彼が落ち着くまで、抱きしめてあげよう。それが、今の麻奈に出来る贖罪だった。

しかし、待てど暮らせど、あの人の抱擁から解放される気配が無い。

「あの、そろそろいいでしょうか」

「人恋しいのだ。もうしばらく良いだろう。――そうだ、まだ名前を聞いていなかったな」

「水上麻奈です」

「ミナカミ？　聞きなれぬ名前だな。余はムスリム国４代目国王、ビシャード・アル・ムスリムだ」

「え、王様ですか」

麻奈は驚きのあまり、両手を突っ張ってビシャードから離れた。

ビシャードは不満げな顔で腕を伸ばすと、麻奈を再び抱えなおした。

「そうだ」

麻奈は驚きの余り固まってしまった。さっきから何か一人称がおかしいと思っていたが、まさか王様だったとは――。

あまりに驚きすぎて、ビシャードの為すがままになっている事に麻奈は気が付いていない。これ幸いと、ビシャードは麻奈の首筋に顔を埋めて深く息を吸う。

「ミナカミは良い香りがするな。他の奴等とは違う。余を打ち据え、水をかけた奴等とは」

正に同じ事を、自分もしようとしたとは言えず、麻奈の気持ちは罪悪感で更に重たくなった。

「ところで、此処は何処だ。余は、突然現れた奇妙な姿の男と共に鏡の中に入ったはずだが、此処がそうなのか」

「此処は、多分違うと思います」

ビシャードの手を何とか振り払い、麻奈は立ち上がる。

「さっきまでは違う所に居たんです。でも気が付いたら此処に二人で倒れていて。私も上手く説明できないんですけど――」

そう言って首を傾げたその時、麻奈は自分の影がいつの間にか足元に長く伸びている事に気が付いた。さっきまでほとんど真っ暗で、影など全くなかったはずだ。それなのに、今は薄ぼんやりとした緑色の光に包まれている。

「あれは何だ。こっちへ近づいてくるぞ」

ビシャードの指差す先には、ぎらぎらした緑色の光を撒き散らす

巨大な光があった。それはゆらゆらと揺れながら、二人に向かって近付いて来る。

「何、これ……」

それは熱も無く、音も立てずに二人の回りをゆっくりと浮遊している。光の球は、まるで意思でもあるかのように、じりじりとにじり寄ってくる。麻奈が息を飲んで後ずさると、心なしか光の球のスピードが速まった気がした。

「走るぞ」

ビシャードが麻奈に耳打ちすると、すぐさま走り出した。麻奈も続いて走り出す。後ろを振り向かなくても、音も無く近寄っていたそれが自分達を追って加速したのが分かった。

「早いっ」

麻奈のすぐ前に伸びる影が次第に色濃く短くなってくる。気が付くと、それは手を伸ばせば触れられる距離まで近づいていた。

「駄目、追いつかれるっ」

「くっ。一体何なのだ此処は」

麻奈は走りながら、巨大な発光体がビシャードの背に引き寄せられるように近づくのを見ていた。そして、彼の背に光の球がすっと触れた次の瞬間、一層眩い光が溢れて目の前が突然真っ白になった。

鏡へ（アノ人の場合）　４（後書き）

読んで下さってありがとうございます。
アノ人についての反響を頂いて、驚くと同時にとても嬉しかったです！ありがとうございました。
彼はこんな感じですが、どうでしょう?ご期待に添えたでしょうか?
それでは、また次回お会いしたいと思います。山石でした。

ビシャードのトラウマ　1

その光のあまりの眩しさに、閉じた目の奥ですら白く光って見える。麻奈は今、自分が目を開けているのか閉じているのかさえも分からなくなってしまった。

ようやく光が弱まってきたのを感じて、恐る恐る目を開けてみた。目も開けられないような眩しさは収まったが、その代わりに黄色い太陽の光を感じて麻奈は再び目を細めた。

外に居ることに戸惑いを感じながらも、麻奈はどこかでこの奇妙な出来事を受け流していた。此処では奇妙な事が起こるのが普通なのだ。いちいち騒ぎ立てるのは疲れるだけだと、今は身を持って学習したのだ。そう思って、麻奈は複雑な心地になった。隣のビシャードを見てみると、彼は眩しそうに目を細めながら、絶句していた。それが正しい反応だ。

目の前には、大きな葉の生い茂る木々が二列規則正しく並べられている。その中央には白い石を切り出して作られた、馬鹿みたいに広い道が続いている。道の両脇には柔らかな芝生が広がっていて、花壇には原色の花が咲き誇っている。そこは恐ろしく広い庭園だった。

城壁でぐるりと囲われているその美しい庭に、麻奈とビシャードはまるで降って湧いたかのように突然現れてしまったのだった。

白く輝く道の先には、巨大な銀色の宮殿が建っている。横に広がる低い造りになっていて、屋根の形が丸みを帯びている。

太陽の光を跳ね返して輝くそれは、まさにおとぎ話に出てくるような白亜の城だ。どこかエキゾチックな風貌だったが、幻の様に美しい宮殿を目にして、麻奈は白昼夢を見ているような錯覚を起こし

ていた。
もしかして夢なのかもしれない。しかし、強い日差しがじりじりと肌を焼く感覚や、むっとする草いきれ。湿度の高い粘つく空気。その全てが妙にリアルに感じられる。
感嘆のため息を吐いてうっとりと宮殿を眺める麻奈を尻目に、ビシャードは暗い瞳で宮殿を一瞥する。

「一体、此処はどこなんでしょう――」

どうしてこんな事になったのか、無駄だと思っても考えずにはいられない。半ば投げやりな麻奈の呟きに、ビシャードが静かに答えをくれた。

「此処は――余の宮殿だ」

「え」

隣にいるシャードを仰ぎ見ると、彼は固い表情で宮殿を見つめていた。その表情は暗く、何かを必死に耐えているように唇を震わせている。

「そうなんですか？　じゃあ、陛下は帰って来れたんですね」

喜んでいる様子も見せず、ただ立ち尽くすビシャードを不思議に思いながらも、麻奈は弾んだ声をあげた。しかし、ビシャードはいつまでもこの場から動こうとしない。

「あの、帰らないんですか？」

ビシャードはちらりと麻奈を見ると、神経質そうな眉を動かして

頷いた。帰らない、彼はそう言っているのだ。

「どうしてですか！　折角戻って来れたのに」

麻奈は声を荒げた。こんなチャンスはもうないかもしれないのだ。麻奈やジュリアンが必死に探しても、出口を未だに見つけることが出来ないのに、せっかくの脱出の機会を彼は不意にしようとしている。麻奈にはそれが我慢できなかった。

「陛下は知らないかもしれないですけど、さっきまで私達はある所に閉じ込められていたんです。今帰らなかったら、もう二度と帰れないかもしれないんですよ！」

ビシャードはそれには答えずに、冷えた視線を道の先に注ぐと、踵を返して歩き出した。麻奈は少し迷ったが、結局付いていく事にした。

足早に歩くビシャードを追いかける。少し歩いただけでキャミソールがみるみる湿ってゆくのが分かった。気温だけではなく、湿度も高いせいで妙に肌がべたつく。噴き出る汗も気持ち悪かった。

強すぎる日差しが麻奈の肌を焼いているのが分る。その刺激は痛いくらいに強くて、暑さのせいで麻奈の顔はたちまち真っ赤になってしまった。最早、吸い込む空気まで熱く感じて、かなり息苦しい。

「熱い所なんですね。陛下の国は」

「あぁ」

浮かない顔をしながら歩くビシャードを、麻奈は不思議に思った。彼の国に帰ってきたのに、嬉しそうな様子は微塵もない。むしろ鬱々とした様子の彼は、酷く焦りながら宮殿から遠ざかろうとしてい

る。

宮殿を背にして、黄色い日差しを反射する真っ白な道を進むと、静かな水面を湛えた池が見えてきた。水連に似た白い花が浮ぶ大きな池を見ていると、少し涼しくなったように感じられる。

ビシャードは、それさえも目に入らないというように白い道を逸れて、短く刈られた芝生の絨毯を横切り始めた。綺麗に手入れされている植え込みに足を踏み入れ、がさがさと掻き分け進む。

「ど、どこに行くんですか」

綺麗にカットされている植え込みを荒らしているようで、麻奈はつい咎めるような口調になっていた。

「此処から出るんだ。こっちに抜け道がある」

「でも、帰らないと心配している人達がいるんじゃないですか」

「心配など……。しっ！　誰か来る」

ビシャードは麻奈に向かって手招きをすると、素早く植え込みの影に身を潜めた。それに習って麻奈も彼の隣に隠れたが、何故ビシャードがこそこそするのかが分らずに首を捻る。

彼はこの宮殿の王なのだ。城の主が人目を避けるのは、どう考えても変だった。恐らく、それは彼が帰りたがらない理由が関係しているのだろう。

そのとき、道の向こうから蹄の音が聞こえてきた。二人は息を潜めて様子を窺う。

植え込みの隙間から覗いてみると、ゆったりと馬を歩かせる親子を先頭に、馬に乗る一団がやって来るのが見えた。

鹿毛の大きな馬に毅然と乗る父親の後ろを、まだ頼りない手綱捌きで栗毛色の馬を操る少年がついて行く。遠目にも、親子は少し下がり気味の目元や、うねるような癖の強い髪がとてもよく似ていた。

少年はまだほんの子供で、あどけない顔に真剣な表情を浮かべて、馬を操る手に力を込めている。

「父上、待ってください」

少年の馬は落ち着かない様子で頭を忙しなく廻らせては、ふらふらと道草をしながら進んでいる。

「まだ体が固い、力を抜きなさい。お前の緊張が馬に伝わってしまうぞ」

父親は息子を振り返って鋭く指摘した。しかし、目じりには皺が寄っていて、その表情は穏やかで自愛に満ちている。

「はい。父上」

少年は深く息を吸うと、肩の力を抜いて姿勢を正した。

「そうだ、初めてにしては上出来だ。もっと上手くなったら、今度は狩りに連れて行ってやろう」

「本当ですか！　きっとですよ」

ふっくらとした頬を上気させて、少年は嬉しそうに顔を綻ばす。

「ああ。余も時間を作って、またお前の練習を見てやろう」

「ありがとうございます！　一生懸命頑張ります」

父親は満足そうに口ひげを撫でながら少年を見ていた。

「お前はいずれ、この国を継がねばならぬ身だ。何事にも力を入れ、良く学びなさい」

「はい。父上！」

父親は一層笑みを強くすると、少年の馬が自分の横まで来るのを待っていた。そして、二人並んで麻奈達の前を通り過ぎて行った。その後ろを、少し離れて数人の兵士達が頬を緩めながら通り過ぎて行く。みんな一様に、あの親子の様子を見るのが嬉しくて堪らないというような表情をしていた。

彼らの様子を草の陰で見ていた麻奈は、仲の良い親子の様子を微笑ましく思っていた。馬を一生懸命制御しようとする、少年の真剣な顔が可愛らしかった。それを見る父親の顔も緩んでいたのがまた一層微笑ましい。

しかし気になるのは、あの親子の姿だ。灰緑色のうねるような癖毛、それに目じりの下がり具合。それは、隣に座り込んでいるビシャードに良く似ているような気がする。おまけに、あの父親は「国を継がなければならない身」だと少年に言っていた。それはつまり、あの父親が今の王様ということになる。

この国の王はビシャードのはずだ。どちらかが嘘を吐いているということだろうか。

麻奈はビシャードに声をかけようとして、目を丸くしてしまった。ビシャードは顔を苦しそうに歪めながら、親子が去っていった先を見てギリギリと爪を噛んでいた。その指先から、じわりと赤いものが滲んで見える。

「陛下、血が……」

暗い瞳で爪を噛むビシャードの指先からは、たらたらと血が滴っている。かなり深くまで噛んでいるのだろう。しかし、それでも彼は爪を噛むのを止めなかった。もしかしたら、痛みを感じていないのかもしれない。それほど、彼は暗い瞳をしながら親子の後ろ姿を追っていた。

「駄目ですよ」

麻奈は思わずビシャードの手を口元から引き剥がした。その指先を見ると、半分以上も爪が噛み切られていて、爪が剥がされた所から、ピンク色の肉が見えていた。

「あぁ、痛そう」

麻奈は何か血を拭うものが無いかとポケットを探った。その間にも、ビシャードの指からは血が流れ出し、白い石畳に赤い小さな斑点を作った。

どうしてこんなに、と言いかけて麻奈は顔を上げたが、ビシャードの顔を見て言葉に詰まってしまった。

顔をくしゃりと歪めて、ビシャードの視線は未だ親子の背中を追っている。その口元は、小刻みに震えていて、彼が今にも泣き出してしまうのではないかと麻奈は不安になった。

「……とりあえず、止血をしましょう」

麻奈はパンツに入っていたポケットティッシュをビシャードの指に押し当て、上から握り込んで強く圧迫した。

そこまでされて、ビシャードはようやく麻奈の存在を思い出したらしい。何とも居心地悪そうに手当てされる自分の手元を眺めた。

「――もう、いい」

「じっとしていて下さい。もう少し圧迫していないと血が止まりませんよ」

「いい」

「でも――」

「余のことなど放って置けばいい！」

ビシャードは先程までの泣き出しそうな顔を引っ込めて、厳しい顔で麻奈の手を振り払った。

麻奈は気を悪くして、抗議の目を向けた。ビシャードは手を庇いながらぷいと横を向いてしまった。　そんな彼の行動は、まるで子供のようだ。さっきまでは人恋しいと言って麻奈を離さなかったのに、どんな心境の変化なのか、今度は途端に邪険にする。麻奈は仕方なく、彼の手当てを諦めた。

この気性の浮き沈みは、もしかしなくてもさっきの親子が関係しているのだろう。しかし、今は麻奈もそれを聞く気にはなれなかった。これ以上ビシャードの機嫌が悪くなっては困るのだ。

「これから、どうするんですか？　何処か行く当てでもあるんです

か」

「当ては無い。無いが、此処から直ぐにでも離れたい」

ビシャードは植え込みから立ち上がると、足早に歩き始めた。何かに急きたてられるように歩く姿に麻奈は奇妙な思いを抱いたが、置いて行かれるのはまずいと彼を追いかけた。

「待ってください、陛下。どうしてそんなに此処から出たいんですか？　陛下の宮殿なんでしょう？」

ビシャードは振り向かない。

麻奈がため息を吐きながらビシャードを追い駆けていると、目の前の景色が奇妙に歪んで見えたような気がした。気のせいかと思って目を擦ってみても、それは依然変わらない。むしろ、薄い紗膜がかかったように目の前の景色が霞みがかってきて、どんどん現実味が薄れていくように見える。

麻奈は目を見開いて回りを見回す。自分を中心にして、辺りの景色がどんどん希薄になっていく。麻奈は焦った。また奇妙な事が起きるのだろうか。

ビシャードのトラウマ　1（後書き）

いつも読んでくださってありがとうございます！
爪を噛む原因は、精神的に不安定なストレスから来ることが多いようです。色々癖のあるビシャードですが、こんな悪癖も持ち合わせていたとは……。
それでは、また次回。山石でした。

ビシャードのトラウマ　2

辺りの景色が、まるで砂が崩れ落ちるようにサラサラと音を立てて流れてゆく。その光景はとても幻想的だ。現実とは思えないほどに――。

麻奈はもう何が何だか分らずに、ただ目を丸くしてこの奇妙な光景を見守っていた。よく見ると崩れ落ちる景色の後ろから、新しい風景が顔を出している。それは、世界の薄皮が一枚剥がれ落ち、そこから全く違う世界が覗いているように見えた。

麻奈の少し前を歩いていたビシャードも、足を止めて警戒するように辺りを見ていた。

綺麗に手入れされた庭園は、瞬く間にその姿を変えてしまい、気が付くと二人は丸い形の大きな広場に立っていた。

何百人、もしかしたら何千人という人々が広場いっぱいに集まり、静かにそこに座っている。大勢の人々がすし詰め状態になっているせいか、かなり広い空間にも拘らず、この場所には広々とした印象がまるで感じられない。おまけに、全員微動だにせずに膝を付いて前を向いている。その姿はとても不気味なもののように麻奈には見えた。

辺りは水を打った様に静かだった。これだけ沢山の人々が集まっているのに、この場所を支配しているのはある種の静寂だけだ。

麻奈は慌ててその場にしゃがみ込む。皆が正座している所で、ぽつりと立ったままでいるのは非常に目立っているような気がしたのだ。幸い誰にも咎められる事も無く、人々は前を見たまま動かない。

麻奈はビシャードを見た。彼は人々と同じように前を向いたままその場に立ち尽くしている。その背中は途方も無く目立ち、同じぐらい孤独に見えた。

声を掛けようとしたが、この静かな静寂を破る勇気は麻奈には無い。
その代わりに、麻奈はそろそろと顔を上げて辺りを観察してみた。この場にいる人々は、同じように白い服を着て悲しそうな顔をしている。その姿は、まるで祈りを捧げているかのようだ。
この特殊な空気は、何かに似ている気がした。それはもしかして――

「お葬式」

作法は違えど、その独特の雰囲気は少なからず覚えのあるものだった。
麻奈は子供の頃に参列した祖父の式を思い出した。とても悲しくて、静けさの中に皆のすすり泣く声が良く響いたように記憶している。そういえば、つい何年か前にも葬式に参列したような気がする。あれはいつの事だったか――。

「これは、死者を送る儀式だ」

麻奈のぽつりと漏らした呟きに、ビシャードがぼそぼそと呟いた。やっぱりと思いながら、首を捻る。ただの葬式にしては、どうも参列者が多すぎる。

「誰のですか」

抑えた声で聞く。それでも、この静かな空間では麻奈の声は響いてしまった。
彼はそれには答えずに、眉間に深い皺を寄せながら皆と同じ場所へと視線を送る。
そこには白い花で飾られた御輿のような物があり、それが静かに

進み始めた。広場の人々が、一斉に立ち上がった。誰もがそれに親愛と悲しみの視線を送り、嗚咽を押し殺している。

あれが恐らく棺なのだろう。

棺の隣には、さっき馬に乗っていた親子が並んで歩いているのが見えた。馬上で幸せそうに笑っていた親子は見る影も無く、特に父親の憔悴しきった顔には目も当てられない有様だ。彼らの後ろを追いかけるように、二人の幼い男の子たちが歩いていた。二人とも癖のある髪をしているので、一目で少年の兄弟だと分かる。

棺が人々を掻き分けて進み、麻奈のすぐ傍を通り過ぎる。その時、目元を赤く腫らしたさっきの少年の小さな呟きが聞こえた。

「母上……」

麻奈は胸が痛くなった。亡くなったのは少年の母親なのだ。

彼の後を、まだ年端も行かない幼い子供達がちょこちょこと歩く。彼らは何が起こったのか分からないのだろう。不思議そうな顔をしながら父親と兄に置いていかれないように一生懸命付いて行く。

こんなに小さな子供達を残して逝くなんて、母親もさぞかし心残りだっただろう。

なんて悲しい光景だろうと麻奈は思った。鼻の奥がつんと痛んで、麻奈は急いで鼻を啜った。

その時、麻奈は涙で滲む視界の端で、再び辺りの景色が流れ落ちていくのを捉えた。たちまち景色が移り変わってゆく。

このおかしな現象は一体何なのだろうか――。麻奈は目じりの涙を拭ってから、この奇妙な光景を見極めようと目を凝らした。

気がつくと、二人は静かな部屋の中にいた。

石造りの薄暗い部屋で、机の上には小さなランプが置かれている。

ランプの中には、油を染み込ませた芯が立ててあり、それが橙色の炎を上げて静かに燃えていた。
風通しも悪く蒸し暑い所だ。

「何、これ」

麻奈が見ている先には、内側から木を打ちつけて開かなくしてある窓があった。
唯一窓として機能しているのは、一段高い所にある明り取りの小さな窓だけで、その他の窓は全て木の板が打ち付けてある。この部屋を見て、ビシャードが静かに息を呑んだ。麻奈はそれには気づかずに、部屋の中を歩き回っていた。

「なんだか、殺風景だけど誰かの部屋みたいですね」

麻奈は寝台の上に積み重ねてある衣服を手に取った。肩から巻き付けるだけのこの国の服は、男物なのか女物なのか全く判断出来ない。
そのとき、突然扉が勢い良く開いて、中学生ぐらいの少年がふらつく足取りで部屋に入って来た。俯いたその顔は影になっていて麻奈からはよく見えなかったが、うねるような灰緑色の髪をしたその少年を、どこかで見たことがあるような気がした。

「あ、えっと――勝手に入ってすみません」

麻奈がしどろもどろで頭を下げた。しかし、少年は二人には目もくれずに部屋を横切ると、明り取りの小さな窓を閉めた。部屋はさらに暗くなり、対流しなくなった生暖かい空気が急に澱んでくるような気がした。

「あの、何で無視？」

麻奈は不思議そうな顔で少年の目の前にひらひらと手をかざした。

「我々が見えていないのかもしれない」

ビシャードは少年を瞬きもせずに見つめている。その声は何故か緊張しているように感じられた。

少年は懐に手を突っ込むと、蝋燭と鞘に納まったナイフ取り出した。机の上のランプの炎で蝋燭に明かりを灯すと、ドサリと床に足を投げ出して座った。

寝台にもたれかかって苦しげに長い息を吐き出すと、蝋を床に垂らして蝋燭をそこに固定した。さっき取り出した小ぶりのナイフを鞘から出して、蝋燭の隣に添える。

ゆらゆらと揺れる頼りない明かりに照らし出された少年の頬に、汗が一粒光っている。

彼は恐る恐る左腕を持ち上げて肩口から袖部分を掴むと、それを一気に引き裂いた。

「あ」

麻奈が驚きの声を上げる。

ゆったりとした服の影に隠れて見えなかった少年の腕には、柄の短い矢が刺さっていた。毒でも塗ってあったのか、傷の周りが紫色に変色している。

「酷い」

麻奈は無意識に口元に手を当てて呟いた。

少年は破り取った服の袖を細く食いちぎり、矢傷よりも少し上の

部分を片手と口を使って器用に縛った。残りの布は丸めて口の中に押し込み、矢羽を掴んで一度鼻から大きく息を吐き出した。彼はしばらく目を閉じていたが、決心したように息を吸い込むと、矢羽を掴んで引っ張った。

「ぐぅっ！」

苦しげな声が少年の口から漏れた。

麻奈は堪らず、ギュッと目を瞑った。とても見ていられない。

少年は目に涙を浮かべながら矢を引き抜いてゆく。少年の力では、矢尻を一気に引き抜くことは出来ないようで、矢尻がゆっくりと姿を現してくる。その間も、少年の呻き声は途切れることなく続いている。麻奈は耳も塞ぎたくなった。

少しの間を置いて、床に何かが落ちる硬い音を聞いて、麻奈はそろそろと目を開いた。

少年は自分の傷口に口を付けて、何度も何度もその血を吐き出していた。やはり毒が塗ってあったらしい。

まだ幼さを残した顔に苦痛の色をにじませている様子は、とても苦しそうだ。麻奈はまた目を閉じて、横に居るビシャードに縋り付いた。

少年は口元を一度拭うと、今度はナイフを蝋燭の火にかざした。ジジジ……というナイフが熱せられる音だけが聞こえる。

刺さった矢は、矢尻が小さかったおかげで傷自体は深くないようだ。しかし、少年の腕からはとめどなく血が流れてくる。

少年は肩を大きく上下させながら荒い息を繰り返した。今度は、震える手で熱したナイフを傷口に宛がい、肉を焼いて止血をした。幾分荒い方法だが、少年の行動に迷いは無かった。

少年は声にならない悲鳴を上げる。

その間、麻奈はひたすら目をきつく瞑っていた。耳に届いてくるのは、少年の荒い息遣いと時折漏れるすすり泣き、そして肉の焼ける臭いが鼻の奥を刺激していた。麻奈にはそれが恐ろしくて、ビシャードの服に必死に顔を埋めていた。

ビシャードのトラウマ　2（後書き）

いつも読んでいただきましてありがとうございます。
毒を口で吸い出すという行為は、いろいろな説がありますが感染を誘発する可能性があるそうです。
患部を縛り、すぐに病院に行くのが一番良いようです。
それでは、また。山石でした。

ビシャードのトラウマ　3

それからどの位経っただろうか。だんだん少年の呻き声が小さくなり、やがてそれも聞こえなくなった頃、麻奈はそっと目を開けた。少年はぐったりした様子で床に横たわっていた。

麻奈は痛ましい気持ちで少年を見つめる。まだあどけない少年の顔には明らかに憔悴の色が浮かんでいる。こんなに苦しい処置をこんな所で一人でするなんて、保護者は一体何をしているのか。

麻奈の胸には怒りに似た感情が湧いてきた。

矢が刺さったということは、それを射た人間がいるということだ。この少年は誰かに狙われたという事になるのだろうか――。

そう考えるだけで、麻奈の怒りはまた頂点に達しそうになる。しかし、横にいるビシャードが相変わらず瞬き一つせずに少年を見ているのが気にかかった。

その眼差しは厳しく、辛い表情を浮かべている。何故そんなにも険しい顔をしているのだろう。麻奈はビシャードにそれを聞く事も出来ずに、ただこの二人を交互に見ていた。

少年はいつの間にか眠っていた。まだ腕が痛むのか、時折眉間に皺を寄せるものの、大分穏やかな寝息を立てている。少年の長い前髪がはらりと落ちて、垂れた目元と目尻に二つ並んだほくろが現れた。少年の顔には少し幼さが残っているが、それはビシャードにそっくりだった。

「陛下、貴方はこの子を知ってるんじゃないですか」

麻奈の質問に、ビシャードはゆっくり二度瞬きをして、観念したようにため息を吐き出した。

「あぁ。よく知っている。これは――昔の余だ」

そういってビシャードが左の袖を捲くって見せると、そこには少年と同じ箇所に古いケロイド状の傷があった。

「ミナカミには言えずにいたが、今まで見た光景は全て余の幼い頃のものだ――」

「まさか。あ――でも、それならこの少年が陛下に似ているのも頷けます」

麻奈はようやく合点がいった。似ているはずだ、彼らは全員ビシャード本人だったのだから。

麻奈が妙に納得していると、辺りの景色がじんわりと滲み出した。またか、と思う間もなく、まるで演劇の場面転換のように、あっという間に場所が変わってしまっていた。今度は何を見せられるのだろうか。

次に顔を出したのは、乳白色の巨大な柱が立ち並ぶ、静かな廊下だった。

胴回りが一抱えほどもある、大きな柱の陰に身を寄せる三人の男たちが見える。その顔は麻奈たちからは見えないが、彼らはひそひそと額をつき合わせて、何事か話しこんでいた。

本人たちは内緒話をしているつもりだろうが、人通りのない廊下に男たちの声は朗々と響いていた。

彼らが何を話しているのか、全て筒抜けだ。

「ビシャード殿下がまたお倒れになったそうだ」

「まさか――また殿下を狙う者が」

「今度は毒矢だそうだ。幸いにも命に別状はないらしいが」

「幸いにも、か？」

「しっ、滅多なことを言うものではない」

「だが、ビシャード殿下は病弱過ぎる。月の半分を床で過ごすなどと諸国に知れたらどうなる事か。殿下が次の王になったら、隣国はこぞって攻めて来るかも知れない」

「――まさか」

「いや、あり得るぞ。やはりビシャード殿下は王の器ではないのだ」

「確かに、アナン殿下の方が王に相応しいと私は常々思っていたよ」

「誰もが思っていたさ。だからビシャード殿下の命が狙われているのだろう。彼がいては、アナン殿下に王位は決して回ってこないんだ」

「全く、どこの誰が暗殺を企てているのかは分からんが、やるのならばもっと確実に事を成して欲しいものだ」

「ははは、違いない」

男たちの軽快な笑い声を聞いて、麻奈は拳を握り締めた。ビシャードの命を何だと思っているのだ。

怒りのあまり、男たちに石でも投げてやろうと思ったその時、す

っとビシャードが麻奈の前を横切った。彼はそのまま、つかつかと先を歩いていく。

「こういう話はミナカミには聞かせたくなかったのだが――」

とても悲しい顔だった。

麻奈が首を横に振るのを見て、ビシャードは僅かに表情を緩めた。まだ腹の立つ話を響かせている男たちの側を、二人は無言で通り過ぎる。二人の足音がコツコツと鳴っているにもかかわらず、男たちは全くこちらに注意を払うことはない。やはり彼らにも麻奈とビシャードは見えていないようだった。

男たちとすれ違うその一瞬、ビシャードが刺すような冷たい視線を彼らに送ったことに麻奈は気が付いていた。

「余は体が弱かったのだ。見ての通り体つきも貧弱で、剣術も弟のアナンに大分劣っていた。それでも、第一王子にふさわしくなれるように、必死に努力はしたのだがな」

ビシャードは自分の薄い胸板に手を置いた。横から見ると、彼は気の毒になるほど薄く見える。ゆとりのある服を着ていてこうなのだから、実際はもっと痩せているのかもしれない。

「彼らは陛下の矢傷の話をしていましたね。それって、さっき見た事件の事ですか？　あれは暗殺されかけたっていう事なんですか？」

「そうだ」

「どうしてそんな酷い事――」

ビシャードは麻奈から視線を外すと、未だ柱の陰で団子になって

話し込んでいる男たちに目を向けた。

「奴らの話を聞いていただろう。ミナカミの国ではどうか知らぬが、この国では第一王子が必ず国を継ぐ。例外はない。歴代の王は絶対に男子を後継者として生ませなければならないのだ。皮肉なことだ……。血筋を優先したために、皆が王に相応しいと思っているアナンは、王位に付く事が出来ないのだ」

ビシャードは自嘲する。王様であるはずなのに、自分を卑下する彼は、見ていてとても痛々しい。

「余が即位すれば、次の第一王位継承者は余の子供に移る。貧弱な余の血を受け継ぐ子供にな。さて、ここで問題だ。余ではなく、アナンを王にするにはどうすればよいと思う？」

少し考えてから、はっとした。ビシャードはその通りとばかりに頷く。

「そう、とても簡単なことだ。お荷物の第一王子を殺してしまえば、皆が期待を寄せる第二王子に日が当たる」

「そんな」

「だが、余は大人しく殺されてやるつもりは毛頭なかったよ。この時、余は誓ったのだ。どんな事をしてでも王座に就き、余を排除しようとした者には然るべき報復をしようと――たとえ、それが誰であっても」

そう呟いてビシャードが足を止めた。男たちから少し離れた柱の陰に、膝を抱えてうずくまる少年がいた。癖の強い灰緑色の髪、垂

れた目元。それは、さきほどの若きビシャードだった。その頬はげっそりと痩せこけ、目の下には既に隈が出来ている。しかし、怒りに瞳を輝かせて静かに涙を流している姿は、鬼気迫るものを感じさせた。

頬を流れる涙は、触れれば肌を焼く憎悪の涙だ。

「今の話、全部聞いていたんですね」

「あぁ。だが、今ではあの者達には感謝している。それまでは襲撃に怯え、逃げることしかしなかった余が、反撃する気になったのだからな」

ぞっとするほど冷たい声を聞いて、麻奈は彼の心の中の暗い闇を覗き込んだ気がした。

彼は今、王座に就いている。宣言どおり、手段を選ばずに玉座を勝ち取り、彼を排除しようとした者達に片っ端から報復していったのだろうか。

目の前の青年は、見た目通りの優男ではないのかもしれない。

麻奈は握り締めていた拳に、嫌な汗が滲んでくるのを感じていた。ビシャードと此処で二人きりでいることが途端に恐ろしくなってくる。

「陛下、もう行きましょう。此処から出る道を探して、一度廃校に戻りましょう」

自分でも驚くほど擦れた声だった。なにしろ、彼の過去が目の前で再現されているのだ。もしかしたら、ビシャードが柱の影で笑いあっていた男達に報復する場面が今にも始まるかもしれない。

せわしなく視線をさ迷わせる麻奈を見て、ビシャードは一瞬全ての感情を押し殺したような冷えた眼差しをした後、そうだな。と頷

いた。

ビシャードのトラウマ　3（後書き）

いつも読んでくださってありがとうございます。
相変わらず場面転換の多い話ですが、どうぞこれからもお付き合いください。
それでは、また次回。

ビシャードのトラウマ　4

二人は乳白色の柱の列を横切って、巨大で陰鬱な廊下を歩いていた。その途中、何人かの人たちとすれ違ったが、誰も麻奈とビシャードに注意を払う者はいなかった。

「とりあえず、外へ出るにはどっちに行けば良いですか」

「そうだな、右の廊下へ。その方が正面から出るよりも近道だ」

二人が歩きかけたその途端、周りの存在がまたしてもあいまいに輪郭を溶かしていく。ゆらゆらと揺らいで見える景色がどこかへと流れ去り、麻奈たちはその渦の中にただただ立ち尽くしていた。

また場面が変わるのか、と半ば諦めのような気持ちで麻奈は辺りの様子を見つめていた。

まるで風に吹き飛ばされる砂のように、少しずつ移ろう風景。その後ろから新しい景色が顔を出す様子は、何度見ても幻想的だと麻奈は思う。

しかし、この不可思議で美しい景色とは裏腹に、麻奈はなぜか胸騒ぎがしていた。だんだんとビシャードの過去に何が起きたのか、核心へ迫ってきている気がするのだ。

どうしてビシャードの過去を見せられているのかは分からないが、この現象には何者かの悪意すら感じる。ビシャードの触れられたくない過去をわざわざ選んでいるように思えるのだ。

すっかり景色が入れ替わると、そこは夕闇が忍び寄る茜色の小さな部屋になっていた。どこからか、据えた様な臭いが漂ってきて、麻奈は顔をしかめて小さく鼻を鳴らした。

大きな人の背丈ほどもある窓は開け放たれていて、見覚えのある男がその前に立っているのが見えた。　少し影になっていたが、窓の前に立つのは、ビシャードの父親の姿だった。

しかし、これがあの堂々としていた彼の父だろうか。薄くなった髪は白くなり、顔の皮膚はたるんでくすんだ色をしている。刻まれた深い皺と落ち窪んだ目は、彼に十分な老いを感じさせた。何より、肩を丸めて佇む様子は、ただの寂しい老人のようだ。

彼はじっと動かずに、足元に置かれている巨大な白木で出来た箱を見つめていた。ふと、何気ない動きで腰から下げている湾曲した刀に手をかける。剣と鞘のこすれるザラザラという音がして、彼はそれをゆっくりと引き抜いた。

麻奈は息をのんだ。夕日を受けて鈍く光るそれは、禍々しい茜色に染まって見えた。

ビシャードの父は足元に置かれている箱に顔を寄せると、そっと手を置いた。まるで慈しむように表面を軽く撫でている。しかし、その顔は強張ったままだった。

それは奇妙な箱だった。大きくて細長く、蓋には小さな覗き穴のような物がある。麻奈の位置からは中を覗くことは叶わなかったが、隣にいるビシャードが緊張したように震えたのを見て、楽しい物が入っているわけではないのだと察した。

中身は気になるが、それよりもびりびりと痛いほどに張り詰めているビシャードの方が気にかかる。

今の彼は、声をかけるのさえも躊躇ってしまう。

そこへ、バタンと大きな音を立てて、一人の青年が飛び込んできた。

「父上、叔父上がご帰還されたというのは本当ですかっ」

廊下を駆けてきたのだろう。息を弾ませて、嬉しそうに頬を上気させているのは過去のビシャードだった。部屋に飛び込んできた彼は、顔色が悪く不健康そうではあるけれど、背の高い青年に成長していた。

今のビシャードとあまり変わりのないその姿は、恐らくこれがごく最近の出来事であるのだと推測出来る。

「このたびの勝ち戦（いくさ）のお祝いに伺ったのですが――叔父上はどこに」

部屋に父親しかいないことにビシャードが戸惑った様子を見せていると、王は剣を握ったまま、駆け込んできた息子をちらりと振り返って立ち上がった。そして、無言で足元の箱の蓋をスライドさせて顎で示した。覗いてみろ、ということらしい。

箱の蓋が僅かに開いた途端、中からザアッという音がして、大量の白い粉が床に零れ落ちた。麻奈はその隙間から、白い粉に埋もれている何かがちらりと見えた気がした。目を凝らしてそれが何なのか確かめようとしたその時、隣にいるビシャードの手が伸びてきて麻奈の目を片手で覆った。それは酷く冷たい手だった。

「陛下？」

据えた臭いが強くなった気がした。

「見ないほうがいい」

その言葉で、麻奈は箱の中に何が入っているのかがやっと分った。

話の流れからして、それは恐らく――

「叔父上の亡骸だ」

麻奈の視界を柔らかく塞ぎながら話すビシャードの声は、少し震えていた。

箱の中に大量に入っていた白い粉末は、遺体の腐敗を防ぐ為の塩だったのだ。

麻奈は、自分の目に張り付いている優しい手に、自らの手を重ねた。ひんやりと冷たい彼の手を目元から外して、そのまま指先をちょんと握る。ビシャードは一瞬驚いたような顔をして麻奈を見下ろしている。麻奈はその瞳に軽く頷いて、目の前の出来事を一緒に見守ろうと思った。

過去のビシャードは、目を見開いて叔父の亡骸を見つめていた。驚いた顔で固まるその顔は、人形のように生気が感じられない。

王は、とても緩慢な動きで剣先を棺に向けていった。

「理解したかビシャード。ジェミールは、そこだ」

棺を覗く過去のビシャードの唇が震えた。隈に縁取られたその瞳から、涙が盛り上がって溢れ出す。

「今度の戦は、死傷者はほとんど出なかったと報告がありました――。それなのに、なぜ叔父上が」

叔父が亡くなった事を否定して欲しくて、ビシャードは縋るような視線を王に向けたが、彼は手にしている剣を弄んで視線を逸らすばかりだった。

悲しみに濡れたビシャードの瞳が、急に大きく見開かれた。はっ

としたその表情は、何かに気づいたように見える。

「父上、貴方は此処で何をしていたのですか？　死者に労いの言葉をかけるのに、そのような剣は必要ないはず」

「――労うだと？」

この時初めて王の顔に表情が浮かんだ。

「余に奴を労えというのか！　この裏切り者の弟にっ」

今まで能面のように無表情な顔をしていた王の頬に赤みが差した。

「この男が死んだのは当然の報いだ。余が労う必要など全くないっ」

興奮して口から泡を飛ばしながら怒鳴る王の目が、爛々と薄闇に輝いた。

「できるものならば、余のこの手で殺してやりたかった」

忌々しそうに塩の中で眠る男を見下す。

「首だけにして帰還させるはずが、手違いで五体満足で帰ってくるとは――」

ぞっとする声色で、王は棺桶の中の遺体の首元を凝視している。

麻奈は体に震えが走った。彼が手にした剣で何をしようとしていたのか想像できてしまったのだ。そんなことがまかり通る国。これがビシャードの世界なのだと、麻奈はこの時呆然と理解した。

「父上、まさか――戦に紛れて叔父上を打つよう命令を出したのですかっ」

王は動かない。無言は肯定だった。

ビシャードの顔色が変わる。

「なぜ」

ビシャードは震えていた。怒りと悲しみが混ざり合って、内側から抑えきれない感情が噴出しているようだった。

「なぜ？　それは余が聞きたいものだ。どうして二人は余を裏切ったのかっ」

「二人？」

「そう。お前の母と、ジェミールだ。ちょうど良い機会だ。お前にも関係のある話なのだから、聞かせてやろう」

いつもと様子の違う父親を睨みながら、ビシャードは話の先を待った。怒りを何とか体の中へと押し止め、血走った王の目をまっすぐに見つめる。

なぜかは分らないが、この話は聞かねばならないと彼は思った。叔父の死を追及するのはその後だ、と。

「17年前、スジャナは病で死ぬ直前に、余に一つの秘密を告白した。今にしてみると、聞かなければ良かったといつも思う」

ゴクリ。鳴ったのは誰の喉だったのだろう。

「お前の母は病に倒れ、自分にはもう僅かな時間さえも残されていないと知っていた。そして床に臥せながら、余に話さなければならない事があると言ったのだ。掠れた声で、もう動かぬはずの体を起こし、額を床に付けるほど深く頭を下げて」

父親は軽く息を吐いた。

「スジャナは言ったよ。私は許されない罪を犯しました。ビシャードの父親は貴方ではありません。と……」

誰も動けなかった。王の声だけが紅い夕日の差し込む中、静かに響いていた。

「余は初めは信じなかった。お前は余によく似ていた。その容姿も、才も。しかし、スジャナは首を振った」

王はその時のことを思い出しているのか、遠い目をしている。

「彼女は易を立てた。その結果、お前は余の子供ではないと出たという。――もう察しは付くだろう？　お前の父親は、ジェミールだ」

王は足元の弟をじっと見つめた。その顔は、いっそ穏やかとも言える表情だったが、剣を握る彼の手は小刻みに震えていた。

「なぜスジャナはこの事を余に告げたのだろうな。自分の子供ではなくても、今までと変わりなくビシャードを育ててくれるはずだと、余に期待したのだろうか――それとも、罪を負いきれなくなって、許しが欲しかっただけなのか」

王は目元を片手で覆った。

「だが、余はそのような心の広い男ではないのだ。許さない。許せない。17年経った今でさえもっ」

「父上」

「この告白さえなければ、お前が余の子供ではない事は永遠に気づかなかっただろう。お前は余に生き写しだった。あのときまで、優秀だったお前は余の自慢の息子だった。しかし、血が繋がっていないと分った瞬間、お前を酷く憎らしく思った」

王はビシャードを睨みつけるように見つめると、剣先を突きつけた。

「二人の罪の象徴であるお前も許すことは出来ない。あの時、余は愛しい妻と最愛の息子、最も信頼する弟を同時に失ったのだ」

涙を流す王の瞳は、もうビシャードを見てはいなかった。ビシャードに突きつけられた剣先がぶるぶると震える。

「それからは、お前も知っているだろう。余はジェミールを遠ざけた。不義理を理由に処刑する事は出来なかったのだ。それをしてしまえば、余は妻を寝取られた王という烙印を押されるのだからな。奴を国の果ての警備にあて、顔を見ることも無ければこの怒りもいつかは収まるだろうと思っていた。しかし、心の奥ではやり場のない怒りはいつまで経っても燻り続けた」

「それで、それで叔父上を殺したのですか」

王は口角を片方だけ持ち上げた。

「そうだ」

「どうして――。17年間耐えたではありませんか。なぜ今になってこんな事を」

王はふん、と鼻を鳴らした。

「この男が、今度の戦を終えたら何をしようとしていたか知っているか？　妻を娶ろうとしていたのだ。余から妻を奪っておいて、自分だけ幸せになろうだんて――。許せぬ。余と同じように、この男は孤独に打ちひしがれていなければならないのに。だから余は、密かにジェミールを打つように勅命を出したのだ」

王は突然ふっと力を抜いて笑い出した。

「長かった。あと一つ、事を終えればそれで全ての憂いが片付く」

ゴクリ。今度は自分の喉が大きく鳴ったのを、麻奈ははっきりと聞いた。それと同時に、隣に立つビシャードの息遣いが、途端に早くなるのを感じた。

ビシャードのトラウマ　４（後書き）

いつも読んでくださってありがとうございます。
ビシャードの母が立てた易ですが、実は非常に曖昧なものです。まさしく当たるも八卦当たらぬも八卦……。しかし、この国では易を盲目的に信じています。真相は闇の中です。
ＤＮＡ鑑定でもすれば分りそうですが、そういった技術はこの国ではありません。少しだけ補足でした。
それでは、また次回。

ビシャードのトラウマ　5

王はゆらりと体を傾けて、床を滑るように移動した。その姿はまるで酒に酔っているようだ。その充血した瞳は、もしかしたら本当に酔っているのかもしれない。

彼は、実に無造作にビシャードへ近づいていった。

「余の血を継がない第一王子を、いつまでもこのままにしてはおけない。なぁ、ビシャード。お前でもそう思うだろう」

ビシャード王が近づいてきた分だけ下がって、お互いの距離を開ける。

「なぁ、分るだろう。余の本当の子供に王位を継がせるためには、お前を殺さねばならないのだ」

王はさらに距離を詰めてくる。その手には抜き身の剣が禍々しく光っていた。

「そのために、余は今まで色々と手を尽くしたというのに……」

王はため息を吐いて肩を竦めた。

まるで、駄々をこねる子供に手を焼いているような何気ないその仕草に、麻奈は鳥肌がたった。一体この父親は何に手を尽くしたというのか。

「まさか、私を狙っていたのは――父上だったのですかっ」

王は本数の少なくなった歯を見せて笑う。

「ビシャード、お前は本当に運が強い。余がどんなに暗殺者を差し向けても、持ち前の用心深さと悪運で全て切り抜けてしまった。知っていたか？　お前の私室の扉に毒を塗っていた事を。お前は鼻が利く。食事には気を遣っていても、そこならば警戒することはないだろう。お前は爪を噛む癖があるだろう。そこに仕込めば、確実に殺せると思ったのだが――」

棺を挟んでじりじりと回り続けるふたり。

「一つだけ誤算だった。お前は体が弱いのではない、強すぎるのだよ。毒を盛られても死なないほどにな。お前の体は、ほとんどの毒に耐久性があるらしいな。まったく、厄介なことだ。だから、余は考えた。辛いが、やはり自分で手を下さねばならないようだ」

棺桶越しに迫る王の剣先を警戒しながら、ビシャードの額に汗が浮かぶ。

ビシャードは明らかに動揺していた。無理もない、父親に殺されかけているのだ。目の前に写る光景は全て嘘なのではないかと疑っているのだろう。

ビシャードは、かさかさに乾いた唇から浅い呼吸を繰り返していた。小刻みに揺れている瞳はこう叫んでいるようだ。――信じられない、信じたくないと。

息子の戸惑いを見抜いて、王が大きく一歩踏み出した。一足飛びに距離を詰めて、ビシャードに切りかかる。

横薙ぎにされた剣先はビシャードの脇腹をかすめて、彼の服を僅かに破いた。返す刀で王は剣を斜め上に振り上げた。ビシャードは後ろに飛んでそれを避ける。

腹と喉。傷を受ければどちらも致命傷だ。

一切迷いのない剣に、王の本気が伺える。彼の殺意は本物だった。
いくら老いたとはいえ、王の剣筋はまだまだ鋭い。いつまでも避けきれないだろう。

ビシャードは護身用に持っていた短剣を懐から取り出した。
しかし、剣を向けるのを一瞬躊躇ってしまう。心の底では、今まで敬愛してきた父に刃を向けたくないと思っているようだ。しかし、状況はそれを許してくれない。
ビシャードの僅かな隙を付いて、王の剣が容赦なく襲ってくる。迷った分だけ自分の首を絞めることになるのだ。
ビシャードは短剣を素早く構えて剣を防いだ。しかし、捌き切れなかった一太刀が、首筋から鎖骨にかけて走り抜けていった。

「くっ」

傷の確認をする暇もなく、重心の乗った剣が続けて繰り出される。ビシャードは必死にそれを短剣で受け流した。しかし、この短剣では王の剣を何度も受け止める事は出来ない。刀身に差がありすぎるせいで、軌道を剃らすだけで彼には精一杯だった。

王は自分の優位を確信して、歪んだ笑みを浮かべている。
ビシャードが一瞬目を伏せた。こんな父親を直視できる息子などいないだろう。
麻奈は幼い頃のビシャードを思い出した。あの時のビシャードの瞳からは、父親を尊敬する気持ちが溢れていた。きっと自分の父親がこんな事をするはずがない。そう叫びたいに違いない。
ゆっくりと目を開いたビシャードの瞳には、何か強い決意が込められているように麻奈には感じられた。

王はすぐに構えを変えて、強烈な突きを放った。短剣によって軌道が反らされても、確実にビシャードの体に当たるように。

その意図を読んだビシャードは、素早く身を屈めてそれを避けた。

ヒュッという空を斬る音が彼の頭上に響く。

ビシャードはそのまま床を転がり、こっそりと叔父の棺に左手を突っ込んだ。

「ビシャード、もう終りにさせてくれ。お前は誰からも望まれていないんだ」

その言葉にビシャードは顔色を変えた。確かに、彼は民にも父親にも望まれていない存在だ。青ざめた顔をしながらも、ビシャードは気丈に父親を見据えていった。

「私は――確かに間違いで産まれてきたのかもしれません。ですが、今私は生きているのですっ。誰も私という存在を望んでいなくても、私は――私だけは自分を否定したくないっ」

「お前は存在してはいけない人間なんだっ」

王は剣を大きく振りかぶると、渾身の力を込めてビシャードの額を目がけ振り下ろした。それが届く寸前、ビシャードは左手に握りしめていた塩を王の顔に投げつけた。

「うっ」

王が怯んだ隙を逃さず、ビシャードは彼の剣をかいくぐると、そのまま頭を低くして体当たりしていった。肩にぶつかる衝撃を感じながら、ビシャードは目を閉じて呟いた。

「これで、いい」

みぞおちに体当たりを喰らい、王が息を詰まらせる。

ビシャードは足を踏ん張り、つきすぎた勢いを殺して何とかその場に留まった。彼まで落ちるわけにはいかない。

王を突き飛ばした先。それは、大きく開け放たれた窓だった。彼は計算して王をこの窓に突き落としたのだった。

長い悲鳴が尾を引いた。ここは二階、下は石畳。落ちれば無事ではすまない。

「父上、これからは私が王になります」

ビシャードは粗い息を吐きながら、窓の下を覗いて呟いた。

ビシャードのトラウマ　5（後書き）

いつもありがとうございます。
いよいよビシャード編、佳境に入ってきました。
それにしても、主人公見てるだけって……。
それでは、また次回お会いしたいと思います。

ビシャードのトラウマ　6

全てを見ていた麻奈は、瞬きもせずに震えていた。目の前で何が起こったのか理解出来ずに、ただ呆然としていることしか出来ない。

王が落ちた。ビシャードが、突き落としたのだ。

その場面ばかりが頭の中で繰り返し繰り返し再現され、その度に麻奈の胸はぎゅっと掴まれたように苦しくなった。

恐る恐る隣に立つビシャードを見上げると、彼はじっと麻奈を見ていた。何かを期待するような、それでいて突き放すような視線。それを見て、麻奈は繋いでいた手を離してしまいたい衝動に駆られた。彼の手を握っていたくない、そう思ったのだ。

麻奈はその感情のままに、ビシャードの手を離そうとした。しかし、その前にビシャードが逆に強く麻奈の手を握りしめた。

汗でじっとりと湿った二人の掌は、べたべたとした感触をしていた。

「わざと突き落としたんですか」

麻奈の口は勝手に動いていた。

「――正当防衛だ」

麻奈はビシャードのこわばった顔を見つめた。彼の答えには素直に頷けない。確かに先に仕掛けたのは王だった。ビシャードは彼から自分の命を守らなければならなかったのは認める。しかし、ここまでする必要があったのだろうか。

ビシャードは自分の意思で、自分が王になるために一番大きな障害を排除したのだ。それが、父親と呼んで慕っていた人だったとし

ても――。

麻奈は、窓の外を見下ろしている過去のビシャードに目を向けた。激しく息を乱しているその横顔は、夕陽の陰になっていて見えない。彼がどんな顔をしているのか、見えなくて良かったと麻奈は思った。

「確かに、正当防衛でした。でも――」

「言うなっ！」

鋭い叱咤を受けて、麻奈は震え上がった。その剣幕に押されて、無意識に一歩後ろへ下がる。

「余はこうしなければならなかったんだ。こうしなければ、余は父上に殺されていた」

繋いでいる手が痛いほど握られる。

「余は王になりたかった。力を得て、皆に認められたかった。誰かに必要だと言って欲しかったんだっ」

ビシャードはすがるような目で麻奈を見つめる。

「余が生きる道は、こうするより他は無かった」

「陛下……」

項垂れながらビシャードは何度も呟く。まるで自分にいい聞かせるように。そして、彼はきっと誰かにそれを肯定してもらいたかったのだろう。たとえ、それがこの国に全く関係のない麻奈の言葉で

も良いほど、彼は追い詰められているのだ。

しかしそれが分かっていても、今の麻奈にはそれを言ってあげられる余裕は無かった。目の前で人が殺された衝撃に囚われて、まだ震えが収まらなかった。

ビシャードの身の上は気の毒だと思う。彼が言うように、生き残る道はこれしかなかったのかもしれない。しかし、それと今湧き上がってくる感情とは別物なのだ。

ビシャードは人を殺した。どうしてもその事実だけが際立ってしまう。

麻奈は今、ビシャードをとても恐ろしいと思った。

ふたりの間に長い沈黙が横たわった。ビシャードの手からだんだんと力が抜けていき、ずるりと麻奈の手がそこから滑り落ちた。

まるでそれが合図だったかのように、ビシャードがゆるゆると顔を上げる。怯える麻奈を見つめて、彼の口の端が僅かに歪む。

「ミナカミ……そなたも、余を受け入れてはくれないのか」

そう言うが早いか、骨ばったビシャードの手が麻奈の胸ぐらを掴んで、ぐいと強く引き寄せた。

「余が恐ろしいのか」

ビシャードは長身な体を折り畳むように麻奈に顔を近付けた。吐息がかかるほどに近い彼の顔に、悔しそうな色が滲む。あまりに突然の出来事に、麻奈は声も出ない。

何も答え無い麻奈に苛立ったのか、ビシャードが奥歯を噛み締める音が間近で聞こえた。

「見ずしらずの者だったが、そなたなら心を許しても良いかと思っていた。孤独だった余を、損得関係なく救ってくれたお前なら……。だが、結局お前も城の奴らと同じだ。余を受け入れない。認めてはくれないのだろう」

「そんな――」

麻奈の視界がみるみるぼやけていった。

「泣くほど怖いか？　はは……嫌われたものだ」

麻奈は言葉に詰まった。ビシャードが怖いのは事実だったが、彼を傷つけたいわけではないのだ。何かを言わなくてはと焦るけれど、今はしゃくりあげる声しか出てこない。

ビシャードが乾いた笑いを浮かべる。

「やはり、誰かに心を許す事が間違っていたのだ」

麻奈を見つめるターコイズ色の瞳には、最早何の感情も浮かんでいない。

「誰も余を必要としないのなら、余はもう誰も必要としない」

ビシャードは麻奈の胸ぐらを掴んでいた手を離すと、ゆっくりと歪な笑みを浮かべる。その左目から、すっと涙が一筋溢れて目元のホクロを濡らしていった。

「お前も、もう――要らない」

ビシャードは麻奈の胸をドンと突き飛ばした。麻奈は後ろに数歩、たたらを踏んで床に倒れ込んだ。

涙でぼやける視界の中で、ビシャードが裾を翻して部屋を出て行く様子を、麻奈はただぼんやりと見送っていた。

バタンと扉が閉まる音が響く。それはビシャードの拒絶の音のように聞こえた。扉を見つめながら、自分の肩を力任せに抱き締めた。こんな所、もう嫌だ。

麻奈はそのまま身を縮めて目を閉じる。懐かしい顔を脳裏に浮かべながら、かたかたと震える体を鎮めようと両腕に力を込める。

「酷いよ。あんなのただの八つ当たりじゃない。――怖いよ、ジュリアン。早く此処から出たいよ」

ジュリアンがこの場にいたら、きっと優しく微笑んで麻奈を甘やかしてくれるに違いない。麻奈はきつくきつく目を瞑った。夕日も目の前に置かれている棺も、過去のビシャードさえも見たくないと思った。

ビシャードは、一体自分に何を望んでいたのだろうか。貴方の行動は仕方なかったのだと認めてあげればよかったのか。そもそも、お互いの事を良く知りもしないで、勝手に理想を押し付けるなんて迷惑でしかない。

しかし、瞼の裏に浮かんでくるのは、ビシャードの傷付いた顔だった。

「陛下、泣いてた」

誰も必要無い、その言葉が麻奈の胸にざらついて残る。廃校で出

会ったピンク色の肉塊を思い出し、麻奈は突然理解した。だからビシャードはあのような姿になったのだと。

誰も見えず、誰の声も聞こえない。みんなから避けられ、一人きりの世界で生きる。それは『誰も要らない』と言った彼が望んだものそのものだった。それと同時に、彼が一番恐れていたもの。

「ジュリアンが言ってたのは、こういう事だったのね」

その時、今まで窓辺に呆然と佇んでいた過去のビシャードが振り向いた。そして、そのまま真っ直ぐ麻奈の方に向かって歩いて来る。麻奈は緊張しながら息を潜めた。彼に自分が見えるはずはないと分っていても、自然と鼓動が早くなる。

ビシャードの首から鎖骨にかけて赤い筋が走っている。そこからじんわりと血が滲んでいるのが見えたが、大した出血もなく傷も深くないようだ。さっき王に斬られた傷だろう、見る限り命に別状はないようなので、麻奈はほっと胸をなでおろした。

過去のビシャードは麻奈の横をすり抜けると、ドアを開けて廊下へ顔を出した。

「誰か―。誰かいないかっ」

その声を聞き付けて、数人の足音がバタバタと近付いて来た。

「どうかなさいましたか」

駆け付けてきたのは、簡素だが甲冑を付けた衛士のような男たちだった。彼らは、ビシャードの傷を見るなり驚き、一瞬にして緊張を走らせた。

「ビシャード殿下、その傷は」

「かすり傷だ。それよりもたった今、王がご乱心なされてここから階下に飛び下りた」

衛士たちは一瞬言葉に詰まり、互いに顔を見合わせた。そして、すぐさまバルコニーに駆け寄り、たちまち絶句してしまった。固まったままの彼らにビシャードは鋭く指示をだす。

「早く行け！　まだ息があるかもしれない」

一同がはっと我に返り、足音荒く部屋を出ていった。彼らのその青い顔を見ると、王の怪我が致命傷に達しているのだと想像出来る。

麻奈は立ち上がって、ふらふらと吸い寄せられるように窓辺に歩み寄っていった。深い意味などなく、みんなと同じように下を覗き込んでみようと思ったのだ。

石畳の上に王が倒れていた。それを見てから、麻奈はたちまち後悔した。喉の奥に苦いものが競りあがってくるのを、口元に手を当てて何とか堪える。

王の右足は本来曲がらない方向に曲がり、石畳にはどす黒い血だまりが広がっている。麻奈は鼻まで両手で覆って、えづくのだけは何とか我慢した。大量の血の匂いが此処まで臭ってくるようだ。

麻奈が何とか呼吸を整えていたその時、後ろからビシャードの弱々しい声が聞こえてきた。

頭だけを残した夕日の頼りない明かりの中、過去のビシャードはひっそりと置かれている棺の前に膝まずいていた。

「叔父上……。いや、貴方が私の父上でしたね」

彼は、棺の半分ほどずり落ちている蓋をそっとずらして、震える指でそっと遺体の頬に触れた。麻奈はこの時、初めて棺の中の遺体の顔を見た。

亡くなってから、かなりの日にちが経っているのだろう。その顔はかなり黒く変色していたが、ビシャードに良く似た垂れた目と、二つ並ぶホクロが見て取れた。

「貴方は知っていたのですか？　私が息子だと」

ビシャードの瞳から涙が溢れ出る。

「どうして……どうしてこんな事に――」

ぎりぎりと唇を噛み締める。

「どうして母を愛したのですか。貴方が道を外れなければ、こんな事にはならなかったのにっ」

ビシャードは必死に嗚咽を噛み殺す。その度に彼の肩は小刻に震えた。やりきれない悲しみは、彼の中には到底納まりきれないのだろう。

麻奈は、彼の後ろでそっと涙を拭いた。

ビシャードはそれからしばらく経った後、服の端で涙を拭ってから、今度はしっかりした足取りで部屋の外へと歩いて行った。　部屋を後にする際に、彼は棺へ一瞬だけ視線を送ったが、すぐに前を向いてそのまま出て行った。

ビシャードのトラウマ　6（後書き）

読んでくださってありがとうございます。
アルファポリス様で開催されております「ファンタジー小説大賞」にエントリーしてみました。よければ、応援してください。
それでは、また次回。

ビシャードのトラウマ　7

現在と過去、二人のビシャードが部屋を出て行ってしまった。一人で部屋に残されてしまった麻奈は、途方に暮れていた。これから自分は一体どうしたらいいのだろう。帰るために何をしたらいいのかさっぱり解らない。

麻奈はひっそりと横たわっている棺を見つめた。全ての間違いは、彼とビシャードの母親がしでかしたことから始まったのだ。そう思うと、そのふたりにとても腹が立った。彼らに翻弄されてしまったビシャードも王も、気の毒で可哀想でならなかった。

「やっぱり一人で帰るわけにはいかない。陛下も一緒に連れて行かないと」

麻奈は棺をちらりと見た。手をあわせる気にもなれなくて、そのまま部屋を飛び出してビシャードを追いかけていった。

ビシャードは石造りの廊下をふらふらと歩いていた。麻奈と別れた後、彼は足が赴くままに歩き続けていた。

辺りには誰の姿もない。此処は司祭と王族しか立ち入ることが出来ない、神殿と宮殿とを繋ぐ道だった。日が翳った今の時間、祈りを捧げる者は誰もいない。太陽の神を祭るこの神殿には、暗くなってから入るのはタブーとされているのだ。

ビシャードは大きくふらついて壁に手をついた。ガタリと大きな音がして、足もとにあった置物が倒れる。神獣を象ったそれは、大きな鼻をした毛の長い聖なる動物の形をした置物だった。神殿への道を守護する門番として、それらはこの廊下に点々と置かれている。ビシャードはそれの一体を台座ごと蹴とばしてしまったらしい。置物と言えども、聖なる獣。本来ならば、それは神をも恐れぬ所業だった。

しかしビシャードはそれに一蔑もする事なく、足を引きずりながら歩いて行く。なぜか足が重たくてたまらなくなっていた。しかし、ビシャードはそんなことも気にならないようにひたすら歩き続ける。今の彼は、何も構う気になれないのだった。

ビシャードは　先程まで見ていた、懐かしくも心がえぐられるような場面のことを思い返していた。　一番辛い思い出を客観的に眺めるのは、思ったよりも苦痛だった。何より、当時はかなり動揺していたせいで聞き逃していた父の言葉を、もう一度一言一句はっきりと聞かされたのだ。

麻奈の手前、ビシャードは取り乱したりはしなかったが、自分の心のどこかがズタズタになっていくような気がした。

「あぁ、何て重たい足だ」

ビシャードは足にまとわり付く裾を払いながら進んだ。いっそのこと、この重たい体を捨ててしまおうかとも考える。そうすれば、もう何もかも感じなくてすむのだ。

「あの時と同じか――」

ビシャードは、奇妙な男が迎えに来た時のことをふと思い出した。

そのときも、紅い夕日が地平線に隠れる寸前の、薄暗い夕暮れ時だった。

段々と重くなる足を引きずりながら、ビシャードは過去に思いを馳せていた。

王を窓から突き飛ばした後、ビシャードは王の生死を確認させた。流石に、それを自分の目で確認する余裕は彼にはなかった。

結果、二階から突き落とされても王は死んではいなかった。大怪我を負ったが、辛うじて一命だけは取り留めていたのだ。その報告を聞いて、ビシャードは密かにその後の方針を練った。どうすれば自分に疑いがかかることなく、王位を引き継げるか――。王が執務を取れない以上、いくらでもやりようがあるはずだ。彼は密かにそう思った。

まず、ビシャードは王を宮殿の中央から遠ざけさせ、宮殿の奥深くの離れに閉じ込めた。療養と言う名の監禁だ。王の意識が戻ることは難しいとのことだったが、念には念をいれて、今ビシャードが動かせる兵を離れに配置させた。警備と称して、完全に王を閉じ込めるつもりだった。

それからビシャードは、今回の騒動は王が乱心したために起きた事だと噂を流した。

王が中央から離れている間に、その噂はアッという間に広まり、翌日には宮殿の下働きのものにさえ知れ渡っていた。

全てはビシャードの思惑通りに進んだ。　後は王が乱心したという証拠を掻き集め、それを臣下の前に示す事で、自分が先王を突き落とした疑いを晴らす事が出来るだろう。

ビシャードは、あのとき錯乱した王が自分に斬りかかり、その事を悔いて自ら身を投げたのだと繰り返し訴えた。しかし証人がいない。ビシャードの発言に、ほとんどの臣たちは懐疑的だった。

その後、ビシャードの言葉を信じざるを得ない証拠が出てきた。先王が出したジェミール暗殺の勅命を受けた将を、ビシャードが探し出してきたのだ。勅命の書を出す事によって、だんだんとビシャードを支持する者が増えていった。

これで王を退陣させ、ビシャードが戴冠する準備が整った。ビシャードは、華やかで時間のかかる戴冠式を、ジェミールの喪に伏すべきであると主張して省いた。彼は少しでも早く王位に就きたかったのだ。王の意識が戻らないうちに。

幸いその申し出はすんなりと通り、ビシャードは望んだとおり、玉座に収まる事が出来た。それは王が宮殿を離れてから、僅か七日の出来事だった。

ビシャードは予定通り玉座に座ると、長い息を吐き出していた。ここまでこぎつけるのに、とても長かったように感じていた。父が座っていた椅子に座る。たったそれだけのことなのに――。

しかし、まだ気を抜く事は出来ない。とても危険な綱渡りは無事成功したが、まだ気がかりが一つだけ残っているのだ。

今回の出来事で、ビシャードには明確に説明出来ない事がある。それは、先王がなぜジェミールを暗殺しようとしたのかだった。それを話せば、王の血を引かない自分が王位に就くことが出来なくなってしまう。何があっても、絶対にそれを公にする事はできないのだ。

理由の解らない物事は疑われ易いものだと、彼は良く心得ていた。ビシャードは、そこを突かれた時の返答を考えていたのだが、彼の予想に反してジェミール暗殺の理由は深く追求されることはなかった。先王とその弟の不仲はほとんどの者が承知していた事で、今更どうこういうものでは無かったらしい。

こうしてビシャードは、穏便にそして速やかに王位を得る事が出来た。

自分の本当の人生は、ここから始まるのだとビシャードは信じた。未来をこんなに楽しみに思ったのは、幼い頃以来のことだった。

その時のビシャードはとても満足していた。自分の力で望んでいた全てを手に入れたのだ。今まで疎ましく思われているだけの存在だった自分に、全ての者が頭を下げる。それは一種の快感でさえあった。

しかし、そんな生活は長くは続かなかった。万全を期したつもりでも、ビシャードを疑う声は静かに、そして小波のように広がっていった。

「先の事件は、やはりどこかがおかしい」

「ビシャード陛下が先王を亡きものにしようとしたのではないのか」

「誰も現場を目撃していないんだ、いくらでもビシャード陛下の良いようにでっち上げられるさ」

「しかし、先王が出した勅命があるぞ。印が押されているのだから、確かに先王御自身が出された物に違いない。先王が御乱心なされた立派な証拠ではないかっ」

「いや、御乱心なされて勅命を出したのではないのかもしれぬ。例えば――ジェミール様が謀反を企てていたとか」

「それならば、何故密かに勅命を出す必要がある？　堂々と出せばよいではないかっ」

「戦中に味方を処罰すれば、それだけで士気が下がる事もある。ましてや、前線で戦っておられたジェミール様ならば尚更だろう」

「真相がどちらにせよ、ビシャード陛下の戴冠には府に落ちない点が他にも色々ある」

「確かに、本来ならば吉日を選んで舞台を整えるのが普通だが、ビシャード陛下はやたら焦っていたように感じられたな」

「まさか、ビシャード陛下が全て仕組んだ事だと？　ジェミール様暗殺の勅命を出すように、先王に進言したとでも言いたいのか」

「先王の御乱心よりは、有り得る話ではないか」

「――やはりこの国の王にふさわしいのはアナン殿下しかいない」

噂はいつしか、ビシャードを中心に激しい渦を巻き始め、水面下でビシャードを非難し始めた。だが、誰も直接ビシャードに疑問を問う事はしなかった。表面上は何事もないかのように振舞いながら、誰もが執務以外の時にはいつも遠巻きに疑いの眼差しを彼に注いでいた。そして、目が合うとそそくさと逃げていくのだ。ビシャードは一人、玉座に座りながら項垂れる日が続いた。

いつしか、ビシャードは食事も喉を通らなくなり、またやせ細っ

ていった。王位を継承してからたった一ヶ月でこの有り様。詰めが甘かったのかと、後悔する毎日が続いていた。

水面下で噂されるだけでは、逆らう者を片っ端から処分することも出来ない。過去の暴君のようにそれをしても良かったが、人心が離れていくだけだということを彼は良く分かっていた。

結局、憧れて止まなかった椅子に座っても、彼は一人きりだった。いつしか、彼の周囲にはまた物騒な空気が忍び寄っていた。

外を歩けば矢が飛んで来る事など茶飯事に戻っていた。ビシャードは今までの経験から、命を守る術は嫌というほど知っている。毒にも耐久性がある。

しかし、ビシャードの精神は徐々に病んでいった。誰が敵か味方かも解らない中で命を狙われ、臣達は彼を認めずに顔を背ける。もう限界だった。

ビシャードはフラフラと玉座から降りると、頼りない足取りで歩き出していた。眠れない日々を過ごしていた彼の目の下には更に濃くなった隈が張り付いていた。彼はもう、正常な判断すら出来なくなっていたとは、自分でも気がついていなかった。

「まず余の噂をする者に処罰を与え、出所を調べよう。それから、以後この話をする者が出ないように、そ奴を見せしめに処刑しなければならない。そして次は――」

歩きながら今後の事を考える。それは酷く面倒で頭が痛くなる事だった。彼は知らずため息が癖になっていた。

「疲れたな」

その時のビシャードに行く宛などはなかった。ただこの息苦しさ

から逃れる為に、此処から逃げ出したいと考えていた。

「陛下」

廊下に差し掛かった所で、弟のアナンがビシャードに声をかけてきた。いつもなら、ビシャードの声がかかるまで話しかけることのない控えめな弟だったが、その時はアナンの方から声をかけていた。

いつもよりも体調が悪いように見えたせいだろうか。ビシャードはつまらないものでも見るかのように、出来の良い弟にちらりと目を向けた。

「陛下、如何致しました？――兄上？」

ビシャードは返事をすることもなく、アナンから視線をそらしてそのまま通り過ぎようとした。鬱陶しい。ビシャードは弟と比べられる度に、劣等感を募らせ、いつも彼を疎ましく思っていた。だが、ビシャードも馬鹿ではない。表立ってその感情を表したのは初めてのことだった。今は無性にこの弟が憎いと思った。

いつもの兄らしからぬ様子に、アナンは不振そうに首を傾げた。彼はこの二歳違いの兄をとても慕っていた。アナンにとってビシャードは、細い体を真っ直ぐに伸ばして、常に高みを見つめている人だった。たった独りで、いかなる障害にも立ち向かう姿にアナンはいつも憧れの瞳を向けていたのだった。

「兄上、如何なさいました」

アナンは通り過ぎようとするビシャードの正面に回り込むと、彼と正面から対峙した。　無礼を承知でその細い肩を掴んで顔を覗き込むと、ビシャードの線がゆるゆると上がった。彼は充血した瞳で、

弟の顔を見ていた。

「兄上。一体どうなさったんですか」

ビシャードは、自分よりも精悍な弟の顔に、突然拳を叩き込んだ。ゴッという鈍い音がしてアナンはその場に膝を付いた。　床に赤い雫がポタポタと落ちる。

「あぁ、アナン……。アナンっ」

痛みに顔を歪めて、アナンが鼻を押さえながら顔をあげると、ビシャードが口許を引きつらせながら見下ろしていた。生唾を飲み下すのもぎこちなく、アナンの喉がゴクリと鳴った。

「余の弟――」

ビシャードの骨ばった指には血が付いていた。それがアナンの首に回される。優しく、ゆっくりと。

「余の代わりに、出来の良いお前が王になれれば良かったのになぁ。この国の者はみんなそう望んでいる」

アナンの太い首に指を這わせたビシャードは、その硬くたくましい感触にすら嫉妬していた。自分の欲しい物を全て持っている弟。

「何を仰います、今は兄上が王なのです。下らない噂など捨ておけば良いのです」

アナンの真っ直ぐな視線を受けて、ビシャードの指に力が入った。

「流石だ。やはりお前は言う事が違うな。余よりずっと王の器ではないか」

「兄上――」

「余はお前が羨ましいぞ。誰からも王にと望まれるお前が」

ビシャードの手にグッと力が加わった。

「っ兄上……」

きりきりと絞まる気道にアナンの声が掠れた。その声にはっとしたビシャードは、彼の首から手を離した。一体、自分は今何をしてしまったのだろうか。

ビシャードは、咳き込んでいるアナンの鼻血を自分の服の袖でそっと拭った。その顔には後悔の色がありありと滲んでいる。

「――すまないアナン。余は、少し疲れたのかもしれぬ」

別人のように穏やかな顔付きになったビシャードに、アナンは安堵よりも胸騒ぎがした。

「悪かったな、許せ」

「いえ――大した事ではありません」

ビシャードはアナンに手を貸して彼を立たせてから、その筋肉に覆われた肩をポンと叩くと、そのまま歩きだした。

「陛下、私は陛下こそが王に相応しいと思っています」

弟の声をビシャードは背中で受けた。
アナンは、兄の細い背中を見ると、殴られた怒りよりも悲しさが沸き上がっていた。きっと彼は誰も信じてはいないのだ。心を許していないのだ。
続く刺客のせいだろうか、その背中はまた一段と痩せて見えた。
ビシャードの後ろ姿を見送るアナンの胸騒ぎはいつまでも止まる事は無かった。

ビシャードのトラウマ　7（後書き）

いつも読んでいただきまして、ありがとうございます。
「ファンタジー小説大賞」に投票してくださった皆様、本当にありがとうございました。応援を励みに、これからも頑張ります！！

ビシャードのトラウマ　8

ビシャードは歩く。どこに向かっているのかは自分でも分からない。

アナンに会えた事は幸運だった。ビシャードは彼の首を絞めてしまった瞬間、心に決めた事があった。

「これ以上醜態をさらす前に、自分の始末は自分でつけよう」

生まれを選ぶ事は出来なかったが、終りだけは自分で選ぶ事ができる。ビシャードは死に場所を求めてふらふらと歩き続ける。

ビシャードは、以前先王に言い放った言葉を思い出した。自分だけは自分を諦めない。そう言ったのは僅か一ヶ月前のことだった。今もその気持ちに変わりは無い。ただ、もう疲れたのだ。

「余は自分に出来る事をした。それで駄目なら……悔いはない」

ビシャードはいつの間にか、神殿の建てられている庭に出ていた。背の低い草が生い茂る庭の一角に、煉瓦造りの赤い建物が一際目立つ。彼は誘われるようにそこに近付いて、戸口の前に立っていた。

「神殿か」

中には誰もいない。しんと静まり返った空気と祭壇。御神体として奉られている人の背丈ほどもある鏡が、夕日を浴びてキラキラと光っていた。

「最後に懺悔か――らしくもないな」

自らの命を絶つには、この場所は神聖すぎる。　ビシャードは踵を返して神殿を出て行った。しかし、数歩も歩かないうちにビシャードは歩みを止める事になる。

「な、何だっ」

突然後ろの神殿の中から光が溢れ出て、ビシャードは振り向いた。

「これは、一体」

彼は吸い寄せられるように祭壇へと近付いた。御神体の鏡が、点滅しながら強い光を放っている。こんな御神体を見るのは初めてのことだった。

ビシャードが手を触れようとした瞬間、御神体から光が消え失せてしまい、辺りはまた紅い影が支配する静かな神殿に戻っていた。

「夢を見ていたのか」

今の光の名残も無く、冷ややかに佇む御神体を見ながら、ビシャードは夢を見たのではないかと不安になった。立ったまま夢を見るようでは自分もずいぶん焼きが回ったものだと頭の片隅で考えていた。

その時、酷く場違いなのんびりした声がかけられた。

「あの、ちょっと伺いますが――」

声のした方を振り向いてみると、男が一人御神体の影から顔を出した。

「貴方、酷く絶望していますね」

奇妙な男はつかつかと歩いて、ビシャードの前に立った。ぴたりと体に張り付くような奇妙な服を着た男は、ビシャードに軽く会釈をした。その拍子に、男の首に巻かれた見事な銀細工のネックレスが澄んだ音を響かせる。

「貴方を迎えに来ましたよ」

整った顔にふわりと笑顔を浮かべる。

「そなたは……一体いつの間に？」

さっきまでは誰もいなかった筈だ。まさか、死を考えていた自分に差し向けられた死神だろうか。　今の自分に迎えが来るならば、それしか考えられない。しかし、柔らかな印象のこの男はあまり死神にふさわしくないような気がする。寧ろ――。

ビシャードは祭壇の巨大な鏡を見た。そこには、気の毒な程に痩せて陰のある男が、暗い瞳を向けているのが見える。自分のほうがよほど死神のようではないかと思い、つい笑ってしまった。

そんなビシャードの様子に構う事無く、　男は微笑みながらビシャードに恭しく手を差し出した。

「突然で不躾ですが、私と一緒に来てもらえますか。貴方の助けが必要なのです」

「余の？」

ビシャードの喉の奥から低い笑い声が漏れた。そんなビシャード

を不思議そうに見ていた男の手を彼は猛然と払いのけた。

「余の事を知らないらしいな、奇妙な男よ。今はそなたを咎めはしない。だが、今後は言動に気を付けろっ」

ビシャードは高飛車に、しかし自嘲気味に男に言い放った。

「余はこの国の王だ。そなたは一体何者だ」

男は一瞬目を見開いたが、直ぐに柔和な笑みを浮かべた。

「――それは失礼を致しました。私はジュリアン田中と申します」

慇懃に受け答えるが、ジュリアンの頭はピクリとも動かない。頭を下げる事もなく、目線を合わせたままのジュリアンを見て、ビシャードは不快な気持ちが沸き上がる。気に入らない。この男の洗練されたしぐさに隠された本心は、恐らく他人を馬鹿にしている。

「さて、陛下。さきほどお願い申し上げた通り、私は貴方を迎えに参りました」

丁寧な言葉とは裏腹に、ジュリアンはビシャードの手首を掴むとそのまま引きずるように祭壇へと歩き出した。

「貴様、無礼であろう」

ビシャードは手を振り払おうとするが、ジュリアンの手はビシャードの手首に食い込んで全くびくともしない。ビシャードは自分の非力さを浮き彫りにされたようで、ジュリアンに更に嫌悪感を募らせた。

ジュリアンは男を一人引きずっているとは思えない歩みで、祭壇へと歩いて行く。

「離さぬかっ」

情けなく引きずられたまま、ビシャードは懐に入れた護身用の小刀をすらりと抜いた。ジュリアンの喉元にそれをぴたりと当てると、彼の歩みがようやく止まった。ジュリアンは振り返って眉間に皺を寄せる。しかし、掴んでいる手首はそのままだった。

「危ない物はしまって下さい。私は貴方を此処から救ってあげたいだけです」

ビシャードは小刀を構えたまま動かない。

「絶望しているのでしょう？　何もかも捨てて、逃げ出してしまいたいのでしょう」

ジュリアンは声を落として、囁くようにビシャードの耳に顔を寄せた。

「私なら、貴方を此処から連れだしてあげられます。自殺するよりも、その方がずっと良いと思いますよ」

ビシャードの瞳が僅に揺らいだのを、ジュリアンは見逃さなかった。一瞬のうちにビシャードの小刀をかいくぐると、単身祭壇を駆け上がった。

そして、目の前の巨大な鏡に躊躇う事なく片手を伸ばすと、指先が鏡の中に沈んでいった。固いはずのその表面にはゆらゆらとさざ波が広がっている。ジュリアンはどんどん腕を入れてゆき、遂には

肘まで鏡の中にとぷりと沈んだ。

「さぁ、行きましょう」

ジュリアンはビシャードを振り返り、手を伸ばす。

「そなたは……本当に死神か」

「まさか、違いますよ」

ビシャードには、彼がまるで獲物を捕えた悪魔のようにニンマリと笑ったように見えた。しかし、瞬き一つする間に彼の表情は真剣なものへと変わっていた。

「選んで下さい。私と共に行くか、此処に残るのか」

「無理矢理にでも引きずっていくのではないのか」

「いいえ。貴方はきっと、私と共に行く事を選んでくれます」

そう言って、ジュリアンはより一層手を差し出した。ビシャードはその手に誘われるように、ふらりと一歩踏み出してしまった。そして、はっとしてその足を慌てて元に戻した。

ジュリアンの言葉は、ビシャードにとってとても魅力的に響く。危うく、この胡散臭い男の手を取ってしまいそうになってしまった。

ビシャードはジュリアンを睨みつけたまま、思案した。この男に付いて行くのが危険な事だと、もちろん分かっている。しかし、自分の命すら絶とうとしていたところだ。もう失う物は何も無いように思える。

ビシャードは急に晴れやかな気持ちになった。

「全てを捨てて、一からやり直すのも悪くないかもしれないな」

ビシャードは、今度は自分の意思でしっかりと歩みを進めた。目の前に差し出された手を強く握る。

「どこに行くのか知らぬが、宜しく頼むぞ死神」

ジュリアンは笑った。

「だから、私は死神ではありません。もっとも、疫病神かもしれませんけどね――」

そう言って白い歯を見せるジュリアンの顔は、ビシャードの脳裏にいつまでも鮮やかに焼き付いていた。

ビシャードのトラウマ　8（後書き）

いつも読んでくださってありがとうございます。
今回でビシャードの回想も終わりです。
それでは、また。

ビシャードのトラウマ　9

耳が痛くなるほど静かな廊下。
ビシャードはそこで、いつの間にか立ち止まっていたらしい。足元には、相変わらず愛らしい姿の聖獣を象った置物が転がっていた。
暫しの白昼夢から醒めた後、彼の胸には苦い思いだけが広がっていた。過去の出来事を思い出すたびに、愚かな自分が浮彫りになるようだ。

「あの男に付いて行った結果が、この有り様か」

自分の人生から逃げた先でビシャードを待っていたのは、本当の孤独だった。
鏡をくぐり抜けた途端、ビシャードは視力と聴力、そして言葉を失った。自分がどこにいるのか、どんな状態なのかも分からずに、助けを求めてただ彷徨っていた日々を思い出す。
並外れた嗅覚を頼りに、人の気配を探って近付いてみたが、そのたびに冷水を浴びせられる始末。
惨めで孤独だった。いつ終わるとも無いそんな生活は、もう何も失うものは無いと思っていたビシャードから、たった一つだけ残っていた人としての誇りを根刮ぎ奪っていったのだった。

そんな中で出会った甘い香りのする少女。手を伸ばしてすがり付いたその体は、柔らかな弾力でビシャードを癒してくれた。震えながらも優しく撫でてくれたあの手の感触は彼にとってただ一つの光だった。
その柔らかな手に出会ってから、ビシャードは必至に彼女を探していた。

「ミナカミ。やっと見付けた余の光――。そなたには、ただ側に居て欲しかった」

ビシャードは徐々に重たくなってくる足を引きずりながら、また歩き始めた。まるで見えない砂袋を足に括りつけているような重さだ。

ビシャードは視界にも違和感を感じて、目を細めて廊下の前方を見据えた。廊下の先がまるで見えなかった。虫に食われたかのように、黒い斑点模様が幾つも出来ていた、だんだんとそれが広がっている。

「あぁ、遂に目も使い物にならなくなったか」

ビシャードは目を閉じる。やがてまた目が見えなくなるのだろうか。そんな恐怖にも似た思いが頭をよぎったが、それでも彼は歩みだけは止めなかった。

まだ耳は聞こえている。まだ若干の猶予は残されているのだと思って、ビシャードは手探りで歩みを進めた。

「せめて、最後は自分の意思で終わりたい――」

いつしか、彼の足元にはドロリと粘ついた液体が滴り落ちていた。それが、ビシャードが歩く度にナメクジが這った後のようにぬらぬらと光る道を作っていた。

「此処は、一体何処なの」

麻奈は肩で息をしながら、周りを見渡した。ビシャードを追ってはみたものの、彼がどっちに行ったか検討も付かなかった。

誰かに聞いてみようにも、誰も麻奈の事が見えていないので話しかけてもみんな素通りしてしまう。困り果てて、直感お頼りに走り回ってはみたものの、そんなに都合良く麻奈の勘は働かないらしい。その結果、麻奈はただ迷子になっただけだった。

どこまで行っても代わり映えのしない光景に疲れ果て、ついついその場にへたり込んだ。

「誰か、過去じゃない今のビシャード陛下見ませんでしたかっ」

返事など初めから期待しない、完全な独り言だった。しかし――

「見たよ」

実にあっさりした返事が後ろから聞こえてきて、麻奈は飛びあがるほど驚いた。振り向くと、少女が一人立っている。

柔らかな栗色の巻き毛に、鼻に散ったそばかす。くるくると良く動く鳶色の瞳が可愛らしい少女だった。きっと小学校高学年ぐらいといった年頃だろう。

「あたし見たよ」

少女は何でもないことのように麻奈を見上げているが、麻奈は口を開けたまま返事を返す事が出来なかった。この場所で、麻奈のことが見える人がいるなどとは思ってもいなかったのだ。

よく見ると少女はこの国の服とは異なる服装をしていた。白いブラウスのような前合わせの上着に、膝上丈のふんわりとしたスカート。どちらかと言えば麻奈の世界の服に近いように思う。

しかし、麻奈は眉を寄せた。彼女の服がとても汚れているのだ。あちこち破れたり、乾いた泥のような汚れがたくさんこびり付いている。さっきまで泥遊びでもしていたような格好の小女は小さく後ろで手を組んで、真っ直ぐに麻奈を見つめている。麻奈の頭にもしかして、という言葉が閃いた。

「あ、あなたも此処に迷い込んじゃったの」

「はぁ？　迷子はあなたの方でしょう」

少女は可愛らしい鼻をつんと上向きに反らせながら、小馬鹿にしたような眼差しを麻奈に向けた。

可愛くない。一瞬喉まで出かかったその言葉を、麻奈は何とか飲み込んだ。この生意気な感じは誰かを思い起こさせる。

「ねぇ、そんなアホみたいな顔しないでよ。それより、人を探してるんでしょ？　私見たよ」

「本当っ。それどこで見たの？　どっちに行ったの？　本当に陛下だった？」

「頭悪い質問しないでよ、鬱陶しいなぁ。灰緑色の癖毛で痩せた人でしょう。さっきあそこに向かって行くのを見たわ」

少女のほっそりした指が窓を示した。その先には赤いドーム状の建物が見える。

丘のような小高い緑の庭に、突如そびえる巨大な建物。それは夕日を背負って、暗く物悲しい陰をべっとりと張り付かせていた。

麻奈は窓から身を乗り出して、外を眺めた。もしかしたら、まだビシャードがその辺りにいるかもしれない。

「急いだ方がいいよ。彼、また戻りかけてる」

「どういう事」

麻奈の質問を全く無視して、少女は廊下を指差した。

「こっちの廊下を行くと、その突き当たりに階段があるわ。そこから下の階に行ける。外に出たら、後はあの巨大な建物目指して行けばいいよ。すごく簡単だわ、馬鹿でも行ける」

いちいち釈に触る言い方に麻奈は少しムッとする。

少女はそんな事は気にも止めずに、麻奈に示した道とは別の方向へすたすたと歩き出していた。別れの言葉も何もない。その素っ気無い小さな背中に、麻奈は慌てて声をかけた。

「ちょっと待ってよ、あなたどこ行くの」

少女は面倒くさそうな顔をして振り返えった。小さくため息を吐いている様子が、何とも生意気で可愛らしい。

「早く行って。彼、もう殆んど変わってしまってるんだから」

それだけ言うと、少女はまた背を向けて歩き出した。

麻奈は何となく、それ以上彼女を呼び止め辛くなってしまい、仕方なく少女の背中を見送っていた。すると少女の輪郭がうっすらと

白くなり、まるで辺りに溶けるように消えてしまった。
その光景を見ていた麻奈は、再びあんぐりと口を開いたまま、驚きのあまり幾度も瞬きを繰り返した。しかし、いくら目を凝らしてみてもそこには少女の影すら見付からない。

「今のって」

時間差で這上がって来た悪寒に、麻奈はぶるぶると震えた。まさかと思うけれど、それしか思い当たらない。

「幽霊」

口に出してしまってから麻奈は非常に後悔した。これではまるで幽霊の存在を認めてしまったかのようだ。麻奈は霊現象断固否定派だった。
更に背中を駆け巡る悪寒を払い除けるため、少女に教えられた道へと走りだす。
後回し、先送り、良く分らないことはそれに限る。廃校に来てから、麻奈は受け流すのがずいぶんと上手くなったような気がしていた。

「見てない、見てない！　私何にも見てないもん！」

ビシャードのトラウマ　9（後書き）

いつも読んでくださってありがとうございます。
活動報告に小話を上げさせてもらいました。お時間があれば、どうぞ寄っていってください。それでは、また。

ビシャードのトラウマ　１０（前書き）

この話には残酷な表現が含まれています。ご注意ください。

ビシャードのトラウマ　１０

麻奈は教えられた階段を一目散に駆け降りて、天井の高い廊下を見つけた。これが赤いドームがある庭へと続く廊下だろう。

廊下の両端には、なぜか可愛らしい動物の置物が一定の間隔で並べられているのが目についた。　麻奈はつい好奇心から、その小さな置物を手に取ってみる。

「コアラ？　何でこんな所にこんなにたくさん」

大きな鼻につぶらな瞳。陶器で出来ているような硬い感触の置物だがそれはコアラそっくりに見えた。置物をそっと元に戻して、麻奈はコアラもどきが居並ぶ可愛らしい廊下を進んだ。　ふと、一匹のコアラもどきがうつ伏せに倒れているのを見付けて側にしゃがみ込む。

「可愛そうに。誰がやったんだろ」

苦しそうに倒れている置物を台座に立たせてやり、麻奈はコアラもどきの頭をよしよしと撫でた。麻奈は知らない。この国では、この置物は手を触れることも躊躇ってしまうほどの神聖な獣なのだと。

「これで良し。それにしても可愛いなぁこれ、一匹もらって帰りたいな」

麻奈は両脇に並ぶ置物を眺めながら歩く。一匹一匹、表情や仕草が違うようで見ているだけでも面白い。此処をビシャードも通ったのだろうかと考えながら、麻奈は廊下の突き当たりの扉の前まで歩いた。

ビシャードを傷つけるつもりはなかったのだと、彼にきちんと謝罪ができたら、この可愛らしい置物の事について聞いてみたいと思った。しかし、全身で麻奈を拒絶したビシャードを思うと、麻奈はまた涙が出てきそうになる。

暗い気持ちを追い払うように、麻奈は目の前の巨大な扉に手をかけようとして、はっと息を飲んだ。

扉が濡れている。扉の取っ手には粘着性の雫が滴っていて、良く見ると床にも水溜りが出来ていた。まるで何か濡れた物を引きずっていったような跡が扉の外へと続いているのを見て、麻奈の気持ちはざわついた。とても嫌な予感がする。

あの名前も知らぬ少女は何と言っていただろう。戻りかけている。確かそう言っていたのではないか。

粘つく床の汚れを見ながら、嫌な予感はほぼ確信に変わっていた。

麻奈はほとんど体当たりするように扉を抜けると、ドーム状の建物目がけて全力で走りだした。あの粘つく水溜りには覚えがある。ほんのりピンク色をしたそれは――。麻奈はこれ以上考えたくなかった。

黄昏の中をひたすら走った。すぐに息切れしてしまい、スピードは見る間に落ちていったが、出せる力の全てで走り続けた。

麻奈が建物の入り口に辿り着いた頃には、太陽はとっくに沈んでいて、ひんやりとした風が辺りの草花を揺らしていた。

渇いて張り付いてしまった喉で何とか唾液を飲み下し、少しだけ息を整えてからドームの扉を開けて中を覗いた。中は暗い。熱も光も、太陽と共に地平線の向こうへ去ってしまったようだ。

「陛下！　中にいますかっ」

恐る恐る中へと足を踏み入れる。頼りなく響く足音を聞きながら、麻奈はビシャードを探した。だんだんと暗闇に目が慣れてくると、中の様子が見えてくる。

だだっぴろい部屋の奥に低い階段があり、その上に鎮座するように巨大な丸い形の鏡が置かれている。麻奈には、祭壇に大きな鏡を祀っているように見えた。その背後の壁にはステンドグラスのような色とりどりの窓ガラスがはめ込まれていて、光が当たったらさぞかし綺麗なのだろうと思った。

綺麗で厳かな空間だが、麻奈の目は祭壇の鏡に向けられていた。それを見た瞬間、麻奈は神社を思い出した。神社に祀られている御神体は大抵鏡が多い。故郷との以外な共通点を見つけて、麻奈は不思議な心地でそれを眺めた。

その時、静かな部屋に微かな息遣いのような音が響いた。

「陛下ですか」

麻奈は中央に描かれた道のような線をゆっくりと歩いた。祭壇以外にはほとんど何もない部屋だ。隠れているとしたら、場所は一つしかない。

「陛下」

思ったとおり、祭壇の陰に隠れるようにしてうずくまる人影を見付けた。否(いや)、それはもはや人影とは言えなかった。

「そんな、また戻ってる……」

麻奈の呟きは、高い天井に吸い込まれていった。祭壇の裏側で、

ふるふると冗談のように揺れているのは、ピンク色の巨大な塊だった。一歩間違えば美味しそうにすら見えるそれは、間違いなくあのビシャードなのだ。麻奈は驚きと緊張のあまり、止めてしまっていた呼吸を意識して繰り返した。

前にビシャードが言った言葉を思い出す。耳も聞こえず、目も見えない。声をかけても返事がないのは当然だった。

それにしても、先ほどからビシャードは小刻にプルプルと揺れているのが麻奈には気にかかる。

「陛下、どうかしましたか」

何となく彼が背中を向けているような気がして、小さく震える肩越しにそっと覗き込んでみた。

「っひ」

喉の奥から引き攣れたような息が漏れた。

ビシャードの触手のようになってしまった腕には、小ぶりのナイフが握りられていて、彼はそれを自分の腹の辺りに突き刺していた。何度も何度も。その度にビシャードの体は小刻に震え、ふるふるとゼリー状の体も揺れるのだった。突き刺した腹からナイフを抜くと、ドロリとした粘液がどっと溢れ出す。

「だ、駄目……やめて。やめて下さい！」

麻奈は夢中でビシャードのナイフを取り上げようと飛び付いた。しかし、彼の手はぬるぬると滑ってなかなかナイフを取り上げられない。

「陛下、離して！　手を離して下さいってば」

ビシャードと揉合ううちに、麻奈はまた頭から足元まで粘液にまみれてしまった。

いつか、廃校でビシャードに抱えられた時よりも粘液の量が多いような気がする。もしかすると、これはビシャードの血液なのかもしれないと思い、麻奈は心臓が痛いほど激しく跳ね上がった。

「駄目、陛下！　早くそれを離してください」

ビシャードはナイフを握り絞めたまま、麻奈を引きずりながら尚も自らの腹にそれを押し込もうとする。麻奈は夢中でビシャードのぬめる腕に噛みついた。グッという呻き声を漏らして、やっとナイフが床に落ちる。

「何で！　何でこんな酷い事するんですかっ」

麻奈は泣きながらビシャードにしがみついていた。ビシャードの腹部の傷を手で押さえるが、ピンク色の粘液はとめどなく溢れてくる。

「どうしよう。どうしたらいいの？　このままじゃ――」

麻奈はビシャードにしがみつく事しか出来ない。涙が溢れてもう前が見えなかった。ビシャードの体液で上着が温かく濡れていくのを感じながら、麻奈は無力な自分に歯噛みしていた。

「陛下、死んじゃ駄目ですよ。私……私、貴方に謝りに来たんです。怖がってごめんなさいって。もう、平気だから一緒に帰りましょうって」

後はもう声にならなかった。麻奈はビシャードのぶよぶよした体に手を回して、ゆっくりと撫でた。ビシャードの腕がそれに答えるように、震えながら麻奈に巻き付く。背中をのろのろと擦るビシャードの腕が嬉しかった。

「許してくれるんですか」

この拙く背中を撫でる手を失うのかと思うと、麻奈はやりきれない気持ちになる。

「陛下。陛下ぁ……。もっと貴方と話をしておけば良かった。そうしたら、貴方の事を少しでも分かる事が出来たかもしれないのに」

ビシャードには届いていないかもしれないが、麻奈は話し続ける。そして、なるべく彼の体を優しく撫で続けた。自分のせいだ。麻奈の心の中はその思いで溢れていた。きっと自分が彼を突き放したせいで最後の一歩を踏み出させたのだ。

「死なないで下さい。貴方と――もっと友達みたくなりたいんです」

麻奈は粘つくビシャードの胸に頬を寄せた。

トクトクトク……。

早いリズムで彼の心臓の鼓動が聞こえる。まだ動いているのに――。そう思ってから、麻奈は勢い良く顔を上げた。

「まだ助かるかもしれない」

素早くビシャードの腕の中から抜け出すと、彼の手を掴んで力一杯引っ張った。

「陛下来て下さい。廃校に戻れば、肉体の時間が戻るんです。この傷も無かった事になるかもしれない」

麻奈はビシャードの腕をなおも引っ張るが、彼のぬるぬるした手は直ぐにすっぽ抜けてしまう。

「立って。出口はきっと鏡なんです。あの大きな鏡まで行けば助かるかもしれない」

引いて駄目ならと、麻奈はビシャードの後ろに回ってその体を押してみた。柔らかいビシャードの体に手がめり込んでいく。そして、その重たい体がゆっくりと動き始めた。

「陛下も歩いて下さい。私一人じゃ、階段は無理です」

ビシャードは押されるまま動こうとしない。彼には麻奈の言葉は届かないのだろう。それでも、麻奈は必死に話しかけながらビシャードを押した。耳が聞こえなくても、何かが届くかもしれない。

「陛下お願いします。貴方を死なせたくないの」

ビシャードは動かない。

「お願いだから動いてよぉ！」

麻奈の必死の叫びが聞こえたのかいないのか、ビシャードは自ら階段を昇り始めた。どうやら、麻奈の意思だけは伝わったようだ。麻奈はほっと息を吐いて、その背中を押し続けた。少しでも彼の歩みを助けたいと思った。

階段をたった数段昇るだけの道のりが、今の二人には果てしなく遠く感じられる。

やっと鏡の前に辿り着いた頃には、麻奈はゼィゼイと肩で息をしていた。巨大な丸い鏡には、桃色の粘液でどろどろになった麻奈と、小刻みに震えている巨大なゼリーが映っている。

「行きましょう」

麻奈はビシャードの手を取った。

この鏡が出口だという確信は無い。宛てが外れてしまえばビシャードはこのまま死ぬだろう。麻奈は祈るような気持ちで鏡に向かって手をつきだした。

ビシャードのトラウマ　11

麻奈は勢い良く鏡に向かって手を突き出した。冷たい鏡面の感触が指先に伝わり、それが一気に肘まで登ってきた。ゆらゆらと波立つ鏡面に右腕が抵抗なく入っていく。

「やった」

麻奈はビシャードの手を引いて、ゆっくりと冷たい鏡の中へと入っていった。　恐らく傷が痛むのだろう、ビシャードの歩みはとても遅く、時々立ち止まってしまう。麻奈は彼を支えながら、その歩調に合わせて慎重に鏡を潜り抜けた。

「此処を通れば大丈夫ですよ」

願うようにそう呟いてみたが、その願いは簡単には叶いそうになかった。

鏡の中は薄暗く、どちらに進めばいいのかまるで分らない。早く廃校に戻りたいのに、進む道を完全に見失ってしまったのだ。

麻奈は焦った。ビシャードは、あとどのくらいもつのだろうか。もしかしたら、もう――。そんな不吉な想像ばかりが頭をよぎる。

薄闇の中をゆるゆると二人は進んでいく。以前追いかけられた巨大な発光体は今は見当たらない。その代わりのように、　遥か遠くの方に青っぽい光が遠慮がちに揺れているのが見えた。

麻奈は不思議な思いでそれを眺めた。なぜだろう、それを見ていると懐かしい色のような気がしてくる。

麻奈が一瞬足を止めたそのとき、ビシャードと繋いでいた手がぐ

っと引かれた。振り返ると、いつの間にかビシャードは人の形を取り戻していた。　麻奈は喜んだのも束の間、彼の様子を見て唇を噛み締めた。

　ビシャードの顔は精気のない土気色をしていた。おまけに服は血塗れで真っ赤に染まり、特に腹の辺りは血を吸って重たそうに垂れ下がっていた。ビシャードが歩くたびに、ポタリポタリと血が滴る音が聞こえてくる。

　麻奈は辛くなってそこから目を剃らした。彼には、もう僅かな時間しか残されていないように見える。こうして歩いていることがほとんど奇跡なのだと感じた。

　さっきまでのビシャードは、人間離れしていたせいで溢れ出る体液にもあまり実感が無かった。しかし赤い血を見てしまった途端、麻奈は生理的に込みあげてくるものがある。死は彼のほんの鼻先まで近付いているのだ。ビシャードは膝に力が入らないらしく、崩れ落ちそうになるのを懸命に我慢していた。

　この人を死なせたくない。そう思って、　麻奈は竦む足を賢明に奮い起たせ、ビシャードの脇の下に頭を滑り込ませて彼を支えた。

「大丈夫ですか。私に掴まって下さい」

「なぜ止めた」

　自殺の事を言っているのだろうかと思い、麻奈はじっとビシャードを見上げた。彼は今にも泣き出しそうな顔をしている。そういう表情をすると、更に目尻が下がってますます頼りない印象になる。そんなビシャードを見ると、麻奈も泣いてしまいそうだ。

「ごめんなさい」

「どうして楽にさせてくれない」

「ごめんなさい」

ビシャードの口から空気が漏れるような音がした。

「……もう、余に触れても平気なのか」

涙が麻奈の頬を伝っていた。あのとき、密かにビシャードの手を離そうとしていたことを彼は知っていたのだ。ビシャードに触れていたくないという麻奈の気持ちまで、彼はちゃんと見透かしていたのだった。

「平気です」

麻奈はビシャードの赤く濡れた脇腹に頬を寄せた。冷たい感触が頬に伝わる。

ビシャードは長いため息を一つ吐くと、目を閉じた。

「そうか」

ビシャードの顎がこつんと麻奈の頭に触れる。彼の声はほんの小さな呟きだったが、麻奈はその答えだけで胸が熱くなった。麻奈はこのとき、本当にビシャードと向き合えた気がしていた。

「もし嫌じゃなければ、今度陛下の国の話をもっと聞かせてください」

麻奈が顔を上げると、ビシャードの体がぐらりと斜めに傾いた。麻奈は咄嗟に彼を支えるが、その重さに耐えかねて一緒に地面に倒

れこんでしまう。

「陛下っ」

ビシャードは目を閉じたまま動かない。浅い呼吸を繰り返していたはずの口から、ごぼりと血が溢れてビシャードの細い顎を伝っていった。

「駄目――駄目です陛下」

ビシャードの腕を取って、麻奈は必死に彼を立たせようとした。このまま此処にいたら死んでしまう。歩かなければ。麻奈の頭の中にはそれしか浮かばなかった。

「戻らなきゃ。絶対、戻らなくちゃいけないのに……」

麻奈はビシャードの痩せこけた頬に触れてみた。柔らかいのに、とても冷たい。

涙が堰を切ったように溢れ出してくる。まるで良くできた人形のようなビシャードの姿が、たちまち滲んで見えなくなった。

まだ諦めては駄目だと思う反面、麻奈は虚脱感に囚われてしまい、その場にしゃがみ込んで動けなくなっていた。もう、立ち上がる気力すら残ってはいない。

涙で何も見えなくなった麻奈の目に、眩しい光が一筋差し込んできた。ゆるゆると顔を上げると、その光は四角い形になって目の前をふんわりと漂っている。

「なんだろう」

近付いてみると、巨大な四角い光の中に見知った人影が見える。麻奈の顔が輝いた。

「ジュリアン、ユエ」

四角く切り取られた光の中で、二人は口を動かしながら鏡を叩いている。声は聞こえないが、麻奈は懐かしい顔を見て涙を拭った。

麻奈はビシャードの両腕を持ち上げると、強い光を放つ鏡まで引きずって行った。さっきまでの無力感はどこかに消えうせていた。麻奈は自分を叱りたくなった。なぜ諦めようとしてしまったのだろうか。彼の命を救えるのは、この場では自分しかいなかったのに。

麻奈は重たいビシャードの体を引きずりながら、懸命に歩いた。思うように進まないのがとてももどかしい。

痩せていてもビシャードは長身な成人男性だ。麻奈は渾身の力でビシャードを引っ張りながら、鏡に背中から身を浸した。すっかり馴染みになった冷たい感触を背中に感じて、麻奈は達成感のため息と共に目を閉じた。

ビシャードの命が間に合えばいい。ただそれだけが心配だった。

芽生えた気持ち　1

鏡を潜り抜ける冷たい感触が、麻奈の体を通り過ぎていく。目を開けると、麻奈は寂れた色合いの踊場に降り立っていた。

やっと戻ってきた。麻奈はジュリアンとユエの顔を見た途端、膝から床に崩れ落ちていた。安堵と不安で震える手をジュリアンへと伸ばしたが、その手にはビシャードの血がべったりと付いているのが見えた。麻奈の心臓はまたぎゅっと苦しくなった。

「ジュリアン……」

「分かっています」

麻奈の言葉を手で制して、ジュリアンが頷いた。彼の目は、ユエによって床に下ろされたビシャードに注がれている。

「何があったのか私たちにも分かっています。この鏡に全て映っていました。恐らくビシャードの傷は内蔵まで達しているのでしょう。応急手当てをしようにも、此処には絆創膏程度の物しかありません」

「そんな。じゃあ、せめて痛み止めを――」

「焼け石に水です」

「まだ息はあるぞ」

ユエはビシャードの傷の具合を確かめていた。幾重にも重なる衣服を捲くり上げて、赤く染まった腹を露にする。その途端、ユエの顔が急に強張った。そしてゆっくりと首を横に振る。

「駄目だ。この傷じゃあ、まず助からない」

麻奈は唇を噛み締めた。

「それでも、薬があれば少し楽になるかもしれない。私取って来る」

そう言うなり、麻奈は階段を駆け上がって行った。

「私の寝室の、ローテーブルの上にあります」

ジュリアンの声が背中に当たる。麻奈は真っ直ぐジュリアンの部屋へと向かった。

以前、彼の部屋で塗ってもらった痛み止めの薬を思い出した。あれは塗るタイプの物だったが、今のビシャードにも使える痛み止めがあるだろうかと、ふと思う。

麻奈は三階のジュリアンの部屋に入ると、真っ直ぐに隣の部屋の扉を開けた。

「見たこと無いけど、確かこっちが寝室のは……ず」

部屋の中を見て、麻奈は絶句してしまった。確にそこは寝室だった。大きなベッドも、ジュリアンの言っていたローテーブルもある。ただし、それらは全て焼け焦げて真っ黒い煤色をしていた。

「これって、火事」

部屋の真ん中にある大きなベッドも、炎に巻かれたまま放って置かれたのだろう。ベッドマットのスプリングがむき出しになってい

て、ベッドのフレームも溶けてしまっている。歪んで傾いているベッドは、真っ黒い部屋の中で一際不気味な存在感を放っていた。
そんな部屋の中で、新品同様に白く光る救急箱はまるで異質な物のようだ。麻奈は恐る恐る部屋の中を歩いていく。
火災の熱のせいで割れてしまっている窓からは、針山のような電信柱の大群が見える。いつもは不吉に見える黄昏の風景も、ここよりはいくらかましなような気がした。

「ジュリアンって、こんな所で寝てるの」

麻奈は気味が悪くなって、救急箱を掴むと一目散に部屋を飛び出した。気になることは色々あるが、今はビシャードの方が先だった。
麻奈は、来た道を戻りながら、ジュリアンの部屋について詮索するのは後にしようと思った。

麻奈は自分にしては素晴らしく早いスピードで、みんなの待つ螺旋階段へと急いだ。
麻奈が階段を降りていくと、何やら階下が騒がしい。怒鳴るような激しい声が聞こえてきて、麻奈は踊り場を覗き込んでみた。ビシャードが立ち上がって、ジュリアンと揉み合っている様子が見える。さっきまでその場にいたはずのユエの姿は既に消えていた。
良く見ると、揉み合っていると言うよりは、ビシャードが一方的にジュリアンに詰め寄っているように見える。

「大変っ」

麻奈は青ざめた。瀕死の状態のビシャードが立ち上がったりしては、本当に死んでしまう。

「ジュリアン、一体どうしたの」

麻奈が慌てて声を掛けると、ジュリアンは困り顔で僅かに肩を上げた。

「あぁ、おかえりなさい。どうしたも何も――」

「黙れ、お前のせいで余がどんな思いをしたかっ」

ビシャードが血まみれの手でジュリアンの胸ぐらを掴んだ。　長身なビシャードがジュリアンを威圧するように見下ろしている。それを見て麻奈は今度こそ真っ青になった。

「陛下、そんなに動いたら傷に障ります」

「止めるな」

「いいえ。陛下は酷い怪我をしてるんですよ」

麻奈はジュリアンとビシャードの間に無理矢理割って入った。

「安静にしていないと、本当に死んじゃいますっ」

涙目になりながら、麻奈は必死にビシャードの袖に縋り付いた。ビシャードはそんな麻奈を見て、ジュリアンの胸ぐらをしぶしぶ離した。

「彼の傷は今しがた治りましたよ」

ジュリアンは苦笑しながら、自由になった襟元を正した。血が付いてしまったのが気になるのだろう。しきりに擦ってはため息を吐

いている。

「本当？　本当に治ったんですか」

麻奈はビシャードをまじまじと見つめる。彼の服は相変わらず真っ赤に染まっていたが、良く見ると痩せこけた頬にいくらか赤みが戻っていた。少しだけ顔色が良くなったようだ。

目に涙を一杯貯めている麻奈に見上げられて、ビシャードは表情を弛めて頷いた。

「もう大事無い。ミナカミには心配をかけたな」

ビシャードは安心させるように、麻奈の肩にぽんと手を乗せた。その途端、麻奈の肩の力がすっと抜けていった。今まで不安と緊張で張り詰めていた気持ちが、やっと全てほぐれていくようだ。

「良かった」

麻奈はビシャードの袖を握り締めたまま、彼の薄い胸に額を寄せた。ビシャードが小さく身じろぎするのが分った。

ビシャードが動いて、しゃべっている。麻奈はそれだけで嬉しかった。

「ミナカミ……」

ビシャードは、自分にぴたりとくっついている麻奈に手を伸ばした。どうするつもりもない、彼はただ麻奈に触れたいと思ったのだ。そのまま両手で引き寄せようとしたが、ビシャードが触れるよりも早く、ジュリアンが麻奈を自分の元へと引っ張った。

突然後ろに引かれて怪訝そうな顔をしながらも、麻奈はおとなし

くジュリアンの腕に従った。どこからともなく小さな舌打ちの音が上がった。

麻奈はだんだんと間隔の狭くなっていくビシャードの不機嫌な眉間を見ていた。そこには幾筋もの皺が寄っていて、このままではいつか眉毛が繋がってしまうのではないかと心配になるほどだった。

そんな顔でじっと見られていると、麻奈は訳も分らずに不安な気持ちになってしまう。一体どうして彼はこんなに不機嫌になってしまったのだろう。喧嘩を仲裁したことがまずかったのかと、麻奈は心の中でこっそり考えた。

「ところで、二人には聞いておきたい事があるんですが」

「死神に話す事などない」

ビシャードはジュリアンに噛み付くような勢いで、ぴしゃりと言い放つ。

怒りを露にしたビシャードの恫喝に、麻奈は体を震わせた。怒気を含んだ男性の声は、自分に向けられていなくても恐ろしく感じてしまう。

ジュリアンは小さく息を吐いた。

「ビシャード、もう少し冷静になって下さい。貴方は勘違いをしているんですよ。貴方を此処に連れて来たのは確かに私ですが、あんな姿にしたのは私ではありません。それに、大きな声を出すのはやめてください。麻奈が怖がっています」

ジュリアンはやれやれと大仰に肩をすくめてみせると、麻奈の肩を抱くようにして自分の元へ引き寄せた。そして怯える子供をあやすように、縮こまっている麻奈の肩をトントンと叩いた。

それを見て、ビシャードの顔色が目に見えて変わった。彼にとってその仕草は、とてもとても特別なものだった。

「彼女に触れるな」

ビシャードは、ジュリアンからもぎ取るようにして麻奈の手を引くと、その細い体で包むように後ろに隠した。誰にも見せない、触れさせたくない。ビシャードの瞳はそう告げていた。

そんな彼の行動は、お気に入りのぬいぐるみを取られまいとする幼い子供のようだ。

過剰な反応を示すビシャードに驚いて、麻奈は彼の顔を下からのぞき見た。ビシャードの泣き出しそうな顔に気が付いた麻奈は、慌ててごしごしと彼の目元を擦った。王様がこんなに容易く涙を零すのはまずいのではないかと思う反面、そんなビシャードを見ると放っておけなくなってしまう。

「どうしたんですか、陛下」

「ミナカミは余を厭わしく思うのか」

ビシャードはほとんど消え入りそうな声でそう言うと、堪えられなくなったように下を向いてしまった。長い睫毛が伏せられて、そこから小さな雫が押し出される。麻奈はそっと彼の頬に伝う涙を拭った。彼はまるで、とても壊れやすいガラス細工のようだ。

「貴方を嫌ったりしませんよ。言ったじゃありませんか、私は陛下と友達になりたいんです」

「――そうか」

良かったと呟いて、ビシャードは胸に手を当てそのまま目を閉じた。何かを噛み締めるようなその表情は、さっきよりも穏やかになっていた。

「そろそろいいですか」

わざとらしい咳払いをひとつして、ジュリアンが二人の注意を集めた。

「先ず聞きたいのは、二人が鏡の中に入る直前のことです。麻奈には以前話したと思いますが、この鏡は常時中に入る事は出来ません。それが出来るのは、新しい住人を迎えに行く時だけでした」

麻奈とビシャードは顔を見合わせる。

「しかし、さっき貴方たちは鏡に入る事が出来た。それはなぜなのかを知りたいのです。鏡に入る時に、何か気が付いた事はありませんでしたか」

どんな小さな事でもいいです、とジュリアンは付け加える。

ビシャードは沈黙のまま首を振った。それは当然だと誰もが思う。彼はその時、視覚も聴覚も失っていたのだ。

「そう言えば」

少し遠慮がちに口を開いたのは麻奈だった。麻奈には、一つ不思議に思う事があった。

「あの時、突然大鏡が緑色に点滅した時、鏡に映った陛下が人の姿

をして泣いているように見えたの。その時、目の前にいた陛下はその……違う姿形をしていたのに。それを見て、この人は悪意を持って私を追い掛けてたんじゃないんだ、って気付いたの」

ジュリアンはふむ、と頷いて大鏡の表面に指を這わせた。彼の指輪が鏡にぶつかり、カチリと固い音を立てる。ジュリアンは鏡面をゆっくりと撫でたが、彼の指が鏡の中に沈む事はなかった。

「それは不思議ですね。私には普通の鏡に見えていました。では、鏡が光る前に何か気が付いた事はありませんか」

鏡越しにジュリアンは問掛けるが、二人はふるふると首を振った。ジュリアンはそうですか、とため息をついてから、名残惜しそうに鏡面を撫でてから手を離した。結局なぜ鏡に入ることが出来たのかは謎のままだ。

ジュリアンは残念そうに大きく息を吐き出した。

「仕方ない、これ以上此処にいても調べようがないですね。今はほら、この通りただの鏡に戻ってしまいました。今は一度解散しましょうか。みんな少々汚れていますし」

ジュリアンは上着の襟元を掴みながら肩をすくめる。　麻奈もビシャードも顔を合わせて頷いた。二人とも、もちろんその意見に異論はない。麻奈とビシャードは汚れているどころではないのだ。

実は、麻奈はさっきからシャワーを浴びたいのを必至に我慢していた。むせかえる血の臭いには慣れてしまったが、ベタベタと粘つく粘液が、顔と言わず髪と言わず全身に付いているのを我慢するのは相当辛いものがある。おまけに、ビシャードの返り血のお陰で麻奈の服も真っ赤に染まっていた。

それにしても、と麻奈は思う。ビシャードはこんなに出血していたのかと改めて確認して、麻奈はそっと身震いした。ビシャードがあのまま返らぬ人になっていたかもしれないと思うとゾッとする。

「それでは、詳しい話はまた後で。ビシャードはそうですねぇ、とりあえず私の部屋の浴室を貸しましょう」

「断る」

ジュリアンがビシャードに投げ掛けた言葉は、瞬時にして彼に突き返された。

「死神の招待など受けぬ。余はミナカミと共に行動することにしよう」

ジュリアンは困ったな、という顔で顎を撫でる。

「うーん……でも女性が風呂を使っている間、部屋で待っているだなんてハレンチだと思いませんか」

ぐっと言葉に詰まるビシャード。　麻奈としても、それはあまり歓迎出来ないなと密かに思った。その意を表すためにこくこくと頷くと、ビシャードは肩を落として残念そうにため息を吐いた。

「では、お前の部屋で世話になろう」

ジュリアンは、歓迎しますよ。と笑ったが、ビシャードはとても嫌そうな顔をしていた。

芽生えた気持ち　3

「それじゃあ、また後でね」

麻奈は手を降って二人と別れた。その足取りは、心なしか嬉しそうに跳ねているように見える。

「いつの時代も、女性は風呂が好きですね」

麻奈の後姿を見送って、　ジュリアンは呆れたように呟く。

「さて、麻奈も行ってしまった事ですし――私に言いたい事があるのでしょう。今なら遠慮無くどうぞ」

ジュリアンはビシャードに向き直ると、彼を正面から見据えて両腕を組んだ。対するビシャードは前屈みにジュリアンを見下ろして苦い顔をしている。

「聞きたい事がある」

ジュリアンは少しだけ身を反らせて、威圧するように顔を近づけてくるビシャードから距離を取った。血だらけの男に迫られるのはぞっとしないな、と心の中で密かに毒づいたが、そんなことは顔には出さずに、ジュリアンはにこやかに身振りだけで先を促した。

「此処は一体何だ」

「残念ながら、私にも良く分かりません」

困った顔で首を傾けてみせた。このとき、ジュリアンは決して顔には出さなかったが、内心ビシャードにとてもイラついていた。こうやって見下ろされているのは正直かなり気に入らなかった。

はぐらかされたような答えが返ってきたために、ビシャードの眉が不機嫌に寄った。納得いかないと顔に描いてある。分かりやすい男だ、とジュリアンは人好きする仮面の下でせせら笑った。

「本当に詳しい事は解らないんです。私はかなり長い間此処に居ますが、この場所について詳しい事はほとんど知りません。私も貴方と同じように、此処に連れて来られた身なんです」

ふんとビシャードは鼻を鳴らす。彼の鋭い眼差しは、明らかにジュリアンの言葉を信用してはいないようだ。

「そんな事よりも、なぜ元の姿に戻れたのかと聞かないんですか」

ジュリアンの頭一つ分高い位置から、ビシャードの剣呑な視線が降ってくる。

「お前に答えられるのか」

「私の推測で良ければ、ですが。そもそも、此処に呼ばれる人間にはどんな共通点があると思いますか」

さあな、とビシャードはそっけなく答える。内容がどうでもいいというよりも、ジュリアンと話をするのが嫌で堪らないらしい。

「私が知る限りでは、共通点は負の感情なんです。挫折感や後悔や絶望。そういったマイナスの感情を持っている者がこの場所に強く呼ばれる傾向があります」

「ネガティブな者ほど選ばれるのか。成程、余は適任だな」

再び鼻を鳴らして、ビシャードは血に染まってしまった服に手を当てた。

「そう、貴方は誰よりも強い負の感情を持っていた。だから此処に降り立った直後、いきなり姿が変わったのだと思います。体が変化していくスピードは感情に比例すると私は考えています」

「成程。お前も少なからず絶望や後悔をしているというわけか」

ビシャードはジュリアンの足を指差した。完全に消えた足先を見て彼は唇の端を持ち上げる。

「いい気味だ。余の苦しみの何分の一かでも味わうが良い」

そんなビシャードの様子を見ながら、ジュリアンは肩をすくめた。随分嫌われたものだ。しかし、ビシャードに嫌われようが好かれようが、別にどちらでも構わないと思い直した。

「此処にいる限り、体が変形する事は免れません。遅いか早いかの差異はありますが、例外は今までありませんでした。ただ一人を除いて――」

ジュリアンは、意味ありげにそう言うと、冴えざえと辺りの景色を映し出している大鏡に目をやった。この鏡を自在に使いこなすことが出来れば、此処から出ることも夢ではないはずだ。

ビシャードは睨みつけるように厳しい目を向けてくる。そんな視線を笑って受けながら、ジュリアンは自分の考えを目の前の男に話

す。

「そう、麻奈です。彼女は我われとどこかが違う」

「個人差があると、さっきお前が言ったではないか」

「それは進行度合いの話です。此処に少しでも留まれば、誰でも多少の影響を受けてしまいます。麻奈は此処に着いてからもう随分時間が経ちました。それは、体が既に変化し初めてもいいぐらいの時間です」

「変化していても、お前に話すとは限らないだろう」

「いいえ。彼女なら必ず私に相談するはずです」

ビシャードはその言葉にむっとした顔をする。

「ミナカミと、余が元の姿に戻れた原因と何の関係があるのだ」

「麻奈には、もしかすると特別な何かがあるのかもしれません。あの時貴方の中にある負の感情を、彼女が取り除いてくれたおかげで、貴方は元の姿に戻ることが出来た――そうは思いませんか」

ジュリアンは、トンとビシャードの胸に人指し指をつき立てた。

「今でも、死にたいと思っていますか」

ビシャードは眉を寄せた。彼は難しい問題を突きつけられたように口元をへの字に曲げている。そして視線を少しさ迷わせた後、ゆるゆると首を振った。

「いや、今はそうは思わない。余はミナカミともっと話をしたい。彼女ともっと一緒に時を過ごしたい」

ビシャードはゆっくりと、自らが出した答えを租借するように口に出した。

「今はもう、死にたいとは思っていない」

ジュリアンは、そうでしょう。と笑う。

「私の仮説が正しいのならば、麻奈はきっと……特別なんです」

ジュリアンの口元は自然と綻んでいた。脱出の糸口がはっきりと見えてきた。

ジュリアンは気の遠くなるような長い間、この場所でずっと過ごしていた。もう此処から出る事は叶わないのかもしれないと半諦めかけていたところに、麻奈という一陣の光が差し込んできたのだ。

ジュリアンは、感慨深そうに胸に手を当てているビシャードをちらりと見た。そして思う。もしも、この男を元の姿に戻したのが麻奈だったなら……。その時は、決して誰にも渡さない。彼女は自分のものだ。このいかれた場所から脱出する為の、俺だけのモノ……。

「さて、私達も体を洗いに行きましょうか」

返事を待たずにジュリアンが歩き始めると、後ろからビシャードが大人しく付いてくる足音が聞こえてくる。

ジュリアンはビシャードに見えないように、そっと拳を握りしめる。その胸の内には激しい独占欲がぐるぐると渦巻いていた。

リーズガルドは木工室の札がかけられている部屋の中で、薄く瞳を開けた。何も見えない。　自らカーテンを締めきっているせいで、彼の部屋には暗い闇が沈殿している。　しかし、彼はこの闇の中で一つの光景を見ていたのだった。ジュリアンとビシャードの二人の姿を。

今や彼の目は無数に存在している。蔦植物という新しい目を使う時には、本来の彼の目を封じていた方が、より鮮明に見る事が出来ると気が付いたのは、いつの頃だったか。

外の騒ぎを聞き付けたリーズガルドは、新しい目と耳を使って螺旋階段で何が起きたのかを全て把握していた。

「元の姿に戻った」

ジュリアンの後に付いて階段を上るビシャードの姿を見ても、彼にはとてもそのことが信じられなかった。

「元の姿に戻った奴なんて、初めてだ」

リーズガルドは、自分が震えている事に気が付いた。

「元に戻れる……オレも戻りたい。もうこんな体は嫌だ！　出来るなら今すぐにでも！」

もう随分前に諦めていたはずの思いが、もう一度沸き上がる。鏡に映る自分の姿を見るたびに、彼は目を逸らしてきた。こんな化け物じみた姿は耐えられないと、何度涙を流しただろう。

「でも、まだ駄目だ」

両手で顔を覆うと、いつの間にか流れていた涙でリーズガルドの掌は暖かく濡れた。

「アイツを此処から見付けだすまでは、今のままの方が都合がいい」

この姿を嫌悪しながらも、その恩恵にあやからなければ自分の望みは叶わないのだと彼は知っていた。それがリーズガルドを苦しめる。此処から早く出たいのに、今はまだ出たくない。

リーズガルドはまた目を閉じた。部屋には、カサカサという彼の葉の音だけがいつまでも響いていた。

まどろみと覚醒の間

心地好いまどろみから目を覚ましてみると、どうやらいつもと様子が違うことに気が付いた。一体何が違うのだろう。彼は目を閉じたまま、寝起きのどろどろした思考で考える。ゆっくりと、飴玉を転がすように……。

彼は違和感の正体に気が付いた。そう、飴玉だ。一番のお気に入りの味が無くなっている。いや、正確には飴玉自体はなくなってはいなかった。ただ、一番お気に入りの飴玉の味だけがすっかり抜け落ちてしまったのだ。

彼はがっかりして飴玉の数を数えた。一、二、三、四、五……。数はきちんと揃っている。これはどうした事だろう。彼はまだはっきりとしない頭で考える。自分が少しうとうととしている間に、一体何が起こったのだろうか。

彼はため息を吐きたいのを必死に我慢した。今口を開くのは非常にまずい。

こっちは飴玉が劣化しないように細心の注意を払い、色々な要望に応えて苦労しているというのに――。

新しい飴玉を手に入れてから、何だか様子がおかしいことに彼は気がついた。初めてそれを見つけたときには、とても美味しそうな良い匂いだったのに、口に入れてみると何の味も無くて酷くがっかりしたことを覚えている。

彼はゆっくりと目を開けた。まぁ、一つ失ったって別に構わない。お気に入りはたくさんあるのだから。まだまだ色々な味が楽しめる。

そう考えてから、彼はまどろみと覚醒の中間地点を、またゆらゆらと気持ち良く漂い始めた。

空に浮かぶもの　1

その異変に初めに気が付いたのは、サルーンだった。彼は日頃、ほとんど自室から出て来ることはない。他人にも、この場所にも、彼は一切興味が湧かないのだ。

サルーンは天井にぽっかりと開いている、穴という名の天窓から空を眺める事を日課にしていた。

そして彼はいつも思う。どうでもいい――。

此処で起こる全ての事や、自分自身の状態さえ今の彼にはどうでもいい事だった。　何を見ても何を聞いても、自分の過去を忘れる事は出来ないのだ。それならば、いっそ何もせずにどっぷりとこの罪悪感に浸っていよう。後悔の沼に敢えてはまろう。それが自分に出来る唯一の罪滅ぼしなのだと彼は考えていた。

サルーンの腹がきゅうと鳴った。そう言えば随分腹が空いていた。此処では何も食べなくても生きながらえることが出来るのに、生理的欲求からは解放されない。

サルーンは、前にスープの話をした少女の事を考えた。此処から絶対に脱出してみせる。と公言した黒い髪の少女。かなり一方的ではあったが、自分と交した約束を守るために今も彼女は出口を探しているのだろうか。

あの少女には、この夕日がどう見えているのだろう。サルーンはじっと紅い光を浴び続けた。あの日もこんな燃えるような紅い夕焼けだったことを思い出す。だからサルーンは、今日も空を見上げるのだ。

しかし、今日の空は何かがおかしい。サルーンは天窓を仰ぎ続けて、やっと違和感の正体を突き止めた。

「月が、出ている……」

鮮やかな茜色の空に、小さくて丸い月がぽっかりと浮かんでいた。

麻奈が鼻歌を歌いながら浴室の扉を開けると、白い湯煙が立ち上ってきた。入浴剤を片手に持って、弾む気持ちを抑えながらバスタブにさらさらと白い粉末を入れる。甘い花の香りと共に、たちまち乳白色に濁った湯が出来上がる。麻奈は、お湯を軽く掻き混ぜてから、湯船に体を滑り込ませた。

「ふぅ、最高」

興奮して張りつめていた気持ちは、心地よい湯にほぐされて弛緩していった。

風呂に入っている時間だけは、この奇妙な現実を忘れさせてくれる。　とろけるようなため息を吐いて、麻奈は手足を一杯に伸ばして寛いだ。

円形をした浴槽は、麻奈が足を伸ばしたぐらいでは淵に届かないほど広い。初めて入った時には、一人で使うには些か広すぎるのではないかと思ったくらいだ。

「まぁ、誰かと入る予定もないけどねぇ」

まさかこの時、もう一人この浴室に入ってこようとしている者がいることなど、麻奈は夢にも思っていなかった。鼻唄を歌いながらのんびり寛ぐ麻奈の背後で、浴室の扉がカチャリと小さく音を立てて開いた。

麻奈が僅かに流れてくる冷気を感じて振り返る。そこには、湯煙を纏わり付かせたユエが立っていた。

「え、ちょっと……何でっ」

本当に焦っていると、まともな言葉が出てこないのだと、麻奈はこの時初めて知った。自分が何を言っているのかよく分からないが、とにかく出来るだけユエの目に触れないように湯船の中で後ずさりした。

ユエは靴が濡れるのも気にせずに、どんどん湯船に近付いてくる。無意識に胸元を手で隠しながら、麻奈は顎まで湯につかった。そして、白濁していることに感謝した。入浴剤を入れておいて本当に良かった。

ユエはひと時、湯の中に視線を落としていたが、真剣な顔で湯船の淵にしゃがみこんだ。ユエの長い上着の裾が床に垂れて、ベチャリと濡れる。

「湯が白いな」

「――入浴剤を入れたから」

ユエは分っているのかいないのか、面白くもなさそうに白く濁る湯を見つめている。一向にそこから動かないユエに、麻奈は段々と

苛立ってきた。

「早く出て行ってよ。一体何考えて――」

「あれは、お前がやったのか」

いつの間にか、ユエは真っ直ぐに麻奈の瞳を見つめていた。低く真剣な声で迫る彼は、いつもと何かが違う。麻奈は、自分の体に冷たい電気が走ったような気持ちになった。慎重に答えなければいけないような気がするが、彼の質問の意味がまるで分からない。必然的にこう口にするしかなかった。

「何のこと」

舌打ちを一つするユエに、麻奈は恐ろしいものを感じた。

「とぼけるなよ。アイツを元の姿に戻したのはお前だろう」

「アイツって、ビシャード陛下のこと」

「名前はどうだっていい。お前がやったんだろう」

ユエは至極真面目な顔をしている。その冷たい表情はハッとするほど美しかった。

麻奈は首を横に振る。ユエが何を勘違いしているのかは知らないが、自分にはそんな大それた事など出来るわけがない。

「陛下が元に戻れたのは、あの鏡のおかげでしょう。私は、特に何もしていないもの」

ユエはザバリと水しぶきを上げながら、服のまま湯船に入って来た。麻奈は飛んでくる水滴を顔に受けながら悲鳴を上げた。

「ちょっと、何してるのっ」

ユエは水面を激しく波立たせながら麻奈に近付いて来る。麻奈の心にも、湯船の水面のような不穏な波が広がってゆく。自分の答えの何が気に入らなかったのだろうか。

ユエの黒い服は忽ちお湯を吸って重たくなったが、本人は特に気にする様子もなく湯船を真っ直ぐに横切って来る。

いつもとは違う、彼の余裕の無い表情が麻奈を一層不安にさせた。

空に浮かぶもの　2

ユエは水しぶきを上げながら、無造作に近付いてくる。麻奈は湯船から出るわけにもいかずに、浴槽の淵に精一杯背中を押し付けていた。これ以上は下がれない。おまけに、小さなタオルすら手元にない。

麻奈は絶望的な思いで目の前に立つユエを見上げた。彼は変わらぬ無表情で、麻奈を静かに見下ろしていた。

「俺には、お前がやったようにしか見えなかった」

さっきの返答では、やはり納得できなかったらしい。ユエはじっと麻奈を凝視している。欲しい答えを引き出すまで、彼はこうして静かなプレッシャーをかけ続けるのだろうか。麻奈は気が遠くなってきた。

何も答えない麻奈に業を煮やしたのか、ユエは目線を合わせるようにその場にしゃがみ込んだ。彼の上着の裾が海草のように湯船に広がる。

向かい合わせる形で座ったユエは、麻奈の喉にそっと指を這わせた。冷たい。麻奈は顔をしかめた。大きな手がゆっくりと自分の喉を包み込むように広がり、いきなり鷲?みにされた。

「どうやってあいつを元に戻したんだ。答えろ」

麻奈の背筋に悪感が走った。普段からユエは麻奈に何かと触れたがる、しかし今の彼が自分に触れているのは、いつもと違う理由なのだ。

ユエの手に、ゆっくりと力が入る。強い圧迫感とともに、気道が

じわじわと締めつけられていく。温かい湯の中にいるはずなのに、麻奈は体が冷たくなっていくのを感じた。

親しいとまでは言わないが、少し前までユエとは多少気安く接する事が出来ていたはずだった。それなのに、なぜこんな扱いを受けるのか。麻奈にはまるで分からない。

「ユ、エ……くる、し」

麻奈は危険を感じて、自分の首を締め上げているユエの腕を掻きむしった。ユエはそれでも麻奈を離さない。冷たい表情で少しずつ、少しずつ力を加えていく。

麻奈の頭がジンジンと鬱血してきた頃、ようやくユエが手を放した。麻奈はむせかえりながら息を吸い込む。涙が溢れて、激しく咳込みながらユエを見上げた。

すまなそうな表情など微塵もしていなかった。彼は自分の欲しい答えが手に入らなければ、麻奈を傷付ける事だって構わないようだ。

「ユエは、一体何が知りたいの。私は何も隠してない。心当たりがないから、私じゃないと言っただけ――」

麻奈は力の入らない声とは裏腹に、ユエを睨みながら喉に手を当てた。きっとそこは赤く指の後が付いていることだろう。それだけユエの力は強かった。

麻奈は震える声と体をユエに悟らせようないように努めたが、きっと無駄だろうと思った。麻奈が小刻みに震えるたびに、水面には小さな波紋が広がっていた。それでも、麻奈は精一杯の虚勢を張って彫刻のように動かないユエを睨みつける。

さっき麻奈が暴れた時に水しぶきを浴びたのだろう。彼の頬や髪はぐっしょりと濡れていた。

「ユエだって元の姿に戻りたいから、その方法を知りたいんでしょう」

前髪から滴り落ちる雫を払いもせずに、ユエは麻奈を見つめていた。このまま、本当に彫刻になってしまいそうだ。

麻奈は改めてユエを見つめた。前から気になっていたことだが、この男には他の住人のように奇妙なところは一つもない。

「でも、どこも変わってないように見えるけど――」

麻奈が疑問を吐き出さないうちに、顔の横から固い音が上がった。次いでパラパラと浴槽の欠片がお湯に落ちていく。何が起こったのか一瞬理解できなかった麻奈だったが、ユエの拳が浴槽の壁に突き刺さっているのを見てやっと理解した。

大理石で出来ている浴槽にクモの巣状のひびをいれた張本人は、血が滲む拳を引っ込めることもせずに、静かに麻奈を見下ろしていた。

「それ以上何も言うな」

ユエは更に一段低い声で麻奈の言葉を縛る。以前、彼にどこが変わったのか尋ねた時にも同じようなことがあったのを思いだした。

ユエの拳から滴る血が、白い湯にぱっと紅い花を咲かせて、すぐに沈んでいく。麻奈は震えながらそれを呆然と見ていた。怖い。血が、暴力が、ユエの美しくも冷たい表情が。今は彼の全てが恐ろしいと思った。

しかし、今回ばかりは麻奈も折れる気はない。

「暴力で黙らせようとしないで。ユエだって、元の姿に戻りたいん

でしょう。だったら私も力になるから、ちゃんと話をしよう」

震える声を懸命に絞り出して訴える。首を絞められたからこそ、こんな目に合わされる理由を聞かずにはいられない。きっと話せば分かり合えるはずだと麻奈は思っていた。

ところが、ユエは突然喉の奥でくつくつと笑い始めた。いつもの余裕たっぷりの笑いではない。それは、ねっとりとした卑屈な笑い方だった。

「何が、おかしいの」

螺子を巻きすぎた玩具のように笑い続けるユエを見て、麻奈はジュリアンの言葉を思い出した。

彼は初めに言っていたではないか。此処に住む者は正気ではないと。

「何か、勘違いをしているようだな」

やっと声を上げて笑うのを止めたユエは、唇に嫌な笑みを張り付けたまま、麻奈に向き直る。

「どういうこと」

「俺は一度でもお前に言ったか。元の姿に戻りたい、と」

麻奈は首を傾げた。言っていないかもしれない。

「でも、元の姿に戻らなくちゃ此処から出られないんだよ。ユエだって、自分の故郷に帰りたいでしょう」

ユエは笑みを深めた。それだけでユエの色気が匂い立つようで、麻奈は目眩がした。いつまでも、この男の前で無防備な姿を晒しているのは違う意味で危険な事を思い出した。

ユエは滑るように二人の距離を更に詰めると、血だらけの手で麻奈の顎を持ち上げた。ピタリと密着する体。ユエは満足そうに笑いながら、楽しそうに話す。

「逆だよ、逆。俺は此処から本当に出たいなんて思ってねぇよ」

「どうして」

「分かるだろう。俺は今の姿が気に入ってるのさ」

血が滴る指が麻奈の顎をくいと上向かせる。麻奈の恐怖で潤んだ瞳を覗き込んで、ユエは満足そうなため息を一つ落とした。

「俺はそれなりにこの場所が気に入ってるのさ。このままで、年も取らずにいられるのならそれも悪くない。今までは男ばかりで死ぬほどつまらなかったが、今はお前がいる。やっと女が現れて楽しくなってきたところだったのを……。全く余計な事をしやがって」

ユエは空いている方の手で、鬱陶しそうに髪をかきあげた。

「俺はお前と此処で楽しくやれたらそれでいいんだよ」

ユエは暗い笑みをその口許に張り付かせる。

「だから、お前を此処から出す気はねぇよ」

宝石のようなユエのアイスブルーの瞳が、今は欲望と狂気で濁っ

ているように見える。

「あの鏡には今後一切近付くなよ。でなけりゃ――」

麻奈の耳に三日月型の唇を寄せると、ユエはひっそりと囁いた。

「どうなるか、分かるな」

たっぷりと麻奈に恐怖を植え付けてから、ユエは手を離した。麻奈の怯えた視線を受け止めて、彼は水しぶきをあげて立ち上がった。

「良い子だから、おとなしくしてろ」

さっきの麻奈の反応で、本当に何も知らないのだと分かったのだろう。ユエはいつもの余裕たっぷりの流し目を送ると、水に濡れた服をひきずりながら浴室を出て行った。

麻奈はそれをぼんやりと見送りながら、彼と一緒に浴槽の熱もどこかへ行ってしまったように感じていた。心地良かったはずの湯は、もう湯煙も立ち昇らなくなっていた。

すっかり生温くなってしまった湯の中で、麻奈はいつまでも動く事が出来ずにいた。

空に浮かぶもの　3

麻奈はすっかり冷えてしまった体に、乾きたての服を身に付けた。乾燥機のお陰で、ほんのりと暖かい洋服に袖を通すと、少しだけ気分が落ち着いたような気がする。

床の水溜まりを避けながら、麻奈はふらふらとバスルームから出た。床を水浸しにした張本人は、今は一体どこで何をしているのだろうか。

麻奈はぼんやりと、ユエが体を張って自分を助けてくれた時の事を思い出していた。まだビシャードがゼリー状だった頃、麻奈を求めて追い掛けて来る彼から、ユエが身を呈して逃がしてくれたときのことだった。あの時は驚いた反面、ユエの行動がとてもうれしかった。本当は良い人なのだと、心の中でユエを見直していた。それなのに……。

麻奈は下唇を噛み締める。

ずきずきと痛む喉を摩りながら、少し頼りない足取りで部屋を出た。こんな不安な気持ちのときに、この部屋は広すぎる。

麻奈はいつの間にか、ジュリアンとビシャードがいる三階を目指していた。

人気の無い廊下をひたひたと歩くと、物悲しい気分が押し寄せる。この紅い光には、人を淋しい気持にさせる何かが含まれているのかもしれない。

自分の足音だけを聞きながら歩いていると、何かが視界の端を横切った。ぎょっとして振り返ると、それは壁に掛けられた鏡に写る自分の姿だった。少し青い顔をして、眉も目じりも下がっている。酷い顔だった。

「ユエとは――友達でもなんでもなかったじゃない」

麻奈は自分を叱るように呟いた。彼に裏切られたように感じるのは、筋違いなのだと言い聞かせる。しかし、それもあまり上手くはいかなかった。一度信頼を寄せてしまったせいで、さっきのショックをなかなか心から拭うことは出来ない。

「平気、平気」

おまじないのように呟いてから、麻奈は一度深呼吸した。そう口にするだけでほんの少しだけ気分が軽くなるような気がする。ただの気休め、だがやらないよりはましだと思った瞬間……

『うそつき』

突然聞こえてきた声に、麻奈は体を硬くした。鏡越しに背後を確認してみるが、廊下には誰の姿も映っていない。

「今の、なに……」

それはとても小さな声だった。暗く震える女の声。

麻奈は後ろを振り返った。やはりそこには誰もいない。廊下に備え付けてあるスピーカーから聞こえてきたようにも思えない。あの声はもっと間近から囁かれたように近くから聞こえたのだ。

突然、麻奈は心細さを感じた。今の声を、どこかで聞いた事があるような気がする。いつも麻奈に明るく話しかけていた、少し舌足らずの可愛らしいあの声。

麻奈は不安を振り払うように声の主を思い出そうとした。思い出したい。……でも、思い出したくない。

麻奈は立ち止まったまま、そっと鏡の中の自分を見つめた。
昔、鏡を裸のままにしてはいけないと話してくれたのは、一体誰であっただろう。鏡をむき出しのままにして置いておくと、夜にそこから魔物がやってくる。
その話を幼い頃は怖がったが、成長するにつれてだんだん本気にしなくなっていった。しかし、それは本当に作り話だったのだろうか。
麻奈は鏡の中の自分を見つめたまま、そこから動けなくなってしまった。少しでも動けば、不吉な何かに追い付かれて、一息に飲み込まれてしまうような気がする。

「そこにいたのか」

突然気だるい声がかかり、麻奈を金縛りから解放した。

「サルーンさん。どうしてここに」

振り返ると、サルーンが六本の腕を揺らしながらゆっくりと歩いてくるのが見えた。麻奈は安堵のため息をついてサルーンに近寄っていった。
滅多に自分の部屋から出て来ることのないサルーンが、こんな所にいるのはとても奇妙な気がする。彼のすぐ側まで近付こうとしたが、最後にサルーンと会った時のことを思い出して、麻奈は数歩後ろへ下がった。あの時のサルーンは幻覚に翻弄されて麻奈を殴り飛ばしたのだ。
今はどうだろうか。麻奈は立ち止まってサルーンの様子を窺った。

「君を探していた」

サルーンは麻奈を見ない瞳で頷くと、六本の腕のうちの一本をぎこちなく麻奈に伸ばした。

「来てくれ」

それだけ言うと、サルーンは麻奈の手を掴んで歩き出した。何の説明もなかったが、サルーンは麻奈をどこかへ案内したいらしい。麻奈は大きくて温かな手に導かれながら、暗い黄昏色の廊下を歩いていった。

誰かに手を握ってもらっているだけで、今まで迷子になったように不安だった気持ちが、薄らいでいくのを感じた。

「冷たい」

麻奈の手を引きながら、サルーンがぽつりと呟いた。麻奈は彼の漏らした言葉の意味が分からなくて首を傾ける。どうやら繋いだ自分の手の事を言っているらしい。

「あぁ、少し湯冷めしてしまって」

冷めたい湯の中にいつまでもぼんやりと浸かっていたせいで、麻奈の体は芯から冷えてしまっていた。これでは何のために風呂に入ったのか分らなくなったが、もう一度湯を温める気にはならなかったのだ。

「サルーンさんの手はすごく温かいですね」

麻奈は繋いでいた彼の手をぎゅっと握った。サルーンの手はぽかぽかと温かく、まるで小さな太陽のようだ。冷えた自分の手にじんわりと熱が戻ってくる。しかし、サルーンは繋いでいた手を唐突に

離してしまった。
　失った暖かい熱を求めて、麻奈は反射的にサルーンの手を追いかける。しかし、よく考えたら彼と手を繋いでいたこと自体奇跡のようなものだったのだ。普段のサルーンの気質から言えば、彼はこんな事をするような性格ではない。付き合いの浅い麻奈でもそれぐらいの事は直ぐに分った。
　では、どうして彼はこんな事をしたのだろうかと首を捻った。よほど大事な用があるのだろうか。

　サルーンは麻奈の歩く早さを気を遣いながら、無言で歩く。時折振り返るのは、麻奈がちゃんと付いてきているのか確かめる為だろう。

「どこに行くんですか」

「後で分る」

　詳しい説明をするでもなく、サルーンはゆっくりと歩みを進めている。

　この学校には四つの階段がある。一つはＬ字型の長いほうの先端部分にある、瓦礫で塞がれて通る事の出来なくなった西側の階段。二つ目はＬ字の短い方の先端部分に位置していて、普通に通行可能な東側の階段。更に、校舎の真ん中に位置している大鏡のある螺旋階段。最後に、中庭に面して後者の外側に作られた非常階段。
　サルーンは廊下の先にある螺旋階段まで来ると、躊躇いなく階段を下り始めた。

「あ、待って」

麻奈の鋭い悲鳴のような声にサルーンは足を止める。

「あの――そこは、今は通りたくないんです。すみません、向こうの東側の階段を使ってください」

サルーンは同じ目線になった麻奈の瞳を覗き込む。そして特に表情を変えることなく階段を上がると、東側の階段へと続く廊下を歩き出した。理由を尋ねるわけでもなく、麻奈の言うとおりにしてくれたサルーンの優しさに麻奈は感謝した。単に興味が無いからなのかもしれない。

麻奈は青い顔をしながらサルーンの後に続く。ユエの脅しは自分でも予想以上に効果抜群のようだ。あんなに男の人を怖いと思ったのは初めてのことだったのだ。

悔しいが、今は螺旋階段を通る気にはとてもなれない。ユエはきっと、言ったことは実行に移すだろう。頭に浮かんでくる嫌な想像を無理やり追い出して、麻奈はサルーンの広い背中を見つめながら、東側の階段を下りていった。

空に浮かぶもの　4

「こっちだ」

サルーンの声が静かな廊下に響く。一階に下りると、扇状に広がる職員玄関が目に付いた。黒いタイルが敷かれた、砂浜のような形のそれを目にすると、麻奈の中に懐かしい思いが湧き上がってくる。中学生だった当事は、日の当たらない職員玄関は冷たくて固い印象しかなかったが、それすらも今は懐かしく感じられる。

サルーンはブーツの音を鳴らしながら、そこから外へと出て行った。麻奈もその背中を慌てて追いかける。

外に出ると、薄闇の中でサルーンがじっとこちらを見ながら立っていた。六本の腕を持つ彼の影が、不気味な仏像のように足元から伸びている。

「空を」

見てみろ。と言わんばかりにサルーンが空を見上げる。麻奈もそれに習って上を見上げた。空は相変わらず綺麗な茜色に染まっている。ピンクの雲と藍色のグラデーション。ここに烏でも飛んでいれば、とても長閑な風景になる事だろう。薄く延びた雲が、風も無いのに流れていく。そして……

「月……」

白く輝く丸い月が、夕焼けの中を気持ち良さそうに浮かんでいるのが見えた。

「どうして――今まで月なんて出ていなかったのに」

まん丸い月は既に中天まで昇っていて、茜色の空にぽっかりと浮かんでいる。場違いに自己主張する薄っぺらな満月を眺めながら、麻奈は頭を捻った。

夕焼けの景色が変わることは無いと言っていたジュリアンの言葉を思い返す。あれは嘘だったのか。それとも、何か異常な事が起こっているのだろうか。麻奈にはどちらなのか確かめるほど、此処の知識が備わっていない。

「月が出るのは珍しいことなんですか」

「俺が此処に来てから、初めてだ」

「どうして、この事を私に教えてくれたんですか」

サルーンは空を見上げたまま、鼻をひくつかせている。そうしていると、彼はまるで巨大な犬のようだ。

「此処は変化し始めている。今までとは、何かが違う」

サルーンは顔をゆっくりと下げると、麻奈を正面から真っ直ぐに見下ろした。絡み合う視線には、確かにサルーンの意思が込められていた。

「君が来てからだ。俺は君がその鍵だと考えている」

「私が？　まさか、そんな訳――」

「君は、以前此処から出たいと言っていた。俺を家に帰してみせる

と」

麻奈は頷く。確かに一方的ではあったが、サルーンとそう約束したのを覚えている。あの時の気持ちに今も変わりはない。

「君のように、はっきりと此処から出たいと思うことが出来る者は、実はとても少ない。皆、心のどこかで此処を出る事に躊躇いがある」

麻奈は、さっき此処から出たくないと言っていた男の事を思い出した。サルーンも彼と同じように此処から出たくないと考えているのだろうか。

「どうして帰りたくないんですか」

サルーンの瞳が細くなった。酷く悲しそうに見える。

「国に帰っても、辛い現実しかない」

彼はきつく目を瞑ると、大きな両手で顔を覆う。その手は小刻みに震えていた。

「でも、サルーンさんだって本当は帰りたいと思っているんですよね？　そうじゃなければ、私に月の事を教えたりしません」

「分らない……。狂おしいほど帰りたくなる時がある。だが、次の瞬間にはそれと同じくらい帰るのが恐ろしくなるんだ」

苦しそうに心のうちを話すサルーンを見ていると、麻奈の胸は締め付けられるように痛んだ。サルーンは内乱中の国から来たとジュリアンは言った。きっと麻奈には想像も出来ないような辛い体験を

してきたのだろう。

「苦しい。どちらも選べなくて、どちらも恐ろしいんだ。そして、俺は結局動けずに此処に留まることしか出来ない」

それは低い、消え入りそうな声だった。

麻奈はサルーンの腕にそっと触れた。少しでも彼の慰めになればいいと思って。触れた手のひらから、彼独特の熱い体温を感じた。

顔を上げたサルーンの瞳は赤く充血していたが、乾いていた。もう彼の涙は枯れ果ててしまったのかもしれない。

「君なら何とかしてくれるのか？　俺を救ってくれるのか」

サルーンが麻奈に手を伸ばした。六本の長い長い手。その腕は傷だらけで垢じみていたが、それらが自分の体に絡みついてきても、麻奈は逃げなかった。以前のように嫌悪感も湧いてこない。

麻奈をきつく抱き寄せるサルーンは、溺れる者が藁を掴むような仕草に似ているような気がした。辛い現実と、残酷なこの場所に溺れるサルーン。今はただ、サルーンが哀れで悲しいと思った。

麻奈はサルーンの硬くて分厚い胸板に顔を押し付け、彼の背中へ手を回してぎゅっと力を込めた。

「大丈夫。きっと、大丈夫ですよ」

サルーンの腕の中で何度も呟いた言葉は、何の根拠もありはしない。しかし、少しでもサルーンが安心できればいいと思った。それが、今の麻奈に出来る精一杯のことなのだから。

どの位そうしていただろうか。麻奈は鼻を小さく鳴らして、そっとサルーンの腕の中から離れた。今度は麻奈がサルーンを案内する番だった。

「サルーンさん。今度は私に付いてきて下さい。貴方に紹介したい人がいるんです」

サルーンは相変わらず、赤く充血した目で麻奈を見るともなしに見ていたが、やがてそれが小さく上下に揺れた。麻奈はサルーンを校舎の中へ入るように促して、自分も歩き出した。

ふと、奇妙な気配を感じた気がして顔を上げた。誰かに見られているような、そんな落ち着かない気持ちになる。視線というのは、なぜこうも敏感に感じ取ることができるのだろう。麻奈はじっと息を潜めて自分たちを見ている者の気配を探ろうとした。しかし、辺りを見渡しても、校舎の窓辺を見ても誰の姿もありはしない。

麻奈はお手上げというように、空を仰いだ。そこには相変わらず白く輝く月が浮かんでいる。

麻奈はポケットから携帯電話を取り出した。なぜそんなことをしようと思ったのか、自分でもよく分らないけれど、麻奈は空に向かって携帯を突き出した。小さなシャッター音を鳴らして、麻奈は夕焼け空を四角く切り取っていた。モニターを覗き込んで撮った画像に満足してから、麻奈はサルーンを追い駆けて小走りに駆けていった。

誰もいなくなった校舎の外に、また静寂が戻ってきた。このとき、中天に輝く月がぱちりと瞬いた事に、誰も気がつく者はいなかった。

空に浮かぶもの　5

ひんやりと冷たい校舎に入ると、サルーンがぼんやりとした様子で職員玄関に佇んでいた。麻奈を待っていてくれたようだが、その瞳は相変わらず捉えどころがない。

麻奈が東側の階段に向かうことを告げると、サルーンは黙って歩き出した。

彼にビシャードを紹介して、元の姿に戻る事が出来るという希望を持ってもらいたい。麻奈はそう考えていた。今のところ何が原因で戻れるのかは分らないが、きっとその方法を見つけてみせる。そして、全員で此処から出る道を探すのだ。麻奈はひっそりと拳を握り締めた。

胸に灯った微かな希望を頼りに、麻奈はジュリアンの部屋がある三階にやってきた。

普段は何の物音も聞こえることのない静かな廊下に、何かを言い争っているような男の声が微かに響いていた。珍しい事に、語気を荒げたジュリアンの声も聞こえてくる。

「何かあったのかも」

嫌な予感を感じて、麻奈は足を速めた。ジュリアンの部屋の扉に手をかけ、まさに扉を力一杯開こうとしたその時、中からジュリアンとビシャードの声が漏れ聞こえてきた。

「いいから早く……脱ぎなさい……」

「やめ……離せ。無礼者が……」

部屋の中から聞こえてきた声に不穏な空気を感じて、麻奈は扉に手をかけたままその場に固まってしまった。薄いグレーの扉を凝視しながら、このまま扉を開けてもいいものかと考える。

じっと扉を見続けていても、中の様子が透視出来るわけもない。麻奈は思い切って扉を少しだけ横にずらした。中の様子を探るだけなら構わないだろう。もしも何か不都合なことが起きていたら、何も見なかったことにして逃げよう。麻奈はそう決心していた。

息を殺して僅かな隙間から中の様子を覗き見ると、上半身裸のジュリアンがビシャードの服を剥ぎ取ろうとしながら馬乗りになっていた。床に押し倒されているビシャードが、ジュリアンを必死に押し返そうとしているが、彼の細い腕ではとてもジュリアンには適わないようだ。ビシャードの服は引っ張られ、ほとんど半分脱げかけている。ジュリアンはビシャードが逃げられないように足で体を拘束したまま、実に的確にビシャードの服を脱がしていく。

麻奈は音もなく扉を閉めて、後ろのサルーンを振り返った。心臓が飛び跳ねているような激しい動悸がする。中を見なければ良かったと思っても今更遅すぎた。

そんな麻奈を見て、サルーンは不思議そうに中の様子を覗こうとする。

「だ、駄目！サルーンさん、今は駄目です。その……そう、取り込み中みたいで」

「どういうことだ」

「えっと、その――すごくプライベートな事かもしれないので、ここは一つ何も見なかった事にして出直しましょう」

「何を見なかった事にするつもりですか」

焦って喋りまくる麻奈の背後に、人影が近付いた。その手には戦利品のビシャードの服が握られている。

「ごめん。見てないよ。私、今来たばっかりで、その……」

麻奈は頬を真っ赤にしてジュリアンから視線を逸らした。そんな麻奈のおかしな様子に気が付いて、ジュリアンは渋い顔をする。

「薄気味悪い誤解はやめてください。それよりも、珍しいですね。サルーンと二人なんて」

ジュリアンは扉を大きく開いて、部屋に二人を招き入れた。部屋の中には下半身に大きなタオルを巻いたビシャードが憮然とした顔でソファーに座っていた。麻奈が軽く会釈をするのを見て、彼の顔はみるみる蕩けるような笑顔になっていった。しかしそれもつかの間、麻奈の言葉を聞いて彼は顔を引きつらせた。

「突然来てしまってすみません。あの……私たちお邪魔ではなかったですか。もしそうだったら、今すぐ出直しますから」

「だから、違うと言っているでしょう」

含みのある麻奈の物言いに、ジュリアンから抗議の声があがった。バスルームから出てきたジュリアンは、相変わらず上半身に何も身に着けていない。今洗濯を始めたばかりらしく、バスルームから洗濯機の回り始める音が聞こえてきた。

「妙な勘違いはやめて下さい。何をどう見ればそんな勘違いが出来

るんですか」

ビシャードは唇を噛み締めて何かに耐えているような顔をして頷いている。弁解の言葉も出てこないらしい。

「だって……」

どう見るもなにも、麻奈にはそのようにしか見えなかったのだ。なぜあんな事になっていたのか恐る恐る尋ねてみると、ジュリアンが不愉快な顔で事情を話してくれた。

「私は彼の血だらけの服を洗濯しようとしただけです。それなのに、ビシャードが洗濯している間これを着るのが嫌だと抵抗するから――」

ジュリアンは手に持っていた深緑色のジャージをヒラヒラと振った。それは、麻奈には見覚えがある学校指定のジャージだった。一番評判の良くない深緑色のそれをあえて選ぶあたり、ジュリアンの悪意を感じる。

「そのような奇妙な服を着るぐらいなら、あのままの方がましだ。余の美意識に係わる」

麻奈は成る程と頷いた。ビシャードの我が儘にジュリアンの堪忍袋の尾がぶちっと切れてしまったらしい。ビシャードは生まれが高貴なだけあって、気位が高いのかもしれない。

麻奈は安堵のため息と共に、笑がこみ上げてきた。ジュリアンが薔薇の人じゃなくて本当に良かったと心から安心する。もしも本当にそうだったとしたら、麻奈は容易には立ち直れないような気がしていた。

「それで、何か用ですか」

「あぁ、そうなの。サルーンさんにビシャード陛下を紹介したくて。それから……」

麻奈は部屋を横切って、一直線に窓辺に向かった。大きな窓を開け放ち、空に浮かんでいる目当てのものを指差した。

「サルーンさんが教えてくれたの。空に月が昇ってるって――」

ジュリアンたちは気がついていた？　と麻奈が後ろを振り向くと、ジュリアンもビシャードも、目を大きく見開いて紅い空に浮かぶ丸い月を見上げていた。どうやら、月に気がついたのはサルーンと麻奈の方が先のようだ。

「これは――驚きましたね」

麻奈のすぐ隣に来ていたジュリアンが大きく息を飲んだのが分かった。その様子は、ここに居る誰よりも動揺しているように見える。それもそのはずだと麻奈は思う。以前、此処は不変だと説明してくれたのはジュリアンだった。

「私も、ついさっきサルーンさんに教えてもらったの。これは一体どういうことなの。何かの前ぶれなのかな」

「分かりません。……こんな事は初めてです」

ジュリアンは睨み付けるように月から視線を外さない。

一人この場の空気に染まることなく、釈然としない顔をしていた

ビシャードが堪えきれずに質問を挟んだ。

「この月とやらが出ているから、一体何だというのだ」

彼はまだ此処の詳しい事情を知らないようだ。おまけに、先ほどまで視覚も聴覚も奪われていたのだから、この空の変わりようがいまいちぴんとこないらしい。

麻奈は出来るだけ簡潔に、ジュリアンから教わった事をビシャードに伝えた。彼は途中質問を挟みながらも、頷きながら麻奈の話を聞いていた。

「成る程、大体のことは飲み込めた。見たところ、今は害もなさそうだが、誰もこの変化について説明出来る者はいないのか」

ビシャードは端から順に皆の顔を見渡したが、それに答えられる者は誰もいなかった。ビシャードはふむ、と一つ頷くと肋骨の透けて見える胸の前で腕を組んだ。

「では、あれを眺めてむやみに騒ぎ立てるだけ時間の無駄というものだ。今は捨て置けばよい。それよりも、今後の方針を決めておくほうがよほど意味があるだろう」

麻奈はビシャードの理にかなった意見に驚いた。彼がこんなに冷静な思考が出来るなどと思わなかったのだ。本人には口が裂けても言えないが、激情していた過去のビシャードの姿を見ていると、彼はもっと感情的な人間だと思っていたのだ。

「何か異論は」

再びソファーに納まるビシャードは、異論など言わせない。とい

う空気を纏っていた。彼は人を従わせる側の人間なのだということを、このとき麻奈は思い出した。

「いえ、ありませんよ」

ジュリアンがやっと月から目を離して、静かに窓を閉めた。

「やはり、どう考えてもあの鏡以外に出口は考えられませんね。これからは大鏡を徹底的に調べたほうがいいでしょう」

ジュリアンは靴音を響かせながら、ビシャードが座るソファーまで歩み寄っていった。偉そうにふんぞり返っているビシャードに近づくジュリアンは、こうして見ると謁見を申し出た家臣のようだ。しかし、その口から出た内容はそんな関係からは程遠いものだった。

「その前に一つ確認させて下さい。ビシャード、貴方には此処から出る意志がありますか。もしもそれが無いのなら、私たちの邪魔になりますから、どこかの部屋にでも閉じ籠っていて下さい」

挑戦的とも取れるが、これがジュリアンのやり方なのだろう。使えるのか使えないのか、はっきりさせておこうというのがいかにもジュリアンらしい。

一度、役に立たないと判断された麻奈も、部屋に帰るように言われた経験がある。もうあの時のような事にはならないと麻奈は胸に誓った。役立たずの烙印は二度と押されたくない。

ビシャードは戸惑うように視線を泳がせた。その様子は、明らかに答えを迷っているように見える。ふと、ビシャードの瞳が麻奈に向けられた。見詰め合う形でお互いを見ていると、ビシャードが一度大きく深呼吸をした。

「それは――分からない。まだ国に帰ろうと思うほどの強い意思は正直持ってはいない。だが、ミナカミ」

「は、はい」

突然名前を呼ばれて、麻奈の声はひっくり返ってしまった。

「ミナカミは、故郷に帰りたいか」

優しく、少し淋しそうにビシャードは麻奈に問いかける。

「帰りたいです。私だけじゃなく、此処にいる皆も家に帰したいと思っています」

麻奈は正直な気持ちを答えた。自分だけではなく、此処にいる全員。それは、帰ることに乗り気ではないユエも含めてだ。

麻奈は漠然とした思いだが、此処に留まるのは良くないことなのだと思っている。何が良くないのか、はっきりとは分らないけれど、何となく自然の摂理に反しているようなどこか歪んだ心地になるのだった。

ビシャードは麻奈の答えにゆっくりと頷くと、薄く微笑んだ。

「では、それに協力しよう。余はミナカミの願いを全力で叶えたい。今の答えでは不服か」

「いいえ。信用しますよ、陛下」

ジュリアンは目を細めると、今度は麻奈に向き直った。

「今から少し時間をもらえますか。どうしても麻奈に確認しておきたいことがあるのです」

それは、いつもと変わらない何気ない口振りだったので、麻奈はすぐに首を縦に振った。まだ洗濯中のジュリアンたちの服も乾いてはいないだろう。これから大鏡に向かうにしても、もう少し準備が必要だった。

ジュリアンは麻奈が頷くと、にっこり笑ってその手を掴んだ。そして有無を言わせぬまま、奥の寝室へと麻奈を引っぱって行った。これには麻奈も驚いた。

半ば押し込められるように部屋に連れてこられた麻奈は、驚いてジュリアンを振り返った。彼は後ろ手に扉を閉めてから、カチャリと小さな音を立てて扉に鍵かけてしまった。

麻奈は扉が閉められる寸前、ビシャードが慌てて追い掛けて来るのと、今まで完全に気配を消していたサルーンが扉を掴もうとするのを見た気がした。

激しいノックの音が聞こえる。ドアを叩いているのはビシャードか、それともサルーンだろうか。麻奈は激しく鳴っているドアに近寄ろうとしたが、その進路をジュリアンが素早く塞いだ。

麻奈は目の前に立ちふさがるジュリアンを見上げた。どうしてジュリアンはこんなやり方で自分を連れて来たのだろう。いつもと違う強引なやり方は、ジュリアンらしくないような気がした。

普段の彼ならばもっとスマートにさりげなく、二人で話す機会を作れるはずだろう。麻奈は眉を寄せて考える。こんな風にすれば、いかにも内緒話をしていますよと宣伝しているようなものに……。

「ジュリアン、一体どうしたの」

「驚かせて申し訳ありません。でも、今すぐでなければ駄目なんです」

そんなに急ぎの話とはなんだろう。麻奈はジュリアンが話を切りだしてくれるのを待った。ジュリアンは普段と変わりのない、温和な微笑みが浮かべている。それを見て、さっき彼から感じた違和感は、やはり気のせいかもしれないと思った。意識しているのが自分だけのような気がして、麻奈は急に恥ずかしくなった。

「どうしても、今ここで麻奈に聞きたい事があるんです。そう、二人きりで……」

ゆっくりと近づいて来るジュリアンの靴音。

「それは別に構わないけど。わざわざ此処じゃなくても――」

麻奈は部屋を見回した。黒い色をしたこの部屋に入るのは二回目になるが、二度と此処に足を踏み入れたくないと思ったのは、ついさっきの事だった。火事で何もかもが煤けてしまったこの部屋は、心なしか焦げ臭い空気が漂っているような気がする。生々しい火災の跡は、否が応にも想像力を掻き立てられてしまう。さぞかし酷い火災だったのだろう。

麻奈の浮かない顔を見ながら、ジュリアンは歩みを進める。寧ろ彼は楽しそうに麻奈に近づいていた。

「此処だと何か問題ですか」

ジュリアンの腕が麻奈に延びる。一瞬驚いてから、麻奈は頬を掠めるその手を避けて一歩後ろへ下がった。当然のようにジュリアンの手も追いかけて来たので、麻奈は更に後ろ後ろへと引いていった。

麻奈の顔に少しだけ不振の色が浮かぶ。普段こんな甘い雰囲気になったら、頬の一つでも染めているところだが、今のジュリアンからは甘いだけではない、何か良くない雰囲気を感じる。それが麻奈にとって一種のストッパーになっていて、近すぎる距離に危機感を感じているのだった。

背中に壁が触れて、麻奈は驚いて後ろを振り向いた。いつの間にか、もう壁際まで追い詰められていた。ジュリアンは薄く笑って、壁に両手を付く。ちょうど麻奈を挟んで作ったそれは、即席の小さな檻になった。

「教えて下さい。あの時、本当は何があったのか」

「あの時って」

「ビシャードと一緒に鏡の中に入った時のことです」

「それは――ジュリアンも知ってるはずでしょう。ユエと外から見ていたんだから」

「勿論ずっと見ていました。しかし、私は全てを見ていた訳ではありません。麻奈は一度ビシャードと離れてしまった時がありました。その時、あの鏡にはビシャードの姿しか映っていなかったんですよ」

鏡に映る映像のことまで考えていなかった麻奈は、そうだったのかと驚いた。何となくテレビの画面を思い浮かべてしまったが、鏡はどうやら二画面になることも、視点を切り替えることも出来ないらしい。

「だからあの時、麻奈が一人で何をしていたのか誰も知らないんです」

ジュリアンは小さな子供に言い聞かせるように、麻奈の瞳を覗き込んでくる。麻奈は吐息が掛かりそうなほど近付いてくるジュリアンから一生懸命顔を背けた。あの時の事を思い出そうとするがなかなか上手くいかない。

こんなに密着されていると、目のやり場に困る。上半身裸のジュリアンが近くにいては、思い出せるものも思い出せなくなりそうだ。と麻奈は心の中で毒づいた。

「そう言えば、あの時女の子に会った」

「女の子？」

麻奈は頷く。どうして忘れていたのだろう。あの時に出会ったふ

んわりとした雰囲気の可愛らしい少女を思い出した。

「十歳くらいの可愛い女の子に会ったの。陛下の国の洋服とは全然違う、スカートとブラウスのような服装をしていた。でも、なぜか服がすごく汚れてた。まるで、泥遊びでもしてきたみたいに。その子、陛下の姿がまた変わり始めていることを教えてくれたの」

今考えてみても不思議な少女だった。鏡の中に入ってから、麻奈たちの存在に気がついたのは、彼女だけなのだ。あの子は一体誰なのだろう。確かめる方法は無いと解っているのだが、考えずにはいられない。

しかし、そんな麻奈の思考をあっさり壊したのはジュリアンだった。彼は麻奈の話を聞くや、口元を吊り上げた。

「あぁ……やはり貴女は最高だ」

感嘆のため息を吐くジュリアンの三日月型の唇から白い歯が覗いた。

「麻奈が来てから、此処は確実に変わり始めています。それが例え偶然だとしても――貴女は私にとって幸運の女神だ」

ジュリアンが顔を更に近づけた。麻奈は耳に注がれるくすぐったい言葉に、気が遠くなるほど動転していた。一体ジュリアンはどうしてしまったのだろう。

そんな麻奈に、彼はまるで止めを刺すかのように耳に口をつける。

「麻奈が欲しい」

流し込まれたその言葉は、一瞬で麻奈の思考を沸騰させた。ジュ

リアンは動かなくなった麻奈に顔を近づけると、あっけないほど簡単に麻奈の唇を捕らえていた。吐息の伴う刺激的なスタンプは、麻奈の思考を今度こそ根こそぎ奪っていった。触れて、離れる。ただそれだけなのに、麻奈は真っ赤な顔で口元に手を当てた。

ジュリアンは更に麻奈の耳に　囁き続ける。今ここで畳み掛けておかなければ獲物を逃がしてしまうというように。

「貴女の全てを独占したい……。私にその権利を与えてくれますか」

今まで、恋にあと一歩及ばなかったジュリアンへの淡い好意は、呆気ないほどストンと堕とされていた。気がつくと、麻奈はこくこくと頷いていた。

もう外で扉を叩く音も、ビシャードが自分を呼ぶ声さえも聞こえない。聞こえるのは、馬鹿みたいに激しく鳴っている心臓の音とジュリアンの声だけだった。

「良かった。これで、麻奈は私だけのものですね。今の話は私と麻奈だけの秘密です。約束してくれますね」

麻奈はもう細かい理由など考えられなかった。ただただ条件反射で頷くだけ。ジュリアンはそんな従順な麻奈を見て笑った。それは、酷く歪な笑顔だった。

鏡へ（サルーンの場合）　1

休むことなく続いていた扉を叩く音は、いつしか体当たりをする激しい振動へと変わっていた。扉はビシャードとサルーンがぶつかるたびに、ギシギシと軋んで悲鳴のような音を立てている。

今にも破られそうな扉を前にして、麻奈だんだんと周りを見ることが出来るようになっていた。扉の外では、さっきからずっとビシャードとサルーンが自分を心配してくれていた事をようやく思い出した。

麻奈が自分を見ていないことを悟ったジュリアンが、そっと離れていった。そして、念を押すかのように唇に人差し指を当ててみせる。麻奈はまだ少しくらくらする頭で頷いた。約束、ジュリアンとの秘密。誰にも話してはいけないと言われるまでもなく、あんなことを誰にも話せるわけがない。

ミシミシと音を立てる扉をジュリアンが開くと、まずビシャードが勢い良く部屋へと入ってきた。次いでサルーンも顔を出す。

「ミナカミ無事かっ」

血相を変えて駆け寄ってくるビシャードに、麻奈は驚きながらも頷きを返した。

「あの男に何もされなかったか」

ビシャードは心配そうに麻奈の肩に手を添える。その手に赤い擦り剥けが出来ている事に気がついて、麻奈は二人に申し訳なくなった。こんなに心配されていた事にとても驚く。

心配かけてしまってすみませんと口にして、麻奈が肩に置かれたビシャードの手からそっと身を引くと、彼は少し傷ついたような表情をした。しかしそれもすぐに消え、麻奈の姿に異常は見当たらないのを確認すると、一応安心したようだった。

「何をしていたのか、話す気はないのか」

サルーンはジュリアンに非難する口調で迫った。彼にしては珍しく感情の籠った視線を向けている。

「ありません。彼女とは少し個人的な話をしていただけです。それを貴方たちに話す必要はないでしょう」

ジュリアンは飄々と追及をかわしている。彼はまるでそれを楽しんでいるかのように、サルーンやビシャードの視線さえも受け流す。そうなると、締め出されていた男たちの矛先は自然と麻奈へと向いた。

「ミナカミ、何があったんだ」

麻奈はビシャードから視線を外して首を振ることしか出来ない。なぜか少し後ろめたくて、恥ずかしくて、麻奈は初めからビシャードとサルーンに顔を向けられずにいた。それをやんわりとした拒絶と取ったビシャードが、悲しそうに目を伏せた。

焼け焦げたベッドルームから出てきても、誰も口を開こうとはしなかった。ジュリアン以外、皆の視線は自然と下へと下がっていた。重苦しい空気の中、麻奈はこれからの事を話すための口火を切った。

「あの――私この後、少し寄りたい所があるんです」

麻奈はおずおずと顔を上げると、皆が麻奈をじっと見ていた。誰も何も言わなかったが、話の続きを求められているのを感じて、麻奈は話を進めた。

「これから螺旋階段に行きたいんです。サルーンさんと、それからジュリアンに陛下も。少しだけ付き合ってもらえませんか。もしかしたら危険かもしれないんですけど……」

「危険？」

ジュリアンが聞き返す。麻奈は、つい先ほどユエが自分の部屋を訪ねて来た時の事を話した。

「ユエは出口を探す事に反対なんです。余計な事はするなって脅すぐらい」

今思い出しても、あの時のユエの剣幕は恐ろしかった。あの忠告を破ったら、一体どんな事になるのか想像するだけでも震えてしまいそうになる。しかし、麻奈はそれでもサルーンを大鏡の前に連れて行きたいと思った。さっきはまだ踏ん切りがつかなかったが、皆で行けば何とかなるような気がしていた。

「サルーンさんに、元の姿に戻してみせますって約束しました。だからこれから鏡に行ってみようと思ってるんですが、少ない人数で行くのはちょっと怖いんです」

麻奈は唇を噛んでうつむいた。サルーンを救いたい。大鏡に行けばそれが叶うかもしれない。ならば、望みが薄くてもそれにすがってみたいと思うのだ。しかし、危険を顧みずそれが出来るかと言わ

れたら、麻奈はそれほど強くはない。麻奈は自分でそれが良く分かっていた。だからこうして皆を誘っていく事しか出来ない。

「確かに、麻奈が鏡に近づけないのは困りますね。多分、麻奈が行かなければ鏡は何の変化も起こらないでしょう」

「ユエという男をどうにか説得できないのか。出口を見つけても、残るのは個人の自由だと言えばいい」

「難しいでしょうね。彼は麻奈まで此処からいなくなるのが気に食わないと思っているようですから。出口を見つけること自体、不愉快なんでしょう」

今まで黙って話を聞いていたサルーンが、突然扉に向かって歩き出した。彼の多すぎる手は、着いて来いというように麻奈に向かって手招きをしている。一緒に大鏡まで付いていってやるという事らしい。

麻奈はサルーンの手招きに従った。あとの二人を振り返ると、ジュリアンが頷いていた。

「私も行きます。この一連の出来事をきちんと把握しておきたいですから」

「ミナカミに危険が及ばないように、余はいつもそなたの側にいるぞ」

ビシャードが麻奈の隣にピタリと張り付く。手放しで麻奈を守ってくれると言ったビシャードに、麻奈は胸が熱くなって頭を下げた。

サルーンがそのまま扉を出ようとしたところで、ジュリアンが神妙な顔で待ったをかけた。

「もしもユエが本気だったら――かなり危険な事になりますよ。なにしろ、この中で圧倒的に強いのは彼なんですから。麻奈も彼の怪力を見たことがあるでしょう」

そう言われて、以前ユエが鉄の扉を蹴破った時の事を思い出した。分厚い鉄の蝶番がネジごと外れているのを見て、その凄まじい力に戦慄したのを覚えている。

「我々三人で太刀打ち出来るかどうか――。貴方は見かけ通りなんですか、ビシャード？」

「どういう意味だ」

ジュリアンのちくりと刺さりそうな質問に、ビシャードは気を悪くしたようだ。細い神経質そうな眉を思い切りしかめている。

「勿論そのままの意味です。失礼ですが、貴方が強いとはとても思えません。それとも、何か不思議な力でも秘めているのでしょうか」

ビシャードは、ふんと鼻を鳴らした。

「見くびってもらっては困る。これでもそれなりの力は持ち合わせている。それよりお前こそ、ミナカミの盾になるぐらいの覚悟はあるのだろうな」

それにはジュリアンも氷のような微笑みを浮かべたまま沈黙を返した。なぜか自分を挟んで繰り返される刺々しいやり取りに、麻奈は首をすくめた。しかし、そこから逃れるタイミングを図れずにいる麻奈は、二人から離れる事も出来ずにただただ二人の間に挟まれ

て事の成り行きを傍観することしか出来なかった。

「と、とりあえず。皆さん服を着てからの方がいいと思います」

麻奈はおずおずと片手を上げて発言してみる。ジュリアンとビシャードは相変わらず上半身裸のままでにらみ合っていた。それを見て、少し離れたところにいるサルーンは一人関係ない顔でうんうんと頷いている。しかし、初めから服を着ていないサルーンも見事な筋肉の付いた上半身を晒していた。

鏡へ（サルーンの場合）　2（前書き）

一部暴力的な表現があります。

鏡へ（サルーンの場合）　2

ジュリアンとビシャードが乾きたての服に袖を通してから、麻奈たちは螺旋階段に向かうことにした。すると部屋を出る直前、サルーンがズボンの裾を捲り上げて隠し持っていた小型の銃を取り出した。

「サルーンさん、それは」

「もしもの時のために持っておくといい。小さい分射程距離も短いが、威嚇としてなら使えるだろう」

サルーンは黒光りする銃をくるりと回し、グリップを麻奈に突きつけた。手の中にそれを押し込められた途端、麻奈の背中にざわざわと寒気が走る。サルーンは麻奈にこれを使えといっているのだ。

「何だそれは」

ビシャードが不思議そうに、麻奈の手の中の拳銃に顔を近づけてきた。

「そうか、ビシャードにはこれが何なのか分からないんですね。――もしかすると、ユエも拳銃を知らない可能性がありますね」

ジュリアンが眉を寄せながら呟く。

「問題ない。そこらに一発打ち込むだけで威力が分かるだろう」

「でも私、銃なんて使えません」

「大丈夫だ。安全装置をはずして引き金を引くだけでいい」

サルーンに説明されて、麻奈は再び手の中の銃を見つめる。手順が分かっても、これを扱える自信は全くなかった。

「念のためですよ。ですが、もしも私たち三人がユエにやられてしまった時には、躊躇わずにそれを使ってください」

麻奈はこくりと頷いて、預かった銃を握り締めた。それを見てジュリアンは麻奈の肩を軽く叩いた。本当に、こんな物を使わなければいいと麻奈は心の底から思った。

静かな廊下には麻奈たち以外人の影はない。ひっそりと静まり返った薄暗い校舎の中を、皆で連れだって歩くのはとても奇妙な心地がした。まるで校舎の中で肝試しをしているようだ。何しろ、先頭の男には腕が六本付いていて、隣の男は透明ときている。これで蔦男もいれば完璧だろう――。

麻奈は、早く皆が元の姿に戻れたら良いと思った。いっそのこと、皆で一緒に鏡の中に入れないだろうか。そんな事を考えていると、突然前を歩くサルーンの歩みが止まった。いつの間にか、二階の螺旋階段に到着していた。

階段に沿うように、ゆるりと円を描く銀色の柵が見える。階段の踊り場には暗く陰鬱な色のタイルが貼ってあり、大きな鏡が辺りの

景色を写していた。螺旋階段は、麻奈が初めて此処に来たときと同じように古く薄汚れていた。

「どうしたんですか」

階段に足をかけたまま、固まっているサルーンにジュリアンが声をかけた。サルーンは振り返って首を振る。その唇が戻れと声を発する前に、黒衣の男が一階の暗がりから姿を現した。ユエは足音も立てずに螺旋階段を上ってくる。

「待ち伏せ……」

麻奈は息を呑んでジュリアンの袖をぎゅっと掴んだ。やはりやめておけば良かったのだろうか。麻奈はそう思ったが、今更もう遅い。ユエの顔を見た途端、麻奈は自分の喉を締め付ける手の感触を思い出していた。ジュリアンたちと一緒にいても、一度植え付けられた恐怖はそうそう拭えるものではない。

ユエはゆっくりと階段を上がって来る。その顔には何の感情もなく、まるで散歩でもしているかのような、何気ない様子に見える。しかしその目は、先ほどから麻奈だけを捉えていた。それがかえって麻奈の恐怖を煽るのだ。

「俺は言ったよな？　此処には来るなと――」

ユエはどこかのんびりした口調で語りかけてくる。首を大袈裟なほど傾けて、麻奈を下から見上げていた。

「余計な事をするな、部屋で大人しくしていろと」

その迫力に麻奈は気圧されて、麻奈は無意識に後ろに下がった。
ビシャードが庇うように前に出る。

「それなのに、お前はこんな所で一体何をしようとしているんだ」

ユエは麻奈から視線を外さない。そんな彼の様子は、まるで頭数を集めても無駄だと言っているように見える。ユエにとっては、何人集まってこようが、問題ではないのかもしれない。

「お前が良い子に出来ないなら、俺は優しく出来そうもねぇな――」

そう言うと、突然ユエが階段を駆け上った。サルーンがそれを止めようと、腰を低く落として身構える。そしてユエの鳩尾目掛けて拳を振るった。しかし、ユエはそれを軽く片手でいなしてかわすと、体を捻って強烈な回し蹴りでサルーンを階下に叩き落とした。

「サルーンさんっ」

麻奈とビシャードが手摺に駆け寄った。サルーンは受身も取る事が出来ずに、かなりの高さから階段を転がり落ちていった。まだ耳に残っている鈍い音が、不安を更に掻き立てる。

麻奈は指先の震えを抑えながら下を覗いた。一階の床には、うつ伏せに倒れているサルーンが見えた。彼は廊下に伏したままピクリとも動かない。麻奈の動悸はいよいよ激しくなった。知らず、拳銃を握り締めている手に力が入る。

ユエはサルーンに目もくれずに、階段をゆったりと上がって来る。美しい顔には汗一つ浮かぶことなく、息も乱れていない。

「ユエ、少し話を聞いてください。私たちは貴方の不利益になる事をしている訳ではありません。此処に残るも留まるも、最後に選ぶ

のは自分自身です。私たちはユエが此処に残るのを止めたりしません」

ジュリアンは近付いてくるユエと距離を取りながら説得する。しかし、ユエの歩みは止まらない。彼はジュリアンを無視して、ひたすら麻奈だけを睨みつけている。

ジュリアンは、ユエから死角になっている右手をさりげなくポケットに忍ばせた。それに気がついたユエは、突然階段を一気に駆け上がり、その勢いのままジュリアンに向かって走る。ジュリアンは小さく舌打ちしながらポケットから手を引き抜いた。

「遅ぇ」

ユエがジュリアンとの間合いを一瞬で詰めると、ジュリアンが右手をポケットから引き抜いた瞬間、そこに手刀を素早く落とした。硬い音を立てて、ジュリアンの手から何かが滑り落ちる。

ユエはそれを遠くへ蹴り飛ばしてから、ジュリアンの右腕を掴んで軽々と投げ飛ばした。思いきり壁に叩きつけられたジュリアンは、立ち上がる事も出来ずにそのままずるずると廊下に崩れ落ちた。

決して小柄ではないジュリアンが宙を舞っている姿を、麻奈は悪夢を見ているような心地で呆然と眺めていた。ユエの強さは圧倒的だ。皆で対峙すれば何とかなると思ったのは、甘い考えだったようだ。

麻奈が震えながら後ずさると、未だ無傷のビシャードが麻奈をユエの視線から隠すように立ちはだかった。しかし、ビシャードに勝ち目がないのは誰が見ても明らかだった。

「陛下、駄目です」

ビシャードの細い背中に庇われながら、麻奈は首を振った。線の細いビシャードなど、ユエの一息で吹き飛ばされてしまいそうだ。下手をしたら重傷を負うかもしれない。それは絶対に避けなければ。そう思うのに、麻奈の喉は張り付き、それ以上の言葉が出てこなかった。

「ミナカミ、そなたは逃げなさい」

ビシャードがそっと囁くが、麻奈は首を振った。

「余は、お前を知っているぞ」

ビシャードは、ユエと正面から対峙しながら口を開いた。ユエは片眉を動かしたきり何も言わない。

「その香のかおりと、その身のこなし――確かに覚えている。以前余を棒で打ち据えた者だ」

「――だったらどうした」

ユエがビシャードの顔目掛けて殴りかかる。空を切る音が聞こえそうなほど鋭い拳を、ビシャードは紙一重で何とかかわした。しかし、ユエは止まらなかった。素早くビシャードの懐に入り込むと、その腹に重たい一撃を叩き込む。ビシャードは体を海老のように丸めて膝を付いた。その顎をユエは容赦なく蹴り上げた。苦しそうな声をあげるビシャードの襟元を、ユエが乱暴に掴んで自分の目の高さまで持ち上げた。

「逃げ……ろ」

ビシャードは切れた唇を震わせて麻奈に訴える。麻奈は今度は首を振る事も出来ずに、きつく拳銃を握り締めていた。間近で振るわれる暴力が恐ろしくて、体が思うように動かない。

いつの間にか、麻奈の視界は涙で滲んでいた。ぼやけて滲む世界で、麻奈は周りを見た。階下に落ちたサルーンも、廊下に倒れているジュリアンも動かない。

「お願い！　もうやめてっ」

気がつくと、麻奈は叫びながら拳銃をユエに向けていた。

鏡へ（サルーンの場合）　3（前書き）

暴力的な表現があります。

鏡へ（サルーンの場合）　3

精一杯伸ばした両腕は、緊張と恐怖でふるふると震えていた。麻奈は銃口をユエに向けたまま、汗ばむ指を引き金にそっと当てる。安全装置はすでに解除していた。

「お願いだから、もうやめて」

ユエに銃口を向けながら、麻奈はもう一度はっきりと口にした。しかし確かな口調とは裏腹に、かたかたと震えている両腕は、意識して力を込めていなければ、今にも銃を取り落としてしまいそうなほど緊張していた。

どうかユエが拳銃を知っていますように。半ば祈るようにして、麻奈は持っている凶器をユエに向け続ける。

ユエの瞳が再び麻奈を捉えた。ほとんど条件反射で麻奈は後退った。

「何だそれは」

ユエの言葉に麻奈は唇を噛み締めた。彼はこれが何なのか分からないのだ。それはつまり、麻奈は威嚇するために撃たなければならないという事だ。

麻奈は構えていた両腕を僅かに下に逸らした。上手く撃てるだろうか。汗が手のひらにじわりと滲んでくる。浅く繰り返していた呼吸を一瞬止めて、麻奈は引き金を引いた。

パン、と思いのほか乾いた音が廊下に響き渡る。引き金を引いた瞬間、思わず目を閉じてしまった麻奈は、玉がどこに当たったのかよく分からなかった。ユエだけは自分の足元から大分離れた所に開

いた、小さな穴を見つめていた。

「俺に盾突くか……いい度胸だ」

銃を知らなくとも攻撃された事を理解したユエは、すぐさまビシャードを床に放り捨てると、麻奈に向かって近付いてきた。

麻奈は慌てて銃を構えなおす。しかし、今度はどこを狙っていいか分からない。

サルーンの予測では、威嚇で銃の威力を示せばユエの動きを封じられるはずだった。こんな風に向かって来られたら、麻奈には成すすべがない。

いっその事、急所を外してもう一度撃ってみようかとも思ったが、そんな度胸は持ち合わせてはいなかった。

「これ以上、俺を怒らせるなよ」

苛立ちを隠そうともせずに、ユエは小さく舌打ちをして麻奈に向かってくる。その歩みは決して早くはなかったが、麻奈は金縛りにあったかのように動けなくなってしまった。

もう駄目。そんな風に思った瞬間、床に放り出されていたビシャードが、ユエの足にすがり付いてその歩みを止めさせた。

「にげ……ろミナカミ」

しかし、満身創痍のビシャードではユエを止めていられるのも一瞬だった。ユエは足にまとわり付くビシャードの腕を蹴り飛ばすと、その腹にもう一度重たい蹴りを入れた。グッと声にならない声を上げるビシャード。

「逃げれば、コイツを殺すぞ」

ユエが見せ付けるように、ビシャードの背中に足を乗せた。みしみしという音が聞こえてきそうなほど、ユエはそこにゆっくりと体重をのせる。

「やめてっ」

「お前がその玩具を捨てて、これ以上抵抗しないのならば、そうしよう」

ユエはそう言ってから、否(いや)。と宙を見上げて付け足した。

「逃げるお前を捕まえるのも一興か――。鬼ごっこでもするか？」

「いいから陛下から離れてっ」

麻奈は泣きながら声を張り上げた。ユエの足元で倒れていビシャードを見ると、彼はぐったりとしたまま動かなくなっていた。

今ここでユエを説得できなければ、本当に誰かを失うことにもなるかもしれない。

麻奈は覚悟を決めた。痛い事は恐ろしいけれど、これ以上皆が傷つくのは見たくない。

麻奈は持っていた銃を、誰もいない廊下に投げ捨てた。

「ねぇユエ、貴方のしたいようにしていいよ。ユエが望むなら、元の姿を詮索したりしない。元いた国に帰ろうなんて言わない。その代わり、皆が元に戻るのを邪魔したりしないで。私たちに出口を探させて」

ユエの表情は変わらない。それでも麻奈は続けた。今自分に出来

る事を精一杯考える。

「――出口を見つけても、私は此処にずっと残るって約束するよ」

懇願するようにユエを見上げると、ようやく彼の顔に表情が浮かんだ。勝ち誇った顔。ユエは値踏みするように麻奈を見つめる。麻奈はその視線を真正面から受け止めた。今の言葉に嘘偽りがないということをユエに分からせるには、視線を逸らしてはいけないと思った。

「いいだろう」

しばらく考えた後、ユエはビシャードの背中から足を退けた。麻奈は苦しそうに咳き込むビシャードに駆け寄ろうとしたが、ユエが麻奈の手を取ってそれを阻んだ。

「今の言葉、本当だな」

ユエは怯える麻奈の手を強く握り締めると、それを自分の口元まで近づけた。麻奈は震えながら頷く。ビシャードの、駄目だ。という声が聞こえたが、麻奈はそれをあえて無視した。

その様子を満足そうに見ていたユエは、握っていた麻奈の指先を薄い唇に含んだ。湿った舌先が麻奈の指を転がすように舐め回していく。ぬめった感触に麻奈が眉をしかめると、ユエは鋭い犬歯に麻奈の人差し指を押し当て、ぶつりと皮膚を噛み切った。

「っつ」

飛び上がるほどの痛みが指先に走り、麻奈は反射的に指を引き抜いた。小さな噛み傷からは、じわりと血が滲んでいた。

ユエは唇に残る紅のような麻奈の血を、舌を出して舐めとった。薄く笑うユエはまるで生き血を啜る吸血鬼のようだ。冷たくて残忍で、そして妖しいほどに美しい。いつか、本で読んだそれにそっくりじゃないかと麻奈は思った。

更に、彼は自分の指も同じように噛み切ると、それを麻奈に向けて突き出した。麻奈は熱を持ってじんじんと痛む指を強く握りながら、目を丸くしてそれを見ていた。

ユエが何をしたいのかさっぱり分からない。しかし、今は彼に従うしかない。そう自分に言い聞かせて、麻奈はそっと床に視線を走らせた。ビシャードもジュリアンも、未だ床に倒れたまま動かない。階下に落ちたサルーンはここから見る事は出来ないが、きっと彼も同じだろう。これ以上誰も傷つけさせるわけにはいかない。

「誓え」

ユエは自分で噛み切った指を、麻奈の方へぐいと更に近づけてきた。これを一体どうしろというのだろうか。麻奈は困り果てて、ユエの赤く染まっていく指を眺めた。すると、彼は舌打ちしながら麻奈の傷ついた指を掴んだ。二人の傷口を合わせるように指を押し付け、ユエはその上からもう片方の手で固く握りしめた。

触れ合った指先がドクドクと大きく脈を打ち、まるでユエの血が流れ込んできたように麻奈には感じられた。

「今の言葉をもう一度。血に誓いを立てろ」

そう言われても、誓いなど立てたことがない。麻奈は指先からゆっくりと伝って落ちる血とユエとを交互に見ていた。

「麻奈――駄目です」

その時、壁際に横たわったままのジュリアンが、僅かに顔だけをこちらに向けた。体が痛むのだろう、顔を歪めながらも彼は必死に起き上がろうとしている。

ユエの気がジュリアンへと逸れたのを感じて、麻奈は首を振ってジュリアンを制す。そして、麻奈は息を大きく吸いこんだ。頭の中は空っぽになっていたが、意外にも口からは淀みなく言葉が出てきた。

「私たちの邪魔をしないと約束してくれるなら……私はこれから、ユエの意向に――」

従います。の言葉が出る前に、麻奈の視界が突然大きく揺れた。いつの間に立ち上がっていたのか、突進してきたジュリアンが、ユエからもぎ取るようにして麻奈を抱き上げていた。

たったそれだけの動きでも、相当無理をしているのだろう。ジュリアンの額には脂汗が浮かび、足元はかなりふらついている。麻奈の腰を抱くその手が小刻みに震えているのは、痛みのためか、それとも恐怖のためだろうか。

「ジュリアンっ」

「誓わせません。絶対にっ」

その細い体のどこにそんな力があるのかと思うほどの力強さで、ジュリアンが麻奈を肩に担ぐと、吹き抜けの柵の外側へ思い切り放り投げた。ユエが慌てて手を伸ばしたが、麻奈の体は柵を飛び越え、放物線を描いて宙に舞った。

悲鳴も上げる事が出来ずに、麻奈は階下へと落下していった。

確かに目を開けているはずなのに、麻奈には周りが何も見えなくなっていた。麻奈がその時に感じていたのは、落下するとき特有の腹の奥が冷えていくような感覚だけだった。だから、自分の落下地点でサルーンが六本の腕を広げて待ち受けている事に、麻奈は全く気がついていなかった。

気がつくと、ドンという衝撃とともに麻奈はサルーンの逞しい腕に抱き止められていた。

「そのまま鏡へ」

ジュリアンの声が上から降ってくる。しかし次の瞬間、それは彼の呻き声に変わっていた。

「そこを動くなよっ」

柵の上からユエが顔を出す。その眉は吊り上がり、顔は怒りに染まっていた。

「サルーンさん、下ろして下さい」

サルーンは麻奈を抱きかかえたまま、階段を駆け上がり始めた。踊り場の大鏡まであと数段。

鏡が鈍く光り始める。サルーンはこのまま鏡へと入る気なのだ。麻奈は慌てた。それは、ジュリアンとビシャードを怒り狂ったユエと共に置いて行く事になる。

「やめろっ」

ユエが階段を駆け降りてくる。跳躍するように段を飛ばして下るスピードは恐ろしく速い。

「サルーンさん待って下さい、ジュリアン達が――」

「あの男のした事を無駄にするな」

そう言うと、サルーンは迷いなく鏡に身を投じた。

麻奈は鏡に入る寸前、残されたビシャードとジュリアンに手を伸ばした。そうせずにはいられなかったのだ。

鏡に完全に飲み込まれる直前、ユエの指先が麻奈の手を掠めた。

しかしそれは一瞬の事で、麻奈とサルーンは冷たい鏡の中へと沈んでいった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8985t/

夕日と鏡と私のトラウマ

2011年11月26日01時46分発行